

死を見る大空

霧ヶ峰 リョク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし沢田綱吉が直死の魔眼を持っていたら……………そんなIFストーリーです。

目次

直死持つ空の始まり	1
ダメツナの学校生活	8
家庭教師来る!!	17
家庭教師とお姫様	25
出会い	35
決闘	45
死ぬ気弾	53
やりすぎ注意	64
死ぬ気モード	78
夢は語らず	88
スモーキンボム	96
怒涛の嵐	104

これが物を殺すということ	113
命の価値	122
天然な野球少年との出会い	130
イタリア帰りの鮪	139
時雨の燕	147
うつす水面	155
新たな問題	165
牛小僧の齋す大波乱、その予兆	174
十年後よりこんにちは、ようこそ惨劇	182
未来からの単独顕現	190
毒サソリと春と委員長と極限	200
ポイズンクッキング・いず・はる	

女難

風紀委員

雲雀恭弥

笹川了平

顔合わせ

普通と特別と夢

将来

敵襲と嘆き弾

獣の覚醒

220

228

237

246

254

263

273

282

292

直死持つ空の始まり

沢田綱吉という人間はごく普通、と言えはお世辞になつてしまうようなドジでマヌケで駄目駄目な少年である。

それは彼のクラスメイトをしてダメツナというあだ名を付ける程に、彼はとてもドジであつた。勉強、運動、その全てが平均より下回つていゝという、更には運も無いといゝう良いところなんて何一つ無いよゝうな、そんな少年だつたのだ。

そう、だつたのだ。

「……………っ」

ツナは病院のベッドの上で頭を抱えて目を瞑つて居る。

何故、病院のベッドの上に居るのか。その理由は体育の時間で歩いて居る際に転がつていたボールを踏みつけてしまい、転倒して頭を床にぶつけたことが原因である。

頭を強く打つたツナは意識を失い、そのまま病院に搬送されて三日間ほど生死の境を彷徨つた末、ついさつき意識を取り戻したので。

強く頭を打つたせいで脳死一步手前になつていた状態から奇跡の回復、ツナの意識を取り戻した医師は声を高々にしてそう言い放つていた。

しかしツナはそんな医師の様子とは裏腹に酷く震えていた。まるで何かに怯えているかのように。

「な、何だよ……………これ……………」

そしてツナは両目を開ける。

丁度良く鏡が視界に入っていた為、今の自分の姿を見ることが出来た。そう、出来てしまったのだ。

瞳に映っている景色にところかしこに走っている亀裂のような線、そして鏡に映っているツナの瞳は本来の琥珀に近い茶色ではなく蒼と橙色が混ざったような色をしていた。

×××
脆い、脆くて脆くて、すぐに崩れてしまう。

それがツナが一番最初に抱いた線への感想だった。

一度死に掛けたことよって獲得した報酬とも言うべきこの眼はとても酷いもので、視界一杯に広がった線を起点としてバラバラになっていく感覚を覚える。

とてもではないがこんな目、絶対に耐えられない。その上、目を閉じていてもこの線が放つ嫌な気配は決して無くなることは無い。

それだけならばまだ良かった。いや、良くは無いのだがまだマシだった。

ツナの目に映るこの線は決して脳の異常だとか、見間違いなのではないのだ。何故なら一度、親が見舞いに来て席を少しだけ外した時、この線に合わせて椅子の取っ手を果物ナイフで滑らせてみた。

その結果、木製で出来ていた取っ手はいとも簡単に切断出来た。どうやらこの線をなぞると簡単に物が切れるようになるらしい。その事実にはツナは自らの顔に手を当ててその事実には愕然とする。

こんな目要らない、こんな誰かを傷付けるだけの力なんか要らない!

沢田綱吉という少年はヘタレでドジで決して賢いわけではない。しかし、彼という人間はとても優しい。

そんな彼がこんな目を、簡単に誰かを傷付ける力を持ったとして笑ってそれを受け入れることができる筈が無かったのである。

「……………いつそ、自分の目を潰せば——」

自らの眼下にある両の手を見つめ、指を尖らせて自身の眼球にゆつくりと近付けていく。

そして自らの手で直接眼球を潰そうとする一秒前になり、その女性は現れた。

「その目を潰した程度で、それは消えないわよ。沢田綱吉君」

「っ、誰……………!!?」

突然この部屋に現れたのは緑がかった黒髪的女性だった。

恐らく自分の母親よりは年齢は下と思われる外見に左目の下には花のようなマークがタトウ、もしくは刻印として刻まれていた。そしてその手には赤子が眠っており、恐らくこの女性の子どものだろうと考えられる。

明らかに日本人では無い容姿の女性とその女性の子どもと思われる赤子がこの部屋に居たということにツナは驚きの表情をして女性を見つめ、ある事に気がつく。

「え、線が見え辛い……………それに、線の色がオレンジ色……………」

ツナの目から見て女性の全身には線が殆ど無かった。

全く無いわけでは無いが、それでもこの目を手に入れてから殆ど毎日と言っても良い程人体に見たくも無い恐怖の対象である線がピツシリと刻まれていた。僅かに、それこそ本当に線の数が少ない人間に出会うという変化にツナは思わず戸惑ってしまう。

しかしそれ以上に女性の身体を走っているオレンジ色の線がとても綺麗だった。線を見てそのような感想を抱いたのは初めてだった。

そして首から下げているオレンジ色のおしゃぶりには線が一つも見えなかった。

ツナの驚き様を見ていた女性は僅かに感心、いや、素直に驚いた様子を見せる。

「これは驚いたわ。まさかそこまで見えるなんて……………かなり性能が良い、なんて話じゃないわね」

女性は心からの動揺を隠しながらツナの瞳を見つめる。

成る程、これは酷い。少なくともこんな優しい子が持つても不幸にしかならないだろう、と女性は思う。

しかしこの子を偶然にも知ることが出来たのは本当に幸運で、彼女にとつては正しく救いの神と言つても差支えが無いほどだ。彼にとつては不要で、望んでもいない代物であつたとしてもだ。彼女達からして見れば本当に利用できる力なのだ。

こんな若い少年を利用するということに女性は自己嫌悪をしながらも必死になつて己に言い訳をし、少年にあることを告げる。

「綱吉君。初対面で、しかも勝手に貴方の病室に入り込んだ私を信用しろとは言えないけれど、私は貴方のその眼のことを知っているわよ。その対処方法もね」
瞬間、ツナは目を見開いて女性に詰め寄る。

しかし暫くの間ずっとベッドの上で過ごし、激しい運動をしていなかったツナは足をもつれさせて転倒する。

もしくはあまりにも慌てすぎた上に、生来のドジが今ここで発動しただけなのかもしれないが。

「だ、大丈夫？　綱吉君……………そんなに慌てなくても大丈夫だから」

「い、いつつ……………だ、大丈夫です……………そ、それよりもこの眼のことを貴女は

「どうやら大空の死ぬ気の炎なら直死の魔眼の力を抑え込めるようね。綱吉君だからこそ意味があったのかもかもしれないけれど」

「あ、ありがとうございます!! 俺、この眼鏡が無かったら——!!」

「良いのよ。別に気にしなくても。それに私の方も君にお願いがあんだから」

そう言うのと女性はツナが掛けていた眼鏡を上上げる。

突然眼鏡が無くなったことでツナの瞳に再び線が映り込むが、やはり眼鏡があるという安心感がある為、あまり取り乱さなかった。

「君のその眼はね。直死の魔眼という、生きているならば神様だって殺すことができる特殊な眼なの」

「い、生きているなら……………」

「勿論、流石にそこまでは出来ないと思うわ。でもね、その眼は使い方次第では不治の病に掛かった人でさえ助けることができる、本当に凄い力なのよ」

だからこそ、その可能性を予知した時に女性は決めたのだ。

この少年の善意を利用する形になるとしても、娘を助ける為に。

「だから君にお願いがあんの。私の娘、ユニにかかっているある呪いを、全てなんて無茶は言わないわ、せめて短命の呪いだけでもその眼を使って殺して欲しいの」

それは沢田綱吉が小学校に通っていた時の出来事であった。

ダメツナの学校生活

山、海と自然に囲まれた上に動物園や大型ショッピングモールが建設されている町、並盛町。

その町には並盛中学校、略称並中と呼ばれる校舎が存在する。

曰く、その学校に在籍する風紀委員長はこの並盛町の表と裏、その双方の支配者であり、彼の決定一つで卒業すらせざるに在る等、黒い噂や変な話に話題が欠かない学校でもある。

最も並中に在籍する生徒全員がそこまで破茶滅茶かと言われればそういうわけでもなく、基本的には名の通り大でもなく、小でもなく、並みなのだが。

「イエーイ!! ピースピース!!」

「おいおい。またロンシャンの奴馬鹿やってるぜ」

「本当にいつも能天気で良いよなあいつ。あー、俺もあいつ程能天気になれたらなー」

そんな学校の校舎では平凡な日常といっても差し支えがないくらいの賑やかさで生徒達が謳歌していた。

いくらとても怖い暴君としか形容出来ない風紀委員長がこの校舎を根城にし支配し

ていたとしても、それが自分達に危害を向かなければどうでも良いのだ。

事実、生徒は平和を満喫していた。

「へぶ!!!?」

今年度からこの学校に入学した沢田綱吉以外は――

「おいおい。何やってんだよダメツナあゝ」

顔面にボールが直撃し、その勢いで床に転んだツナに男子生徒は駆け寄りながら呆れた表情をする。

後頭部を打ったのか、頭の後ろに手を当てて涙目になっている。それに余程激しく転んだ為にもいつも掛けているあの瓶底眼鏡が床に転がっている。

男子生徒はやれやれと言わんばかりに肩をすくめて転がっている眼鏡を手を取ってツナに渡す。

その時、一瞬だけツナの瞳がオレンジと蒼の色へと変化しているようにも見えたが、男子生徒は気の所為だと思い込んだ。

それから授業が終了し、男子生徒達はツナに箒を持たせて足早に体育館を去った。

曰く、お前のせいで負けたんだから責任取ってお前がやれ、と。

「うう、何で俺がこんな事をやんなくちゃいけないんだよ……」

当然の事ながら何でそんなことを態々やらないといけないのかと言わんばかりに、ツ

ナは眉間に皺を寄せて頭を抱えている。

まさかボールが顔面にぶつかるとは思わなかった。

心の中でそう吐き捨てながらツナは無理やり押し付けられた箒を忌々しそうに睨み付け、元あつたロッカーに戻す。

「こんな事やつてられないよ」

溜息をつきながらツナはさぼろうと教室に向かう。

今現在、時間はお昼を過ぎ昼食を取っている時間帯だろう。

ならば今なら鞆を持って帰ることも出来る、と普段は全くと言っても良いほど機能しないツナの頭が考えを纏める。

この思考を普段の勉強でも出来れば良いのとは何度か思ったことはあつたが、残念なことにはそれは全く機能していない。機能するとしたら日常生活では絶対に必要のないことだろう。

その事実にはツナは泣きたくなり、現実から目を逸らす。

「ん、あれは……………」

偶然にもツナは窓の外に居た人物を視界に収める。

「……………うちのクラスの笹川さんに、その友人の黒川、だよなあ」

そう言つてツナは何気無しに笹川京子とその友人の黒川花を見つめる。

笹川京子、その女子生徒を一言で語るなら学校のマドンナの存在だ。

非常に暑苦しいボクシング部の主将である笹川良平の妹で、兄に似ずとても可愛らしい容姿をしている。その上性格も悪くなくむしろ良い。と、いうか直球で言つてド天然だ。

そんな彼女を心配して友人として一緒に居る黒川花も、性格はちよつときついが人として優しい方だろう。

そんな二人が何であんな所に居るのだろうか、そう思うツナであつたが二人に近づいていく男の姿を見て察した。

「あれつて持田先輩？」

今近付いたのは持田剣介、ツナよりも一年上の上級生で先輩だ。

現在は剣道部の主将で笹川京子とは同じ委員会に所属している。

そして現在、笹川京子と付き合っているという噂があるのだが——、
「あの噂つて本当だつたんだ」

確かに噂通りであつても納得は出来た。

持田剣介が笹川京子に好意を持っていてもおかしくはない。

「まあ、だからどうしたつて話なんだけどき」

この学校で笹川京子を狙つていない男子生徒なんてほぼ居ない。

出来れば、あわよくば付き合いたい。彼氏になりたい。彼女になりたい、という少数派も居る。

それに含まれないのはこの学校の風紀委員、そして風紀委員長。彼女の兄である笹川良平や野球少年でクラスからの人望も熱い山本武くらいなものだろう。

当然ながらツナも笹川京子を狙っていない。

確かに可愛いとは思う。将来美人にもなるだろう。

だが付き合うとかそういう話はどうしても頭に浮かんでこない。

もしあの人に出会っていないければ彼女に惚れていたのかもしれないが。

「さて、帰るとするか」

そう宣言してツナは体育館を後にする。

その後姿を遠くから見つめている存在を知らずに――。

結論から言つて、ツナが校舎から逃げ出すのは非常に楽な出来事だった。

この日は同じく授業をサボっている不良達と遭遇しなかったこと。そして風紀委員長に出会わなかったことだ。

故にツナの脱出という名のサボりはほぼ成功したことになるだろう。

「お前らあ!! っつちに來たらこのガキの首を搔つ切つてやるぞ!!」

歸りに刃物を持った男に人質にされさえしなければ。

本当にどうしてこうなったのかと叫びたくなる不幸っぷり。思わず心の中で悪態をつく。

しかしだからと言ってどうすることも出来ずにツナはそのまま人質として男の腕の中に居た。

「ぐ、くそっ！ その子を離せ！ 今なら——」

「うるせえええええええ!! 俺はもうおしまいなんだよ!! ちくしょう、あんな奴らの言うことを聞いたから!!」

警察官の忠告を男は耳にせず、そもそも全く理解していない様子で取り乱していた。

まるで薬でもやっているかのように、だ。

正直な話し、この男は明らかに正常な状態ではない。その腕には注射の痕らしきものが複数あった。

間違いなく、薬をやっているだろう。

「はあ……………」

その事に対してツナは思わずため息を漏らす。

全く、どうしてこんな事に関わらなければいけないのだろうか。

確かにサボりはしたがここまで酷い目に合う必要はないだろう。

心の中で苛立ちを募らせたツナは眉間に皺を寄せる。

そして男がナイフを振り回した際に、自らも頭を垂れて掛けていた眼鏡を地面に落とした。

「……………あんたは、自分の弱さを他人のせいにして言い訳しているだけじゃないか」
「……………おい、ガキ。今何て言った？」

ツナの発言を聞いた男は明らかな怒りを見せながらツナの首にナイフをあてる。

首にあてられたナイフが皮膚を裂き、僅かに血を流す。

その様子を見ていた野次馬は息を飲み込み、悲鳴を上げたりする。

しかし、ツナは自らの意思を明確にさせながら男を睨み付け、宣言する。

「あんたがこうなったのも、全てあんたの自業自得だ。他人のせいにする前に、そうならないよう自分を戒めなかったから、すぐに手を出せる一時の快楽に手を出したんだろ！」

「て、てめえ!!」

「お前が終わったのも全部お前の責任だ！ とつとつナイフを捨てて自首でもしろよ!!」

そう言つてツナは男が怒り狂う前に人差し指で男の身体をなぞる。

本来なら、そのような行動をしたところで効果なんて無く、そもその前に激高した男

に首を切られていただろう。

だが、ツナは特別である。

以前死にかけた事によってツナはある異能を手に入れていた。

その名は『直死の魔眼』といい、物事の死を線として見ることができるようになる眼である。

ツナは己の瞳に映った男の死の線を一本指でなぞったのだ。

「なっ、がっ!!?」

その結果、ツナを抱えていた腕が突如として脱力したのである。

ツナはその隙を見逃さず、振り返って男の身体にある線が重なっている箇所に指を突き付けた。

次の瞬間、男の顔から狂気が消え失せ茫然自失となる。

「……………いい、今だ！ 確保!!」

人質であるツナが解放された事によって警察官達は全員でナイフを持った男を取り押さえ始める。

その光景を見ていたツナは首に出来た切り傷に指をあて、血を掬い取って舌で舐める。

「本当、この後が憂鬱だよ」

この後、間違いなく自分は警察署に連れていかれるだろう。

そうなったら母さんになんて言おう、ツナは自分の未来が青くなっていくのを実感していた。

だが彼は知らなかった。この後、今回の出来事が天国に感じるほどの不幸を味わうことを。

「ほう、中々度胸があるじゃねえか。こりやディーノよりは期待できそうだな」

「だから言ったじゃないですかおじ様！ ツナさんは凄い人だって!!」

一連の行動を見ていた二人のことを、ツナは知らなかったのであった。

家庭教師来る!!

「もうツツ君たら、勝手に学校サボっちゃったりしてー。昔はこんな悪い子じゃなかったのに」

「……………ちよつとやめてよ母さん。俺も後悔しているんだからさ」

正直な話、本当に後悔していた。ツナとしてもあんな騒ぎに巻き込まれるつもりなんて無かったのだ。しかし運命は残酷かな、ツナは通り魔に人質にされてしまい、結果として解決したものの警察に事情聴取&こんな時間に出歩いていたということで補導されてしまったのだ。

踏んだり蹴ったりなんて話しじゃない。

これならまだ学校に居た方が良かった。心の中で溜め息をつきながらツナは奈々に視線を向け、懇願する。

「だからこの縄を解いて下さい!」

そう、ツナは現在、居間にて天井から吊るされて居た。

全身を、特に両腕が背中縛り上げている状態で、プラーンプラーンと吊るされていたのだ。

そう、まるで振り子のようにプリーンプリーンと。

「ダメよ。だつてツツ君つてば縄を解いたら逃げ出すじゃないの」

「くそ、せめて手さえ動けば……………」

奈々の言葉にツナは悔しそうに歯噛みする。

そんなツナの顔を見て奈々は溜め息をつきながら呟く。

「ほんと、昔は気がそこまで強く無かつたのに、どうしてなのかしらねー」

ツナは奈々の言葉に思わず顔を顰める。

それはそうだろう。今掛けているアリアから貰った眼鏡で見ずに済んでいるがあんなものを四六時中見て居たら気が強くなつて当たり前だ。そう心の中で吐き捨てる。

気を強くしていないと一気に弱音を吐きだしてネガティブになるのだ。じやなきやこんな風にならない。元々ダメツナでネガティブ思考であるツナは自分にそう言い聞かせながら改めて自分の現状を見てため息をつく。

「どうしてこうなつたんだ……………」

「おめえが学校をさぼつたからだろ」

「ひげぶっ!!」

何処からともなく声が出したと思つた瞬間、ツナの後頭部に土踏まずがフィットする嫌な音が響いた。

後頭部に走る激痛と衝撃にツナの首からグキッと嫌な音が響いて意識が遠のいていく。

「あ、ツツ君。この子が今日から貴方の家庭教師になったりポーン君よ」

「ちやおつす。よろしくな」

薄れていく意識の中で最後に見て、聞き取れたのはのは母親の声とニヒルな笑みを浮かべたボルサリーノの帽子をかぶった赤子であった。

×××
意識が暗黒の海の中に沈んでいく最中、それを見た。

明らかに此方の世界とは異なる、本当に異世界としか言いようが無いその世界で十人の男女が巨大な獣から距離を取っていた。

獣はその口に竜を連想させるような巨大な爬虫類を連想させる生物を啜えており、次の瞬間にはバリバリと咀嚼していた。

皮を突き破り、肉を引き裂き、骨を噛み砕く。バリバリと音が鳴り響き、口の中いっぱい血の味が広がるのがとても心地良かった。

その光景を見ていた十人の内の一人は悔しそうに地面に拳を叩きつけた。

「畜生……………!! あいつ、あいつのせいで……………!!」

「よせ。落ち着くんだ——、我々では奴には絶対に勝てない。いや、そもそも滅

「ぼすことが出来るのかすら分らんがな」

地面に拳を叩き続ける男を、変てこなマスクを被った男が制止する。

「だがそれも今日までの話だ。遂に、作ることができたこの——の力なら、奴を封じ込めることができる！」

そしてコートの内側に手を突っ込んである物を取り出す。

取り出されたそれは七色の鮮やかな大きな石であった。それぞれ一つ一つが手の平に収まるくらいのサイズで、野球ボールぐらいの大きさだ。色はそれぞれに分かれており、虹の配色、つまりオレンジ、レッド、ブルー、インディゴ、グリーン、ヴァイオレット、イエローの七色。それぞれの色の石としてそこにあつた。

特にオレンジの石は特徴的な形状をしており、何処かで見たとあるような形をしている。

「この石は星の力そのもの。これならば奴を封じ込めることができる!! まあ、多少予想を超えて時間とか平行世界とか私の予想を超えた力も持つてしまったが」

「おい、本当にそれ大丈夫なんだろうな?」

「私の予想を超える力を持ったんだ。それぐらいのことならば可能だろう。最も、全て予想に過ぎないがね——それに、もう時間も無い」

マスクを付けた男が視線を向けるように促す。

視線の先に映ったものは地獄としか形容できない光景だった。

あの獣が一步動く度に大地が凍り付いていき、生命が死に絶えていく。

「セピラ、君もそれで構わないかね」

男に声を掛けられた女性も頷き、全員がマスクの男の意見に同意する。

「では、始めようか」

マスクの男がそう言うのと全ての石を放り投げる。

そして七つの石からそれぞれの色の鎖が出現し、粗方食い尽くした獣に向かって飛来する。

鎖は獣を抑え込み、拘束し、縛り上げる。それに絶叫を上げながら獣は抵抗を始めるも、かなり頑丈な鎖なのかすぐに逃げ出すことはできなかった。

しかしそれも長くは続かない。そう判断した十人の男女は石に力を込める。

すると獣の背後に巨大な穴が出現し、獣はその穴に吸い込まれて消え去った。

吸い込まれる直前に、憎悪を抱いた瞳で男たちを睨み付けながら。

「……××……ッ、最悪の夢を見た」

酷く痛む頭を押さえながらツナはベッドから起き上がる。

随分と前に見たことがある懐かしい夢を見た。もう夢の内容など殆ど覚えていない

というのにそんな感想しか出てこない。これがデジャヴというやつなのだろうか。いや、そもそもこの夢を自分は何処で見たことがあっただろうか。そう、あれは確かこの眼を手に入れる原因となったあの日だ。

その事を思い出したツナは何故か無性に情けなくなってくる。古今東西、あんな格好悪い、情けない方法でこんな能力を手に入れたのは自分だけだろう。こんな事を他人に話せる筈がない。笑われるどころか変な目で見られること間違いなしだ。

それはそうとして、どうして自分はベッドで眠っているのだろうか。ベッドに入った記憶が無いのだが。

心の中で疑問を抱いていると、視界の端に何故か見たことがあるボルサリーノを被った赤子が居た。

「よっ、目覚めたかダメツナ」

そして初対面と同時に酷いあだ名を言われた。

「今日からお前の家庭教師になることになったリボンだ。よろしくな」

「何が「よろしくな」だ。ほら、子どもはとつとと親御さんの下に帰った帰った」

意識を取り戻したツナはリボンと名乗るこの赤ん坊に諭すように声を掛ける。すると顎に衝撃が走り、大きく仰け反って眼鏡が吹き飛んだ。

蹴られた。今、間違いなく蹴り飛ばされた。しかも全く見ることが出来なかった。そ

れどころか殴られて仰向けになった瞬間にようやく身体が認識した。

明らかに普通の赤ん坊じゃない、その事実を思い知らされたツナは己の眼でリボーンを視界に収める。

瞬間――、

「がっ!!?!」

脳に掛かった負荷に悲鳴を上げた。

普段使っていないなかった回路が強制的に稼働し、激痛が走る。

「成程な、急に使うとそうなるのか」

頭を抱えて悲鳴を上げるツナを見てリボーンは興味深そうに眺める。

そして一通り眺め終わると今度は転がっているツナの後頭部に蹴りを叩き込む。

後頭部に土踏まずがフィットする感覚を覚えたりボーンは情けない悲鳴を上げるツナに話しかける。

「俺はお前を立派なイタリアンマフィアのボスに育て上げる為に来た。と、いうわけですよらしくな」

ニヤリとニヒルな笑みを浮かべるリボーン、それに対しツナは今もなお悲鳴を上げながら転げまわっていた。

「少し黙れ」

そして再び後頭部に土踏ますがフィットすることになるのは言わなくても分かる話である。

家庭教師とお姫様

「——で、俺がそのあさり一家の次期後継者、と……………」

「ボンゴレファミリーだ。九代目から直々に依頼を受けてお前の家庭教師となったりボーンだ。よろしくな」

何が「よろしく」だ。さっき二回も蹴つただろうが。

ツナは心の中で怒りに震えるも、間違いなく勝てないと分かってしまった為、諦める。どうしても勝てるイメージが湧かない。線をなぞることも出来ないし、何よりそもそもこの赤子に浮かんでる線をなぞったところで本当に死ぬのか疑わしい。

最も本当に殺すなんて選択肢を選ぶわけじゃ無いが。

「で、何で俺がその次期後継者に選ばれたんだよ。自分で言っちゃんだけど俺、この眼くらいしか取柄無いんだけど」

そう言つてツナは自身の眼を見せる。

蒼と橙の虹彩を持つ、普通の人間なら絶対にありえない配色を持つその瞳は『直死の魔眼』と呼ばれている特殊な眼である。その瞳は死を情報として視覚化し、死そのものを線や点として見る事が出来る異能であり、その線をなぞる事で殺すことが出来るの

だ。その線を切れば簡単に切り裂くことができ、二度と修復が出来なくなり。使いようによつては不治の病でさえ殺すことが出来る力だが、日常生活には危な過ぎて使えない異能なのだ。しかもかなり頭を使うし。

眉間に皺を寄せているとリボーンは顔を横に振る。

「いや、俺はお前のその力に詳しい訳じゃないからな。だがその瞳があるから選ばれたわけじゃねえ。単純に他の後継者が全滅したからだ」

淡々とある事実を伝えたりリボーンの言葉に、ツナは思わず凍り付いてしまう。

「最有力候補だったエンリコ・フェルミは抗争中に射殺され、No. 2のマッシーモ・ラニエリは水中に沈められ、秘蔵っ子のフェデリコ・フェリーノはいつの間にか骨になつていた」

「秘蔵っ子が骨になるとかどうということだよ」

「ちなみにこれがその時の写真な」

「わー、綺麗に撮れてる。特にマッシーモさんなんか水中でもがき苦しんでいる姿まで。写真撮った奴なんで助けられないだよ」

死ぬ直前の控えめに言つて見たくも無い写真を見せられたツナは冷静にツツこみを入れる。

「驚かないんだな」

「今更でしょこんなの。俺なんか眼鏡してなきや常に人間がバラバラになる姿を幻視するっていうのに、死ぬ直前の写真なんか見せられたところで何も思わないよ」

「そうか。それならこっちの方も見せても大丈夫そうだな」

そう言つてリボンが見せてきたものは数枚の写真だった。

どうせ似たような写真だろ、そう思ったツナは受け取つて写真を見て、込み上げる吐きを抑えきれずにぶちまけてしまった。幸いなことにリボンが咄嗟に用意していた袋に吐き出したおかげで汚れることは無かつたのだが。

「良かったな。お前の感性は一般人そのものだ。死を見る目を持つているとは聞いていたが予想よりもまともそうだなによりだ」

「い、いきなり何見せて来るんだよ……………!! この腐れ外道!!」

「特殊性癖持ちのゲイカップルの行為最中の写真を見せただけだもん!!」

「何が『だもん』だよ! つかこれのどこがまともな基準になるんだよ! こんなのでまとも扱いされても嬉しいどころかむしろ悲しくて涙が出てくるよ!!」

「だろうな。俺だつて怒り狂う」

怒りに身を任せたままツナはリボンから受け取つた写真を引き裂き、破き、粉々になるまで千切つた後、窓を開けて外に放り投げた。誰が好き好んで筋肉モリモリマツチヨマンのスト●ト●写真を残骸であつたとしても置いときたいものが居るのだろうか。

心の中で吐き捨てた後、口の中に残る酸っぱく苦い胃液の味に再び吐き気を催したツナはふらふらとした足取りで立ち上がる。

「何処に行くんだ？」

「トイレだよ。暫く思い出したくも無い……………」

「そうか。なら先に言っておくがな、この家にはもう一人来ているんだよ」

「リボーンの連れ？ 出来れば今すぐにもさっきの話を無かつたことにしてお前を宅急便で送り返したいところなんだけど——」

そう言いながら振り返るツナであつたが、振り向いた先に居たのは此方に拳銃を突き付けるリボーンの姿だつた。リボーンは容赦なく銃の引き金を引いて発砲する。

幸いなことに弾丸はツナの頬を掠めるだけで済んだものもし動いていたら間違ひなく死んでいたということに恐怖を覚える。

「もしアイツを泣かしたら笑顔しかできない身体にさせてやるからな」

「え、何それ怖い」

「一応言っておくがこれでも生温い方だからな。奴等はお前の命を狙っている」

「……………それってマフィアのボス候補的な意味でよね？ そうだと言つてよ」

舌打ちをするリボーンの姿を見てどんとと青褪めていく顔を隠そうともせず、ツナは必死になって下に降りていく。

何で、どうしてあんな殺気を向けられなくてはいけないんだ。

心の中で恐怖を覚えながら下に降りていく。吐き気はもう感じなかった。

恐怖を忘れる為にツナは台所に入り胃液の味を拭い取る為、口の中を洗い流す。

途中で僅かに赤い液体が混じっていたのは気のせいだろう。気のせいだと思いたい。

「……………もう、今日は何もしたくない」

これ以上何かあると間違ひなく体調を崩す、そう確信したツナは早めにご飯を食べて寝てしまおうと考え居間に向かう。

「母さん。さっきのことは悪かったから何かご飯食べたい、ん……………だ、けど」

眼鏡を掛けながら居間に入った矢先のことだった、見覚えのあるおかつぱ尻尾の少女が楽しそうに自分の母親と話をしていたのは。そこに居るのは本来、この家はおろか日本に居ることもなく、故郷である筈のイタリアで母親と過ごしているはずの少女であった。

いや、まさかそんなことがあるわけない。あの子があの暴君自称家庭教師の同行者なわけがない。あんな可愛い子がマフィアとか腹黒い世界に関係があるわけが――

そう思っているとおかつぱ尻尾の少女、ユニが此方に気が付いたのか振り向いた。

「あ、綱吉さん！ お久しぶりです!! リボンおじ様が何か変なことをしませんでし

たか!？」

その発言を持って、この良く知っている少女がリボンが言っていたもう一人であるということを知らされる。

どうしてだろうか、さつきから胃痛が酷い。しかも少し視線を逸らすとリボンが何故かライフルをこちらに向けている。その事実には泣き出しそうになってしまう。

しかし泣いてなんかいられない、ツナは眼鏡を外してユニの傍に近づいて座り込む。「ううん。大丈夫だよ。それにしても前あつた時よりも背が大きくなつたんじゃないかな?」

「そ、そうですか? 私成長が遅いと思うんですけど……………」

「そんなこと無いよ。それを言ったら俺なんて小柄だし……………」

出来ればもうちよつと身長が欲しいんだけどなあ……………心の中でそう呟くツナだった。

もう少し身長が伸びればきつと運動だつてもう少しマシになるんだろうけど。

「ユニはまだ子どもだし、身長が低くても気にしない気にしない」

「でも私……………」

「それにさ。ユニには焦らないでゆっくり大人になってほしいんだよ。大人になつたユニはきつと凄く美人さんだと思うけど、今のユニも凄く可憐だからさ」

「は、はい……………!!」

「まあそんなユニのお婿さんになる人は羨ましく思うよ。だってこんなに可愛くて素敵なお嫁さんを貰うんだからさ」

「そんな……………沢田さん、私はそこまで……………」

ツナの言葉にユニは顔を真っ赤に染めてもじもじとする。

その様子を見てツナはユニの頭を軽く撫でる。リボンと来たと聞いた時はショックが強かったが、だからといって妹のようにかわいがっているユニの事を嫌いになるわけがない。

そう思った瞬間だった。何故か物凄い殺気を向けられたのは。

リボンではない、この殺気は外からだ、それも複数も。しかもただの殺気じゃない。強い怒りと憎悪、嫉妬に満ちた殺意だった。

再び恐怖で身体を震わせるツナであったが、そんなツナに母親である奈々は「あらあら」と笑みを浮かべている。

「でもどうしてこつちに来たのさ。アリアさんはどうしたの?」

「えっと、それなんです……………」

「ツツ君。少し大事なお話があるの」

何故この日本に母親と一緒に来なかったのか、その事を聞こうとするツナであったが

奈々がインターセプトを決めて話に割り込んでくる。

「どうしたのき母さん。大事な話って、後で俺一人で聞くけど」

「ううん。ユニちゃんにも関わって来るから二人でちゃんと聞いてね」

どうしてだろうか、物凄く嫌な予感がする。

今すぐにでもこの場から逃げ出してしまいたくなる気持ちになっってしまう。だがそうすればリボンと外で殺気に向けて来る彼らにリンチにされる。この瞳の力があればある程度は抵抗できるだろうがきつと無意味だろう。

そしてツナは母親から告げられる死刑宣告にも等しい言葉をただ待ただけだった。

「実はツツ君に婚約者が出来たの」

出てきた言葉でツナは言葉が失った。

「……………母さん、婚約者って誰が決めたの？」

十中八九リボン、いや、件のボンゴレファミリーとやらだろう。

大方政略結婚だ。心の中で結論付ける。一体だれがこんなダメ人間と結婚するといふのだろうか、それに対して興味が無いわけじゃないが少なくとも受け入れられるものじゃなかった。

こんな死を見るような男と結婚するなんてあまりにも哀れだ。

「ツツ君が良く知っている人よ」

「……………父さんか、帰ってきたら覚えてろよ」

外国で石油を掘っているという父親に対して殺意を募らせる。

「つたく、俺なんかには婚約を申し込むなんて、物好きな人も居るんだね」

「沢田さんは『なんか』じゃありませんよ!!」

「まあまあ、落ち着いてよユニ」

そう言つてツナはユニを己の膝の上に乗せて母親の顔に視線を向ける。

「で、相手方は納得してるの?」

「ええ。ツツ君のお嫁さんのお母さんも『ツナ君になら安心して任せられるわ』つて言つていたもの!」

「ん、んん?」

おかしい、今の話を聞く限り相手の母親は自分を知つていてというのだろうか。

疑問を隠しきれなくなったツナは奈々に尋ねる。

「ねえ、母さん。俺の婚約者つて、誰なの?」

「あらやだもう。ツツ君が今抱きかかえているじゃないの〜」

「……………え?」

奈々の発言にツナは目を丸くして膝の上に居るユニを見やる。

するとユニは顔を凄く真っ赤にしてツナの方を向いた。

「えっと、末永くお世話になります。つ、綱吉さん………いい、いえ、こういった方が良
いんでしたね。あ、あなた——」

ユニがそう呟いた瞬間にツナの胃が激しく痛み、外からの殺意が濃くなつたのは言う
までもない話である。

出会い

「……………深く、胃が痛いです先生」

「胃薬ならあるぞ」

両方の瞳から涙を、口からは血を吐き出すツナを見てリポーンは何故か持っていた胃薬を投げた。投げられた胃薬は弧を描きながら宙を舞い、ツナの手に収まる直前に何故かそのまま落下し、地面に落ちた。パリーンと音を立てて砕け散るガラス、そして中に入っていた薬が地面に散らばった。

明らかに自分の手に届いていなかったのだが、そう疑問をツナに尋ねようとするのだがその前にリポーンは口を開き、

「ちゃんと取れよダメツナ」

罵倒を浴びせてきたのであった。

「……………ねえ、リポーン。もしかして俺ってなんかしたかな?」

「いや? お前は特に悪いことはしてねえな。強いて言うなら——」

「強いて言うなら?」

「お前に運が無いってことだな」

改めて突き付けられる事実にはツナはため息をつき、今もなお向けられ続ける殺意に辟易する。

一晩中向けられていのは正直辛かった。寝れはしたが休めなかったのだから。

恐らくこの殺意を向けているのは＼あたりだろうと確信しながら、ツナは眼鏡を外して取り出したシャープペンを自らの腹部に突き刺した。唐突のことにリボーンの眉が少しだけ吊り上がったが、ツナは痛む様子を見せることなく息を吐くとシャープペンを引き抜いて鞆の中にしまう。

「おい、今のはなんだ？」

「ちよつと胃痛が酷いからね。この眼でその原因を見つけて殺したただだよ」

ちなみにこういう使い方なら身体を傷つけないんだよ、そう言つてツナは傷一つついていない制服を見せつける。

「どうやらその眼はかなり便利なようだね」

「そうだね。こういう使い方しかできないならそれで良かったんだけど。と、いうか他の機能とかいららないんだよ！ おかげでこの眼鏡をかけてなくちゃいけないし……………」

そう言つてツナはアリアから受け取った瓶底眼鏡を手で弄ぶ。

「眼鏡は嫌なのか？」

「あまり好きじゃないかな。でもつけてないと日常生活が大変だし」

ただでさえ負担が大きいというのに何故態々外して生活しなくちゃいけないのだろうか。

楽する手段があるのならそつちを選ぶのは当然の帰結であった。

でも、やっぱり瓶底眼鏡は正直無いと思う。

「本当、どうしてこんな能力手に入れちゃったんだろうかな」

「だがその能力のおかげでユニと、そしてアリアが救われたんだ」

「その話も知ってたか……………でもアリアさんには何もしてないよ俺。と、言うか出来なかった。ユニは線が凄く見えやすかったんだけど……………アリアさんは、その」

「そうか」

ツナの言葉にリボーンは顔を俯かせ、それでいて何かを納得したような表情をする。

「それで。俺はどうだ？」

「……………ごめん、多分今のままだとできない。やるとしたらもうちよつと深く見ないといけないと思う」

「今の言葉、俺やアリアの前以外で言うんじゃないぞ。特にパイパーやヴェルデにはな。

お前のその眼は俺達に対してあまりにも蠱惑的過ぎる」

「分かったよ。確かに、不治の病の人とかにこのことを話すと凄く駆け寄ってきそうだ

からね。そこまでは出来ないんだけどさ」

例えばの話だが、全身に癌が転移した人間は例え病巣を全て殺したとしても助かりはしないだろう。何故なら既に全身が食われているから。無かったものを無かったことに出来やしないのと同じように、この眼はただ殺すだけの力。決して癒す力ではないのだから。

最低限生きる力が必要なのだ。そういう意味でユニは産まれたばかりの赤子だった。だから全身に、そして魂にすら蝕んでいたナニカとの繋がりを徹底的に絶ち殺し尽したのだ。長い時間をかけて、ゆっくりと少しずつ線を断つていって、もう普通の人間となんら遜色が無い程度までには繋がりを絶つことが出来たのだ。

しかし、アリアに対してはそれは出来ない。その理由は恐らく、あのオレンジ色のおしやぶりを持っているからだだろう。そしてそのおしやぶりをアリアが持っているから繋がりが薄かったユニとの繋がりを絶てたのだろう。

「……………なんで、アリアさんはあんな事をしたんだろうか」

心の中でツナはアリアという女性とその娘であるユニの姿を思い浮かべる。

昨日、アリアの娘であるユニがツナの婚約者になった出来事の一件、どうして自分なんかを婚約者にしたのだろうか。確かにユニと知り合いである自分を選ぶのは何となく分かるし、何より仮にもボンゴレファミリーと言うイタリア最大のマフィアの後継者

候補なのだ。婚約者になるのもあり得ない話ではないだろう。

しかし、だからこそ解せなかった。アリアはツナの眼を知っている。その能力の危険性も。

そんな危険人物に愛娘であるユニを託すのだろうか。そもそもとしてユニにはもつと相応しい人が居るのではないかと思う。

だから昨日はユニを泣かせないように「少し考えさせてね、ちよつと色々衝撃が強すぎるから」と説得し、内容を有耶無耶にして切り上げたのだ。

「ちなみに言っておくが婚約者の件に関してはユニがアリアに頼み込んだんだぞ」

「えっ!? 何でどういふことなの!!? ユニは俺なんかよりもずつと聡明でとっても良い子なんだよ!? なのになんでこんなダメツナなんかを……………」

「なあツナ。お前ユニと一緒に居た時もあつたつて言つてたよな」

「う、うん。そうだけど……………」

リボーンの問いにツナは昔のことを思い返す。

イタリアに旅行に行った時、父親に連れられて十ヶ月近くイタリアで過ごした時、そしてユニが日本に遊びに来た時の出来事を。

「その時に何か無かつたか?」

「……………誘拐とか襲われたりとか色々あつたよ。ユニを狙つたものがね。まあその

都度俺が撃退していたけどさ。それで大怪我を負うこともあったよ。何度もユニに泣かれたし、その度にあの子は『私なんかを守ろうとしなければ』って自分を責める時も何度もあったよ」

「……………ダメツナって呼ばれている割には度胸はあるな。複数回もあったんだろ？
なのにどうして止めなかったんだ？」

「決まっているよ。守りたい、大切な人（妹分）だからに決まっているよ。大切な人（妹分）を守るのに理由なんかいらないだろ」

あの時、アリアは自分にこの眼の使い方方を教えてくれた。

「そしてそれと同じ位の勇気も貰ったのだ。恐怖に怯えていたらきつと自分は狂ってしまう。」

対して自分は変わっていない。だから勇気を出して前に出たのだ。

その結果、守れたものがあつた。こんな壊すことしかできない自分でも守れるもののできたのだ。なら全力でやるしかないだろう。後悔しないように頑張るしかないのだから。例えばこの身が壊れることになったとしても。

「成程理解した。ユニにとつてお前がどんな存在なのかをな」

ゲシツと足を軽く蹴られて鈍痛が全身に回る。

「いつ、痛いつてリボン!!」

「たりめえだ。この朴念仁が。マフィアのボスになるんだ。つたらもう少し欲深になっておけ」

「うう……………本当にどうしてこうなったんだよ……………」

そんな感じで二人が揃って学校に向かっていている時の事であった。

「あ、ツナ君——！」

一人の少女がツナに話しかけてきたのだ。

ツナはその少女が居る方向に視線を向ける。

そこに居たのはツナも良く知る、並盛中学校のマドンナ的存在、笹川京子の姿がそこにあった。

「おはようツナ君！ あれ？ 眼鏡外してるの？」

小首を傾げてツナの顔を見ている京子の姿を見て、ツナは思わず固まってしまった。

何故か彼女に話しかけられてから向けられる殺意が1つ増えたような気がしたが気のせいであつてほしい。

「おはよう笹川さん。今日はいつものお兄さんが居ないけどどうしたの？」

「お兄ちゃんは今部活の練習だつて。確か鍋つかみを付けてするスポーツだつたと思ふんだけど」

「……………笹川さん。俺は笹川さんの将来が心配になつて来たよ」

この人、あまりにも天然すぎる。内心で彼女の兄や親友の姿を思い浮かべてしまう。大丈夫なのだろうかこの娘は。将来悪い人に騙されたりしないだろうか。

心の中でそう考えていると京子はリボンと話をしていた。何やら家庭教師だと告げるリボンだったが京子は「わー、すごい」と言つて喜んでゐる。この娘は本当にそれを信じてゐるらしい。更に心配になつてきた。

「あ、そうだ！ ツナ君、あの時はありがとう！」

そう言うのと京子はツナに感謝の言葉を告げる。

「ん……………ああ、あの時の事か。別に気にしなくても良いよ」

「何だツナ。何かあつたのか？」

「うん。ちよつとね」

それはついこの間の事である。クラスで行つた掃除の事である。

とある場所を掃除をしていた京子は偶然にも自分が居ると言うことも気付かれずに鍵を掛けられてしまい、そのまま去られてしまったのだ。

その事に気が付いたツナは鍵を取りに戻るのも面倒なのでそのまま鍵を破壊し、助けたのである。

「ううん。そんなこと無いよ。ツナ君は凄い人だよ」

「……………まあ、そう言われると悪い気持ちにはならないけどさ。さつきも言つたけど

気にしなくて良いんだよ」

きつと自分以外の人も助けた事だろう。

そう告げようとしたがその前に京子は懐からある物を渡して来た。

ツナは渡された物を確認し、それが目薬であることを理解する。

「これは……………」

「前に助けてもらったからそのお礼だよ。でもツナ君って目が良いのに眼鏡してるんだね。いらなかったかな？」

「そっか。なら貰っておくよ。それと勘違いさせちゃってゴメンね。一応これ伊達眼鏡なんだよ」

渡された感謝の品をツナはありがたく受け取る。

「でもどうして眼鏡なんかかけてるの？ ツナ君の眼、凄く綺麗なのに」

「……………あまり好きじゃないから、かな？」

京子の問いにツナはそう返す。

ツナの気持ちができるのは同じような瞳を持つ者だけ、それに一般人である彼女にこんなことを言っても意味が無い。

「それじゃあ一緒に学校に行こうよ」

「良いの？ じゃあお言葉に甘えて、参りましょうかお姫様」

「え？」

「ああ。気にしなくて良いよ。昔アルビート……………友達から教えてもらったんだよ。男たるもの女性に対して紳士にならなければってね」

意地悪そうな笑みを浮かべながらそう語るツナに対し、京子は僅かに頬を紅潮させながら「う、うん」と短くうなずいた。

その光景を見ていたリポーンは顔を俯かせながら一言呟いた。

「あいつに先に教えるのは女を口説くテクからの方が良いだろうか。このままだと刺されても仕方が無いんだが……………」

決闘

「これより、被告人沢田綱吉の裁判を執り行う!!」

どうしてこうなった。

荒縄で雁字搦めに縛られたツナは自らの境遇を嘆くと共に、教室で行われて居るこの不当な裁判もどきから逃げ出す方法を考えていた。

幸いなことに縄は非常に固く縛られていたが抜け出すことは容易だ。

ただその後が非常に面倒なだけで。

「被告人の容疑は？」

「このクラスのもの、いえ、学校の財産と言っても差し支えが無い笹川京子氏と一緒に登校していたことであります！ しかもなんか良い雰囲気醸し出していました!!」

「なにいい!!? 許さん！ 死刑だ、死刑にすべきだ!!」

「「意義無し!」」

そして裁判も終わりを告げたらしい。どうやら此方には弁護する人も居ないらしい。

普段なら能天気な場を諫めてくれる野球好きでな級友はこの場に居らず、このままでは間違いなく自分は一方的な私刑を受けることになるろう。

そう考えるツナであつたがそれを見かねてか、笹川京子が親友の黒川花とツナの下に歩み寄つてきた。

「ちよつと止めなつて。ただ学校まで一緒に来ただけじゃないの」

どうやら助けてくれるようらしい。

ツナがそう思っていると花は目を此方に向けてアイコンタクトを飛ばしてくる。

感謝しかない。花のメッセージを受け取つたツナは感謝の念を送る。すると花は小声で「気にすんなつて」と告げて来る。

本当に助かつた。この恩は決して忘れない。そう思うツナであつたが、京子が近くまでやつて来て――、

「あ、ツナ君。今日一緒に帰つても大丈夫かな？」

「よし、お前等。今日はフルコースだ。前菜は沢田の悲鳴だ」

空気の読まないその一言によつて花のフォローが台無しになつてしまふのであつた。

と、どうか今のは確信犯じゃないだろうか。そう思つてしまふツナであつたが京子の表情からは何の裏も取れない。それどころか花も全てを諦めたかのような表情を浮かべて「ごめん」と小さく呟いたところから察するに、本当に善意でやつた行いであるということが理解できた。

「さあ沢田。言いたいことはあるか？」

「……………ただ一緒に登校しただけじゃないか。何をそんなに怒り狂ってるんだか」
「うるさい黙れえ!! 沢田の癖に生意気だぞ!!」

自身の発言で裁判に参加していた男子生徒（一部女子生徒）達は騒ぎ立てる。

色々な罵倒、という名前の嫉妬に駆られたモテない男子と特殊な性癖をしている女子生徒たちの叫びがツナの鼓膜を響かせる。朝っぱらから元氣過ぎるにも程があるだろう。

「そもそもお!! ダメツナが俺達よりも先に女子と会話するなんて百年早いんだよお!!」

「「「そうだそうだ!!」」」

最早宗教のノリに近いクラスメイト達を見てツナは思わず溜息をついてしまう。

「本当にどうしたんだよ皆。男女の關係でそんなにはしゃいで……………そんなファーストキスも済ませていないわけじゃないし」

ツナが何気無く呟いたその言葉、それを聞いた瞬間、この場に居る全員が固まった。それはツナに対して不当裁判を行おうとしていた生徒達は勿論のことで、京子や花も当然聞いていた。

場の空気が固まったことに気づいていないツナは皆の変貌に戸惑いの様相を浮かべる。

「え、何？　もしかして沢田ってしたことあるの？」

誰よりも一早く元の状態に復帰した花は顔を青褪めながらツナに尋ねる。

「イタリアに留学していた時にリゾーナ……友達の女の子とね。日本に戻る際の別れの挨拶みたいなものだったから恋愛感情とかは無いよ」

そう呟いてツナは日本に戻ってくる前に別れを告げた友人の少女の顔を思い浮かべる。

この直死の魔眼の使い方を学ぶ為に出会った少年と少女、その二人と友人になるのに時間はそれ程かからなかった。ツナを持つ能力とは違うが、その二人も特異な異能を持つが故の親近感だったからなのかは分からないが、あの時、イタリアで過ごした思い出は今でも思い出せる。そしていつかまた会おうと約束をし、別れの挨拶としてキスされた。それがファーストキスだったのは言うまでも無いことだ。

だけれど、それに恋愛感情があったかと聞かれると答えはNOだろう。

イタリアではキスが挨拶、と言う言葉があるがそれは大凡間違いない。ただし大体は頬だ。口と口はそれこそ本当に親しい人だけだ。そういう意味で、彼女と本当の意味で親しくなれたのは別れの時なのかもしれない。

「でもあの時は激しかったなあ。まさか舌まで入れて来るなんて」

「沢田。違う、それ絶対に違うから。それデープな方だから」

瞬間、校舎の外から濃厚な殺意が放たれた。

一体誰が放つていてというのだろうか、何か物凄く怖いのだが……………。

ツナは自らに向けられてる殺意に対して妙な恐怖を抱きつつも、縄を解きながら昔の思い出に浸りながら目を閉じる。今でも思い出すことが出来る。

「まあ、ファーストキスは経験済みだよ俺は。笹川さんと違つて恋人は居たことないけどさ。」

「え？ 私も付き合つてる人は居ないよ？」

「……………どういうこと？」

ふと気になったツナは正気を取り戻したものの少しだけ調子が悪そうな京子に尋ねようとする。が、その前に答えに行きついてしまう。

「あ、ふーん……………ねえ黒川。もしかして持田先輩つて」

「あんたの想像通りよ。京子にアプローチ中。全然見向きもされてないけどね。主にどっかの誰かさんのせいだね」

「うわあ……………可哀想だなあ……………京子ちゃんに懸想されてる人の身が心配だよ」

周囲の人たちが正常に戻りつつある中で三人はそんな感じの会話を続けていた、その時だった。

荒々しく教室の扉が開かれたのは。

正気を取り戻し、ツナに対する処刑を再開しようとしていた生徒達全員が開いた扉の方に視線を向ける。そこに立っていたのは今ツナ達の会話の中に居た人物、並盛中学校剣道部主将の持田剣介の姿であった。

「沢田ア!! 貴様に決闘を申し込む!!」

持田剣介はそう言うのと背後に立っていた剣道部員達に「連れて行け」と命じる。

すると二人の剣道部員はツナが居る所まで歩き、ツナの両腕を掴み、そのまま連行するのであった。

「え、な、何これ!!? どういうことなのー!!?」

子牛のように連れて行かれるツナの姿を京子と花は黙ったまま見ていた。

そして連れて行かれてから数秒の時間が経ってから再び正気を取り戻し、

「……………おい、ダメツナ。やばくね?」

「ああ、流石に俺たちのは悪ふざけだったけどよお。ちよつと持田先輩殺気だつていなかったか?」

「決闘だつてよ。見に行こうぜ」

野次馬根性丸出しで行くのであった。

もしここにツナや他のまともな生徒達が居たらつつこみを入れてたであろう言葉を言つてから教室を後にした。

「ど、どうしよう………ツナ君、大丈夫かな?」

「こりゃあ行くしかないか………行くよ、京子」

二人の少女たちも教室を後にする。それから暫くして教師が教室に入つて来る。

「えー、それでは授業を——つて、ボイコット!!?」

誰も居ない教室の中で教師の悲痛な叫びが木霊するのであった。

そして一連の流れを全て望遠鏡で覗き見ていたリボーンは面白そうな笑みを浮かべる。

「どうやらこいつを試せるみたいだな」

そう呟くりボーンの手の中には一発の銃弾が存在していた。

ツナと持田剣介との決闘騒ぎが始まった中で、それを観戦する為に複数の生徒達が集まってきた。

仮にも中学生なのだから授業はどうした、教師が居たらそう尋ねるだろうその中で、複数人の生徒達は興味深げに集まっていた。

銀髪の少年は上から良く見える位置でなおかつ見つきりにくい場所に陣取っている。

そして「ボンゴレの十代目候補の実力、見させてもらおうじゃねえか」と小さく呟いていた。

黒髪の少年は生徒達と一緒に観戦していた。しかし笑顔を浮かべながらも眼だけは笑っておらず、ツナを見つめている。

学ランを纏った少年は欠伸をかきながらつまらなそうにしていた。

この騒動が終わり次第、騒動を引き起こした人間をかみ殺す為に。そしてこの騒動に関わっているあの小動物を引きずり出す為に。

白髪の少年は「極限だー!!」と叫んでいた。

そしてこの騒動の中心人物であるツナは静かに一言呟いていた。

「帰りたい」

と――。

死ぬ気弾

「すみません。ちょっとトイレ行つてきます」

無理矢理連れて来られた上に何故か決闘することになってしまった中で多数の観客達に見られている中でツナはそう呟いた。

それに対する罵倒がある中で、ツナはまるでどうとでも思っていないかのように振る舞いつつ体育館から出て行き、トイレに入る。

そして誰も居ないトイレの中で、ツナは叫んだ。

「ウエイト入ってるなんてふざけんな！ どうやっても勝ち目なんか無いだろ!!」

さつき、試しに竹刀を持ち上げようとしたのだが残念なことに持ち上がらなかつたのだ。真剣を扱ったことがあるツナでも持てない重さで、武器として振るうには最悪過ぎたのだ。しかも竹刀だけでなく防具にも——勝ち目が無いとしか言えなかつた。

せめて籠手だけでも普通の重さだったら良かったのだが。

「ウエイトが入ってなきや勝ち目はあるのか？」

「……………何でこんな所なんか居るんだよ」

「家庭教師だからな」

「答えになってないよ。でも、質問の回答はYESだよ。普通の竹刀だったら闘えるよ。手甲があるとなおよし」

剣は盾としても使えるし、手甲があれば殴った時に手が痛くならない。それだけでなく剣は自分に足りないリーチを補うことが出来る。

拳だけでも十分と言えば十分だが無いよりはマシだ。

少なくとも拳じやこの眼は生かさない、ナイフだとリーチが足りない。なら剣を使う以外に道は無かった。技とかは流派の技を覚えられる程才覚は無かったが基礎は出ているのだから、武器を壊した後殴り勝てる。

そう、武器さえ持てれば話は別なのだ。

「そうか」

今の言葉を聞き終えたりボーンは拳銃を取り出してツナに向ける。銃口の先にあるのはツナの額だ。

「……………ねえ、何でこっちに銃口を向けてるの?」

自らに銃を向けて居るリボーンを見て、ツナは声を震わせながら尋ねる。

するとリボーンは口の端を釣り上げてニヒルな笑みを浮かべた。

「いや、笑うだけじゃ返答にならないからね!!? それオモチャだよねそうだよね!!」

「いっぺん死んでみる」

「ちよつ、止めて!! それ間違ひなく避けられ——」

ズガンとリボーンが手に持っていた拳銃から一発の銃弾が放たれた。

赤い色をしたこの世の物とは思えない銃弾、金属なのかすらも疑わしいそれは回避する間も無く、ツナの頭蓋を撃ち抜いた。

「あ——」

脳天を撃ち抜かれたことにより、脳はその機能を停止する。身体は動かずその役目を停止させていく。

前が見えなくなっていく、世界が暗転していく。その先にある闇を、ツナは知っていた。

死——、全てが無意味となる絶対の終焉。

この瞳を手に入れる前に見た世界の終わりであることを理解した。

嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!

薄れて消えていく意識の中でツナは半狂乱になりながら声の無い絶叫を上げていた。死ぬのだけは嫌だ。何もかもが消えていく、孤独で無価値で何も無い闇。あそこにだけは落ちるのは嫌だ!!

心の底から強く後悔した瞬間、意識が浮上した。

一体どうして、そう思う暇も無く闇に沈んで消える筈だったツナの魂は無理矢理引き

上げられた。

『あらっ?』

その刹那に、胸に穴が開いた金髪蒼眼の幼い少女の無邪気な、それでいて邪悪な姿を垣間見ながら。

額から淡いオレンジ色の炎が灯り、まるでトーチのように燃え上がる。

意識が完全に覚醒する時間は一瞬で身体に熱が走り、全身が死から生にへと再起動を始める。

苦しかった。凄く苦しくて暗くて、寂しかった。だけど自分は生きている、今を生きここにいるのだ。震える自身の身体を抱きしめてツナは生の実感を確かめる。

そして自分をあの取り返しのつかない場所に追いやろうとした元凶のことを思い出した。

「っ、そうだ! リボーンッ!!」

ツナは怒気を滾らせながら殺意に満ちた形相でリボーンを睨み付ける。

だがしかし、リボーンは呆気に取られた様子でツナの事を見ていた。

「……………まさか死ぬ気モードになったのにパンツ一丁になっていないとは」

「今さらりと見逃せない発言が聞こえた気がしたけどどうということだよおい……………」

「それは今はどうでも良い話だぞ。それよりも鏡見てみる」

「鏡を見ろって……………なんか変な炎が額から出ている以外特に何も——」

言われるがままにツナは設置されていた鏡に視線を向ける。

そこに居たのは額からオレンジ色の淡い炎が灯っている自身の姿で、ただ一つ前と違うのは髪の毛が異常な程長く伸びていた。腰よりも長く伸びたそれは踵にまで着きそうな程で、信じられない程の長さだったのだ。

「……………おい、リボン。何やったの？」

「俺が知るか。それよりもそろそろ戻った方が良いんじゃないか？」

「え、つてもうこんな時間かよ!! こうなったらやれるだけやってやる!!」

そう言うのとツナは悔し涙を浮かべながら走り去っていった。いつもの彼を知っている者が見れば信じられない速さで。

「……………どうやら効果はあったみたいだな」

リボンは服の内ポケットから一発の赤い弾丸を取り出す。

つい先ほどツナに対して放った弾丸と同じもので、人体のリミッターを外すという効果を持つ。

しかし、その効果はあくまで後悔したことを死ぬ気でやるようにするというものだ。普通ならあんなはつきりとした自我は無く、一種の暴走状態になっていなければおかし

いのだ。なのにツナは死ぬ気丸という死ぬ気弾の効果を持つ薬品を服用して死ぬ気になった状態のように、平静を保っている。

考えられるとしたら常に死ぬ気であるということ、しかしこれは当てはまらない。そしてもう一つの可能性も今のツナには不可能だ。

それに死ぬ気弾にはあんな髪の毛を長くする効果は存在しない。

「……………それに、あの死ぬ気モード自体も変だ」

本来死ぬ気弾を撃たれたら元の肉体から脱皮する形で蘇る。そして脱皮した後に残るモノは風化する。

だがあれは違った。まるで内側から弾け飛ぶような形で蘇ったのだ。まるで卵を破った雛のように。

「まさか、な。ただの考え過ぎだろう」

たまたまつなには死ぬ気弾の効果があのような形で現れただけだ。

恐らくそういう体質なのだろう。意識が残っているがリミッターの方は外れているのだから。

リボーンはそう考えて結論付けることにし、ついさつき落ちたツナの眼鏡を拾って自身も体育館に向かうのであった。

××

眼鏡を落としたのに気が付いたのは丁度体育館の扉を蹴破って中に入った直後のことだった。

気が付いた時には既に遅く、髪の毛が伸びていることに驚く他の生徒達の波を掻き分けてツナは持田の前まで突き進んだ。

道中、野球好きな級友が眼鏡を外していることに驚いた様子を見せた。

道中、風紀委員長はツナの髪を見て「校則違反、それと群れ過ぎ」と言い放ち、トンファーを構えた。

道中、ボクシング部の部長がさっきの蹴りを見て「あれ程の身体能力、是非とも我がボクシング部に」と言っていた。

されど今はどうでも良い。リボーンに何をされたのかは分からないがやらなくちゃいけないことは分かっている。今はそれだけで良い、それだけで十分すぎる。

ツナは持田の前に立ち、真っ直ぐ前を見据える。

「どうやら怖気ついて逃げ出すような奴じゃなかったみたいだな」
「さっきも言いましたけどトイレに行くだけでしたからね」

そう言つてツナは竹刀のみを手に取り、真っ直ぐに構える。

すると持田や剣道部員達は全員驚いた表情をして見せた、がすぐに平静を取り戻す。どうやらウエイトが入っていないと思つたのだろう。

その為か、剣道部員たちはツナに他の道具も渡して来ようとする。が、ツナは「要らない」ときっぱり答える。

「じゃあルール確認だ。貴様は剣道初心者だ。よって十分以内に俺に一本でも打ち込めたら貴様の勝ちだ」

「別にそれで良いですよ」

「ほほう。強気だな。だがこの持田、京子に物をせびつた貴様を許しはせん！」

「あれはプレゼントですつてば………でもそもそとしてとつと告白でもしたらどうなんでしょうか？ 笹川さん、フリーらしいのに」

ツナがそう尋ねると持田は「うるさい！」と一喝する。

持田の様子を見るからに、どうやら告白してはいるようらしい。

恐らく、告白したことに気が付いてもらえないのだろう。

「だからって近づいただけの男にすら敵意を向けるとか、男として心の底からみつきいですね先輩って。誇りとかプライドって無いんですか？」

あまりの情けなさにツナは思わず自身の感想を素直に吐露する。

すると持田の頭からブチイと何か切れるような音が響いた。

周囲に居た審判を含めた剣道部員達は顔を真っ青にし、持田に睨み付けられて恐れながら「し、試合開始！」と決闘の始まりを告げた。

「死ねえ!! ダメツナア!!」

怒りに身を任せた持田は殺意を込めて上段から竹刀を振り下ろす。

振り下ろされたそれは並盛中学校の中でも上位の腕を持ち、喧嘩でも一桁に入るだろう人物の一撃。素人、それも防具を身に纏っていない者ではまともに受けることもままならないだろう。

その事を分かっている大多数の生徒が地面に倒れ伏すツナの姿を幻視する。

「あ、あれは持田剣介が最も得意とする上段に構えてからの振り下ろし!! あの技での前の大会に優勝したんだ!!」

生徒の中の誰かが解説でもしているのか、やけに詳しい説明が語られる。

そして一步も動かないツナに向かって持田は竹刀を振り下ろした。

十十十

「あー……………こりやツナが勝ったな」

一連の流れを見ていた一人の男子生徒はそう呟いた。

「おいおい。あのダメツナに勝ち目があるわけないって。なんか髪伸びてるけど」

その発言を聞いていた男子生徒達は男子生徒の言葉を否定する。

彼等の中では沢田綱吉という男子生徒は非常に弱い、何をするにしてもダメな生徒だ。

勉強もダメ。運動、特に球技が致命的なまでに下手。逃げ足だけは早いからなのか、徒競走ではそれなりだが基本的にダメな奴だ。だから剣道部主将の持田剣介に勝てるわけがないと思っていた。

ただ一人を除いて。

「俺の剣の相手、ツナがしてんだけどなあ」

その発言を聞く者は誰も居なかった。

＋十＋

持田剣介が竹刀を振るった瞬間、それは起きた。

まるで陽炎を斬ったかの如くツナの姿が消え失せ、持田が持っている竹刀が半ばから押し折られていたのは。

「――は？」

突然の出来事は持田から思考する力を奪い取った。

己の振るった竹刀がダメツナの頭部を捉え、五体を地に伏せている姿を幻視していた。持田にとってこの光景は受け入れられなかった。その上、持っていた竹刀が押し折られている。否、まるで鋭い刃物で真つ二つにしたかのように綺麗に斬られていた。そうとしか表現できなかった。

そして観客だった大多数の誰もが突如視界から消え失せたツナが何処に行ったのか

が分からなかった。

だが、それに気が付いたものは居た。

野球が好き少年は「お、新しい技か？」と呑気な声で呟き、風紀委員長は目を見開き獲物を見つけた肉食動物の如く口の端を吊り上げる。ボクシング部の主将は「極限！分からーん！」と叫んでいた。

「ど、何処に消え——」

「胴——！！」

姿を見失ったツナの事を探そうと持田が探し始めるが時既に遅し。

持田の背後に回っていたツナの横薙ぎの一閃を身体に受け止め、そのまま壁に叩きつけられた。

やりすぎ注意

想像以上に強い一撃が出た――。

自らの一閃を受けて吹っ飛び、壁に叩きつけられて意識を手放した持田を見てツナは思わずそう思ってしまった。そもそもとしてここまで威力のある一撃じゃなかった。というか自身の身体能力では本来ならあそこまで人体を飛ばせない。

なのに吹き飛んだ。それどころかよく確認してみると自分が立っている床が踏み抜かれて壊れている。どうやら移動した時に生じた衝撃で床を壊してしまったらしい。

「……………なんか予想以上にパワーが出るんだけど」

リボーンがさつき撃ち放った弾丸、それに一体何の効果があるかは分からないがどうやら肉体を強化する特殊な能力を持つらしいようだ。でなければさつきのウエイト入りの竹刀を持てるわけがないのだから。だとしてもここまで身体の強さが制御できないとは思わなかったが。

ツナは強化された己の肉体をそう分析しつつ、己が竹刀で吹っ飛ばして壁に叩きつけた持田の姿に視線を向ける。

「あ、ぐあ……………」

壁に叩きつけられた持田は肺に入っていた空気を絞り出すように声を出して床に倒れ込む。

倒れた持田は竹刀で叩かれた場所を胴着の上から抑えるように両腕で抱き締め、蹲り声にもならない悲鳴を上げていた。どうやらアバラ骨が圧し折れたらしいようだ。最もツナ自身、今の一撃を殆ど制御できていなかった為、折れても仕方がないとは思っていた。幸いなことに臓器にダメージが入っていないようだ。眼で見ても死の線と点が増えていない。

——しかし、どうしたら良いだろうか。

ツナは今もなお呻く持田と周囲の観客達に視線を配り見渡す。

周囲に居た生徒達は何が起こったのかを全くと言っても良い程理解できていない様子だった。恐らく理解できたのはほんの一角にも満たないだろう。

それはそれとして、審判はどうしたというのだろうか。疑問に思ったツナは審判に視線を向ける。

——どうやら、今の一撃は無効と判断したらしい。

その事実にはツナはため息をつく。大方、持田が審判と共謀していたのだろうと大体の予想はつく。例え自身が一本取ったとしてもそれを無効とするように言われていた、そんなところか。

ならどうすれば良いか、答えは簡単な話だ。

ツナはゆっくりと一歩ずつ足を前に踏み出して歩き始める。その先に居る持田の下に向かつて。

試合はまだ続いている、決闘はまだ続いている。ならば自身がやるべきことは一本を取るからだ。胴は流石にもう危ないが手や面が残っている。それでも駄目なら髪の毛をむしり取れば良い、それでも駄目なら全身の毛を一本も残らずにむしり取ってしまうが良い。

そこまでやれば自身に対して勝利を宣言しない八百長審判でも自身に対して勝利を告げるだろう。

そう考えながらツナは足に力を込めて持田に追撃を加えようとし、
「おっと、そこまでだぜツナ」

背後から肩に手を掛けられて抑え込まれた。

「——ッ!？」

突然の事にツナは驚きながらも背後に居る何者かに向かつて竹刀を振るう。

しかし背後に居た人物はツナの一閃を容易く回避する。その事実には驚きながらもツナは再び竹刀を振るおうとして——、

「落ち着けて、ツナ」

自分の肩に手を置いた相手が級友の山本武であることを初めて知った。

「なんだ……………山本か……………」

「おいおい、なんだって言い方は無いと思うぜ？ それよりも勝負はもう決まったんだろ？」

いつも通りの呑気な武の声を聞いてツナは溜息をつく。

確かにその通りだろう。持田剣介はアバラ骨が押し折られたのもう動けない。

ツナも経験したことがあるから分かる。アバラ骨を折られたら痛くて本当に動けなくなる。だからと言って動かなかつたら死ぬので痛みを我慢して動くしかないのだが。

「はあ……………山本は呑気で、良いね———審判、勝負はもうついたよね？」

「え……………？」

「もしまだついていないなら俺は持田先輩を黽らなくちゃいけないわけなんだけど」

「あ、赤!!」

ツナの発言に恐怖を感じたのか、審判は一瞬遅れて赤い旗を上げる。

その瞬間、ツナの勝利が確定し観客達の歓声上がる。それは何をやってもダメダメな少年が剣道部部将に勝利したという事実に対する歓声なのかもしれない。しかし、それとは逆に敗北した持田に侮蔑の視線を向ける者やツナに対して懐疑的な視線を向け

る者も居た。

しかし態々相手をするのも面倒なのでツナはあえて無視することにした。

「うう……………疲れた」

そう言つて竹刀を床に向かつて放り投げる。ウエイトが入っていた為なのか、床を傷つけてしまうが、今更氣にした話しでは無いだろう。

決闘を終えたツナは脱力し息を吐き出す。すると額に灯っていた炎が鎮火し、最初から何も無かつたかのように消え失せた。それと同時に両の瞳から何か生暖かい液体が流れ出る。

涙でも出てきたのか？ そう思つたツナは手で目元を拭い、それが血であるということを理解する。

「うわつ、ツナ大丈夫か？ 眼でも使つたのか？」

「いや……………そんなに使つた覚えは無いんだけど……………」

自身が血涙を流していることに気が付いたツナは疑問を抱く。

直死の魔眼を使い過ぎれば負荷がかかり、血の涙を流してしまうのは既に知っている事実だ。だがそれは見えない物の死を見ようとすると掛かる負荷であり、今回は生物以外の物の死を見ただけでそこまで負荷は掛けていない。だというのに血涙を流しているのは――、

「リボーンに聞いたただしてみなくちやな……………」

理由も何もそんなことは最初から決まっている。

あの赤ん坊が撃った銃弾がその理由だ。ならばその銃弾を放つたりリボーンに聞けばすぐにわかることだ。

「ツナ君！」

そう思っていたツナに京子が駆け寄つて来る。その顔は心配していると云わんばかりに青褪めている。

一体どうしてそんなに青褪めているのか、疑問に思ってしまった。

「大丈夫!? 目から血が出るけど……………」

「ん。ああ大丈夫だよ。見た目ほど酷くは無いから。まあ、暫く出っ放しだけ……………」

直死による負荷である為どうしても防ぐことが出来ない。とは言え、逆に言えばどれだけ使っても血涙を流すだけで済むのだからマシだろう。最も、それでも脳の処理が追い付かない時もあるのでそこまで便利な物でも無い。

よくよく考えると本当に不器用で辛い能力だ。自分の事ながらどうしようもない、とツナは溜め息をつきつつそう思う。

しかしながらここまで疲れるのは久しぶりだ。本当にこの眼を使い過ぎて脳の処理

が追い付いていないような気がする。

そう思っていると京子はポケットからハンカチを取り出してツナに渡す。

「はい。これハンカチ、使つて良いよ」

「え、でも悪いんじゃない……」

「大丈夫だよ。ほら、使つて使つて」

「うん………ありがとう」

京子から半ば押し付けられるような形で渡されたハンカチで血涙を拭う。

まだ出て来るがそれでも最初よりは勢いが弱くなつてきている。

「でも、ツナ君つてこんなに凄かつたんだね」

「………別に凄くないよ。正直褒められた強さじゃないし」

特にこの瞳の能力がまさにそれだ。根本的には命を奪う力、本当に危険で取り扱いが難しい物だ。

人を傷つけるだけの能力だ。それを応用して人を救うことにも使えるようにしているが、どちらかと言えば暴力的な意味でしか使っていないこの能力。まあ日常的に使っている為、無くなられると困るのだが。

そう考えながら京子から貰ったハンカチに視線を向ける。ツナの血で真っ赤に染まっております、控えめに言つて酷かった。鮮やかなピンク色のハンカチはツナの血で汚れ

てしまい、見る影もない。

「笹川さん。ゴメンね汚しちゃって……………洗濯して返すよ」

「気にしなくていいよ。それと、私の事、名前で呼んでも良いよ」

「えっと、京子さん？ いや、これじゃあちよつとあれだな……………なら京子ちゃん、うん、これからは京子ちゃんって呼ぶよ」

ツナの言葉を聞いて京子はとても明るい笑みを浮かべる。その笑顔を見て遠くで花がにやにやとしていたが、一体なんなのだろうか。

そう思いながらツナは目元を抑える。本当に頭が上手く働かない、直死を使い過ぎた状態みたいだ。心の中で自身の状態を簡単に思案しつつも歩き始めようとする。早く魔眼殺しの眼鏡をかけて休めないと、直死の状態も元に戻さなければいけない。恐らくリボーンが持っているだろう。

恐らく校内にまだ居るのであろうリボーンを探そうとした瞬間だった。

「君達、邪魔だよ」

聞き覚えのある物凄く不機嫌そうな少年の声が響いたのは。

その声があったと同時に、まるでモーセの奇跡の如く道を作った。観客達が避けて出来た道を通って一人の少年がツナ達が居る場所まで歩いてくる。その少年はこの並盛中学校の一昔前の制服、所謂学ランと呼ばれる物を着ており上着は肩に掛けて羽織っている。

た。

この学園でそのような格好をするのは風紀委員会と言う名の不良集団だけであり、そして此方に歩み寄って来るのはその中でも頂点に立つ並盛中学風紀委員会風紀委員長

「雲雀、恭弥……………」

ツナは思わず、その者の名を呟いてしまう。

何でこんな人が多い所に居るんだ、内心そう吐き出してしまっても無理は無かった。何故なら風紀委員長の雲雀恭弥と言う人間は集団を嫌い、気に入らない者や群れる者を「草食動物」と言つて所持している仕込みトンファーで滅多打ちにする過激な性格なのだ。

一体どうしてこんな所に居るのだろうか、そう思うツナであったが恭弥は肉食動物のような鋭い眼光をツナに向ける。

「君、その髪は校則違反だよ」

「……………え？」

恭弥の発言にツナは思わず呆気に取られた声を出し、自身の髪に触れる。

そう言えばかなり髪が伸びていた、と思い出す。

「それに体育館の床を壊しているね。校則違反に校舎での器物破損、言い訳の余地が無

いね」

そして恭弥は懐に隠し持っていた仕込みトンファーを持ち、構える。

「沢田綱吉、校則違反者にして器物破損をした君を——、かみ殺す」

「ゴメン山本！ 俺この後サボるから!!」

トンファーを構えた恭弥を視認した瞬間、ツナは山本にそう告げると先ほど斬り飛ばした持田の竹刀を手に持って壁に向かって駆け出した。

そして壁の前に立つと持っていた竹刀で壁に浮かび上がっていた線をなぞる。すると体育館の壁は見事なまでに綺麗に切断され、一人人が通れるくらいの穴が出来る。ツナは出来た、もとい作った穴を通って外へと逃げ出す。

「……………また校舎を壊したね。絶対にかみ殺す」

先ほどよりも殺意を募らせた恭弥は更に速度を上げて加速し、ツナが出て行った穴から同じように外に出て行く。

その光景を見ていた山本は「あはは、大変なのな」と呑気な声を出していたが追い掛けられるツナとしてはたまったものじゃなかった。

「……………このままだと追い付かれるよな」

素の身体能力だと雲雀恭弥の方が上なのだ。それに直死の魔眼を使つたとしても彼ならすぐにそれに気づいて対策をしてくるに違いない。そう考えたツナはあることを

思い出す。

そう言えば雲雀さんってバイクを持っていたな、と。

「よし、雲雀さんのバイク借りて逃げよう」

それが一番手つ取り早いと結論付けてツナは駐車場がある方に向かう。

いくら恭弥が強いとはいえバイクにそう簡単には追い付けない。そう考えたが故の行動だった。

この後、更に怒り狂った恭弥と町内全域を駆け巡る鬼ごっこを繰り広げられることになるのは言うまでもない。

＋＋＋

——一人の少女が居た。

少女は大凡全能と言っても差し支えない力を有しており、されどそれ故にこの世の全てに退屈していた。その気になれば未来すらも見て、自身が望んだ通りの未来を手繰り寄せることすら出来るだろう。しかし、だからと言って未来を見るのはつまらないものであり、彼女が唯一自らに制限として自分の行きつく先だけは見ないようにしていた。そして全能とはいっても彼女個人にも限界はあり、叶えたい願いを叶えるには単純な出力が足りなかったのだ。

人間一人では、否、恐らく自身の目的を達成するためには自身も含めた人類を一人残

らず燃料にする必要がある。それも今この時間、つまり現代では無く一秒単位で時間を遡り、人類を燃料とし続ける他無い。だがいくら全能の少女と言えどそんなことは出来なかつた。大凡世界の理すらも書き換えることができるだろう少女であつても途方もない昔に逆行することだけは出来ないでいた。

だからこそ、少女は獣を求めた。

少女の目的を果たす為、愛しい王子様の故郷を救うために、人類史を台無しにしてしまふ獣を何者よりも求めた。

結果として少女は失敗し、王子様の手によつて止められはしたものの、まだ時間はあつた。

再び聖なる杯を求めて数多の英雄が覇を競う聖戦、次の聖戦にも彼は再び召喚されるだろう。ならばその時まで準備をしていれば良い。今度こそ完璧に彼を救つてみせよう。

己が生贄とした少女たちの亡骸の上で、邪悪なる笑みを浮かべた少女はくるくると踊りまわる。

そんな時だつた、本来ならば関わり合う筈がない、平行世界でさえ無いものを観測したのは。

「あーっ！」

少女は疑問を抱く。大凡全能と言っても良い彼女でも今回の事は予想外過ぎたのだ。しかしながらそんなことはどうでも良く、彼女が観測した一人の少年に対して感じたこの想い——。

それは慈愛のような優しい祈りだった。愛しい王子様に抱いた天地を焼き尽くさんばかりの恋情とは違い、見ていて何故か優しい気持ちになる。その気持ちに少女は困惑するも、すぐに結論に至る。

「そう、これが家族愛、というもののなのね」

恋愛ではない、家族に対して向ける普遍的な愛情。

初めてその感情を抱いた少女は観測した少年のことを愛おしそうに眺める。

皮肉な話である。本来その愛情を向けるべき家族には向けず、全く関りが無い、世界すら違う少年に向けるのだから。あるいは、同じ同胞だからこそ彼女がそう認識出来たのだろうか。

「凄く、すつごく良い子ね。もし私の王子様との間に子どもが出来たら、彼のような子になってほしいわ」

しかし、だからこそ少女はそこで眉を顰める。

「でも少し残念ね。全然使いこなせていない、でも出来が悪い子の方が可愛いわね」
少女はあることを決意した。己があちらの世界に行くことはできないだろう。

しかし彼の為に出来ることがある。彼に使い方を教えることができる、そして彼の遊び相手を用意することだってできる。

それに――、

「貴方は我慢しすぎよ。だからもう少し素直にならなくちゃね」

獣の飼い主である少女は決意する。きつと彼も同じだと、理解する。

だからその祈りが間違っていないと、弟とも呼ぶべき少年にそれを教える為に、伝える為に旅に出た。

――願いを踏み躪る争いが起こる前の断章とも呼ぶべき彼女の物語、迷宮を突破した彼女は飛翔するのであった。

死ぬ気モード

雲雀恭弥との生死をかけた鬼ごっこに勝ち逃げを果たしたツナは夕方ごろになってからバイクを乗り捨て、そのまま自宅に戻った。

家に入ると既にリボンが戻っており、何やら満足気にコーヒーカップを持って優雅にエスプレッソを飲んでいた。その隣でユニが真つ赤な顔をしてある物を持っている。ユニが持っていたそれはツナの昔の写真が詰まったアルバムで、その中でもユニが見ていたのは幼い頃におねしよをして泣いた写真と12歳の頃にわけあって女装した時の写真だった。

「何見てるのさ」

ツナはそう言いつつユニからアルバムを取り上げる。

そこでツナが帰ってきたことに気が付いたのか、ユニは顔を真つ赤にしながらツナの顔を見つめる。

「あ、お帰りなさい。ツナさん」

「ただいまつと。あー、疲れたよ……………」

京子から貰った目薬を眼球に差しながらそう呟く。

今日一日に色々あり過ぎた。何故か強制的なパワーアップさせられた上に直死を使い過ぎた状態になり、その上で恭弥との死闘と言う名の生死を掛けた鬼ごっこから逃げることに成功したのだ。本当に色々あり過ぎた。疲れても仕方がない。

そう考えているとユニは突如真顔になり、ツナの顔に自身の顔を近づける。

「沢田さん。ファーストキスのことについて詳しく聞かせてください」

沢田さん、ユニがツナのことをそう呼ぶ時は余裕が無い時で尚且つ怒っている時だ。「うん。どうしてユニがその事を知っているのかな？」

その話をした時、ユニは家の中で大人しくしていた筈だ。

そう疑問に思ったツナはユニに尋ねてみるが何故か顔を逸らした。

「……………あまり詳しく聞かないことにするけどさ。別に怒らなくても良いんじゃない？」
「それはダメです!!」

宥めようとするツナに対してユニは怒気を強めて詰め寄る。

心なしかその瞳には涙が浮かんでいるような気がした。

「だって、私……………沢田さんのお嫁さんなのに、キスだってまだしてないんですよ？
それに、沢田さんは遠くに行ってしまいそうで——」

「ユニ」

「えっ?」

涙をポロポロと流し始めたユニの顔を上げさせ、その唇と自身の唇を重ね合わせる。触れていたのはほんの一瞬に過ぎなかったが確かにそれは間違いなくキスであり、ユニは目を丸くしていた。

外から発せられツナに向けられている殺意が更に濃厚になった。

「はい。俺のセカンドキスはユニの物で、ユニのファーストキスは俺の物だよ」

「え、あ……………」

己がキスをされたということに気が付いたユニは顔を真っ赤にして俯く。

そんなユニを膝の上に乗せる形で座る。本当に小さく脆い身体だ。身体に浮かび上がっている線や点が見えなかったとしてもそう思ってしまう程に弱々しい。本当に少し力を込めただけで壊れてしまいそうな程で、それ故にツナは守りたいと思っている。

「ユニのような可憐な女の子の嫉妬なら可愛いけどさ。ユニは笑顔の方が似合ってるよ」

「そ、そうですか？ えへへ……………やっぱりツナさんは悪い人です」

「悪かったね悪い人で。まあユニのお願いなら聞くからさ、そんなに怒らないですよ」

「はい！ お嫁さんですからね！ 心を広くしますね！」

本当に可愛らしい女の子だ、ツナは心の中でそう思う。

だからこそ、彼女が自分と結婚するという絶対に幸せにならない道を歩んでいること

が受け入れられなかった。彼女は幸せになる権利がある。そしてそれは誰にも阻まれる物じゃない。だというのにユニは自身と結婚をしたいと言ってくれている。

それに対して彼女を傷つけてでも心を鬼にして断らなければいけないのに、ユニを傷つけたくないという思いがある。ユニが喜んでいると嬉しく思うし、何より彼女の望みを叶えて上げたいという思いの方が強い。

だから嫌われたくないと思ってしまう。それが心の贅肉と言うべき物なのだろうか。

「あ、そうだリボーン」

心の中で相反する己の意見に目を瞑りながらツナはリボーンに話かける。

するとリボーンはツナの方に視線を向ける。

「なんだ、ロリコン」

「うっさい黙れ、タレ眉」

「星になれ」

リボーンの逆鱗に触れたのか、今までの我儘な対応とは違い明らかに怒りを露わにして飛び蹴りを放った。ツナはその飛び蹴りを観察しつつ首を軽く動かすだけで回避する事に成功する。しかし、回避した瞬間にリボーンは回し蹴りに切り替えてツナの後頭部に土踏まずがフィットした。

「油断大敵だぞ」

「つ、このタレ眉があ——痛い痛い!! 踵が後頭部に減り込んでるう!!」

グリグリと尋常じゃない力で踏み込まれる激痛を味わう羽目になったものの、それは殆ど自業自得のようなものだった。

そしてリボーンの攻撃が終了し、ユニがツナの髪の毛が伸びていることに気付いて遊び始めた。絶賛ユニの玩具となって髪の毛を弄ばれている。

「ほらよ」

リボーンはツインテールになったツナに魔眼殺しの眼鏡を渡す。

「どうやらさつき落とした際に拾っていたらしい。ツナは軽く感謝しつつも眼鏡をかける。」

「で、リボーン。聞きたいことが色々あるんだけど大丈夫?」

ツナの問いかけにリボーンは「分かったぞ」と短く言葉を返す。

彼もツナから質問されることを予測していたのか、赤い弾丸を見せびらかす。

「こいつは死ぬ気弾、ボンゴレファミリーに伝わる秘弾だ。効果はまあ、簡単に言っちゃえばこの弾丸を脳天に受けると一度死ぬが全身のリミッターを外して蘇る弾丸だ」

「……………やっぱり、あの感覚は死だったんだね」

リボーンからの説明を聞いてツナは先ほど味わった感覚がこの瞳を手に入れた時のものと同じであることを理解する。

死とは決して戻ることが出来ない深淵の底、ツナは奇跡的に生還を果たしたが、それと言つて怖くないわけがない。むしろその恐ろしさを理解しているが故にその弾丸の恐ろしさを理解する。本当に一度死んで蘇るのであるならそれは最早魔法の領域だ。

「まあ後悔が無くちや生き返れないんだけどな」

「おい、そんな危険物をよくも俺に向けて撃つてくれたな」

「本当ならパンツ一丁になつてたしな」

「だからどうしてそうなるんだよ」

ユニの手によつて三つ編みにされているツナは怒りを込めた視線をリボンに向けてる。

仮にも最後の後継者だというのによくもまあそんな危険物を使つてくれたな、と非難するが残念なことにリボンに対しては効果が無かつたようだ。

しかし、後悔が無いと生き返れないとは変わった話だ。生憎、こんな眼を持つててもなお生きている時点で後悔塗れだ。そう言わんとして、ツナは窓の方に視線を向ける。

そしてすぐに逸らすのであつた。

「……………リボン、俺ちよつと疲れたからもう寝るね」

「駄目だゾ。やつて来た客人はもてなす。それがマフィアのボスとしての当然のことだ

ゾ

「嫌だ!! 俺は絶対に関わらない!! 外でトンファー構えて今にも殺しに掛かってきそうな雲雀さんの姿なんて見なかったんだー!」

「お、ベッドの下に武器隠していたのか。ほら、これ持って遊んで来い」

そう言つてリボーンはツナのベッドの下から一振りの刀と両腕に着ける籠手を取り出す。

「何今から遊びに行く子供に対して母親が言うような台詞を言ってるんだよ! これのどこが遊びに行く奴の持ち物なんだよ!!」

「良いから行ってこい。行かないとお前の部屋が木っ端微塵になるぞ?」

「ああもう分かったよ! 行けば良いんでしょ行けば!!」

そしてツナは武器を持つて窓から外に飛び出す。

それから一分も経たない内に金属がぶつかり合う激しい戦闘音が外からするのは、言うまでも無いことであつた。

++++

「初めまして。異なる世界の同類——私の名前は沙条愛歌っていうわ、よろしくね」

沙条愛歌と名乗った金髪蒼眼の少女はとても楽し気に話しかけてきた。心の底から

楽しいんだろう、と他人事ながらにそう思う。実際、少女の外見はとても幼く無邪気や無垢という表現が似合っていた。

くるくると踊るように舞うその姿は正に天使と言っても過言では無く、大凡誰もが同じように少女に対してそのような印象を抱くだろう。

——その身体から凄まじく臭う死臭と胸に空いた穴さえなければ。

「……………お前は、何者なんだ？」

ツナは自身がこのような所に居る原因が目の前の少女にあることを決めつける。

否、実際にこの少女が原因であり、主犯なのだろう。この何も無い世界でツナの両手を鎖で繋ぎ、身動きを取れないように拘束しているのは間違いなくこの少女の仕業なのだろう。

故にツナはただひたすらに少女を見つめる。その身体に浮かび上がる線や点も、見つめ続ける。

すると少女は口角を吊り上げる。とても愉快なものを見たかのように。

「——貴方は私の死を見ることができるのね」

少女はそう言うとして自身に対して興味を持ったのか、歩み寄って来る。

否、この少女は最初からツナに対して興味を持っていた。ただ最初と違うのはその興味が更に深まったことだった。

「うん。やっぱり可愛いわね。流石は私の同類と言ったところかしらね」
 「……………俺は、お前みたいな奴と、同類なんかじゃない——！」

不思議とツナの口から言葉が出ていた。

その発言で自分がどれだけ危険な目にあうか、それすらも分からなかったわけじゃない。だけどそれでも否定しなければいけなかった。

こんな世界を食い尽くす盲目の少女ポトニア・テロリンとは絶対に違おうと。

「俺は、沢田綱吉だ！ お前みたいな■■悪と一緒にするな！」

故にツナは叫んだ。己の魂からの叫びを叫んだ。

吐き出した言葉の意味を理解できない、そもそもとして何と言ったのかすら分からない。
 い。

だがその発言を聞いた少女は一瞬だけポカーンとした顔になるがすぐに笑みを浮かべた。

それと同時に少女、愛歌の背後から一体の獣が現れる。

——あまりにも酷く、哀れな獣だった。

大凡真つ当な産まれ方をしていないのだろう。

その様に望まれて生を授かった、産まれるべきでは無かった獣だった。

愛歌は獣を軽く撫でながらあることを言う。

「ううん。違うの、違うわ。貴方は私と同じよ。だって、貴方だって■悪なんだから」
ピシリと、音を立てて罅が入る。

獣の唸り声が聞こえる。酷く憎悪に満ち溢れ、酷く悲しい獣の叫びが響き渡った。

それが愛歌の背後に居た獣のもののかは分からなかったが、だが一つだけ理解できたことがある。

——この獣は起こしてはならない。特に、今この現状で起こしてしまえば連鎖的に顕現することになる。

理屈なんかない、ただ直感的にそれを理解してしまったのだ。

そしてツナの前に立った愛歌はツナに抱き着いた。壊れないように優しく、繊細なものに触れるかのようにとても優しく抱きしめた。

「私はツナが寝ている時にしか会うことが出来ないけれど、私のことお姉ちゃんのように思っていて良いわ。出来ればお姉ちゃんと呼んで欲しいけど」

言い聞かせるように語る沙条愛歌という少女の姿を見て、ツナは酷く哀れに思えた。

夢は語らず

「……………ごめん、さつきは酷いこと言つて」

自らに抱き着いている沙条愛歌という少女に対して綱吉は一言謝罪の言葉を呟く。

この少女については全く分からないし知らない。そもそもとして規格外の力を持つということだけは分かったが綱吉は彼女の所業を全くと言つても知らない。ある程度の見当こそついているがどちらにせよそれを弾劾する理由にはならないだろう。

怖いという思いはあるし苦手というのも正直な話だ。だがそれ以上にこの少女は軽く、どうしようもなく哀れだった。綱吉は心の底から抱いた憐憫の念を向けつつも軽く抱き返す。

綱吉は愛歌と言う人間を嫌いにはなれなかつた。

そして愛歌は綱吉に向けられている視線の意図に気付かず首を傾げていた。

「別に良いわよ？ そんなことよりお話ししない？ 私貴方のこと殆ど知らないから」

「え、ああうん。別に構わないけど」

こうして、2人は互いのことを話し始めた。

家族のこと、好きな人のこと、困っていること。嬉しかったことや楽しかったことを。

最も愛歌から語られるのは全てそのセイバーと呼ばれる青年のことについてだけだったのだが。

——逆に言えば、この少女にとっての世界とはセイバーだけなのだろう。

「ふふふ、久しぶりに楽しい会話だったわ。もしセイバーと出会わなかったら貴方に恋をしていたかも」

「その時は是非とも遠慮するよ。正直重たい女の子はユニで十分だからさ」

綱吉は心の底からこの愛歌という少女に恋をされなくて良かったと思う。

恐らくこの少女に恋をされたセイバーという青年はかなり不幸な人のようらしい。

心底同情しながら乾いた笑みを漏らす。

「でもどうしようかしら。貴方と話してみても分かったんだけど……私と在り方が違うから教えてあげられないわね。と、言うか貴方の行きつく先、お姉ちゃん心配だわ」
なんか将来的に物理的な意味で光速を超えた速度で動きそう、と言っていたがそんなことは出来ない。直死の魔眼や『』が無くても冠位級に至れそう、それも来年中にと理解できない専門的な用語で言われたが絶対に無理だと断言する。

そもそもとして、愛歌から語られた魔術等を使用しても物理的な意味で光速を超えることは出来ない。これがまた霊子世界ならば話は違うだろうが、それでも光速で移動することは出来ても戦闘には反映できないだろう。

心の中でそう結論付けた綱吉はため息を吐きつつ、頭を軽く搔く。

「だから私もね、考えたの」

おい馬鹿止めろ、思わずその言葉を吐き出しそうになった綱吉だったが、なんとか踏みとどまる。

「だけど間違いなく悲惨なことになりかねない、そう予感した綱吉の思いは正しく――

「私はこの夢の中でしか貴方の世界に干渉できない。なら貴方を介してなら世界に干渉できるということなの――でも、それは出来ないの。何でかは分からないけどね」

まるで世界そのものが拒絶している、と愛歌は心底疑問を抱いた感じでそう呟く。

「まあ貴方が直死の魔眼を手に入れたせいかは知らないけど、私たちの世界の異能が同じようにそっちの世界に少しだけ流れ出したわね。ガイア、アラヤの抑止力の仕業かしらね。まあはじき出されてたけど。逆に言えばそれだけの力がそちらにあるということなのかしらね」

「俺が産まれて13年で、そんなものを一度も見たこと無いんだけど」

「だったら無いのかもしれないわね。むしろ無い方が良いのかもしれないんだけど

………」

「だね。何でも願いが叶う願望器、それでユニの呪いがかんるようになるならやるんだけど、それも不可能だしねえ」

「あら？ 不可能だって分かるの？」

「分かるよ。本当に全能なら、世界全ての人間を、過去の人間だって救うことが出来る筈だよ」

「そうね。その通りよ。だから私はビーストを求めた。災害の獣を、■■悪をね」

「……………逆に言えば、それ以外の方法があるならそつちでやつてる、か」

「こう言っってはなんだが、きつと自分も似たようなことがあったら同じ事をするだろう。」

例えそれがどれだけやりたくない事であってもやらなくちゃいけない時はやらないといけない、特に自身の目的を達する為には。

そういう意味では、同じ穴のムジナだろうと結論付ける。

「うーん、やつぱりそう考え付かないわね。私が教えようと思つてたけど、中々上手くいかないわね……………そうだわ。そうよ、英霊の過去を見れば良いわね。そつちの方がツナにとって為になりそうね」

「やめて、凄く嫌な予感が」

「それじゃあ先ずはセイバーの昔から見せていくわ。本当なら全部見せたいところだけ

ど不可能だから大事な所だけ見せていくわ。それでも一週間は掛かるけど構わないわよね?」

「いや、だから待って。お願いだから人の話を聞いて——」

「それじゃあ行くわね。なあに、痛みは一瞬よ」

「だからやめ——」

十十十

「なあ沢田! 今度球技大会があるんだけど」

「そうだね。この怪我を見て俺が活躍できると思ってるようなおめでたい頭をしているなら参加してあげても良いけど」

「そうか!! いやあまさか沢田があんなに動けるなんてなあ」

「おい。だから俺の身体を見ろよ。どう見ても球技なんて出来るわけがないだろうが」

怒りを滲ませた声音で綱吉は机の前に立つクラスメイトを睨み付ける。

その視線を受けた男子生徒は納得した様子で下がっていき、代わりに武が近づいてきた。

武は椅子に座る綱吉の姿を見て短く笑う。

「はは、ツナも災難だったな」

「うん。本当にね……………」

綱吉は武の言葉に短く返事をする。

本当に睡眠中も含めて災難な一日だった。そう言いたげに綱吉はため息を吐いて机に顔を突つ伏す。本当に災難な日であった、雲雀恭弥と戦って全身包帯塗れになったかと思つたら睡眠中は謎の幼女によつて強制的に睡眠学習を行う羽目になったのだから。前者は骨こそ折れていないものの自分と相手ともに大きな怪我を負い、後者に関しては文字通り見せつけられていたのだから。おかげで頭が痛い、その割に妙に頭がすつきりしているのは本当に奇妙だ。それに、見せられた夢もあまり愉快なものとは言えなかつた。金髪碧眼の美少年が白い少女に何かを教わっている光景だったのだが、とにかくその少女が屑だった。そうとしか表現できない程に屑だった。

そういう意味では自分の家庭教師がリポーンで良かったと思う。

「いや、本当に少しは休みたいなあ。ユニと一緒に今度散歩でもしてみるかかな？」

家で大人しく待つているであろう妹分の少女のことを思い返す。

きつと今頃家で大人しく勉強でもしているのだろうか。そういう意味で少し心配だけど、ユニは自分なんかとは比べ物にならない程頭が良いし。綱吉はそう考えながらゆつくりと寝息を立てる。

完全に寝入っているわけじゃないが少しでも身体を休める為に、綱吉は必死になつて眠りについた。

教師が教室に入ってきて何かを言っているが中途半端に浮遊した綱吉の意識には断片的にしか聞き取ることが出来ず、何者かが此方に近づいてきていると言うことも分からなかった。

そして机が蹴られ、ガタツと音を立てながら揺れる音とともに意識が浮上し、綱吉は目の前に立っている人物を視界に収める。

「……………つけ」

綱吉の前に立っていたのは銀髪碧眼の少年で、眉間に皺を寄せて不機嫌そうな表情をしていた。

髪の色は染めているものではなく天然物であり、眼もカラコンを入れていない。ハーフ、いや、クォーターと言ったところだろうか。綱吉は後姿を向けて去っていく銀髪の少年を視界に収めながら淡々と寝惚けた脳で思考を進め、あることに気が付く。

「……………煙草……………火薬の臭い？」

銀髪碧眼の少年からした臭いに綱吉は鼻をひくつかせる。

普通ならば、というか明らかに中学生からして良い臭いではない。しかし、何故だろうか。綱吉はその臭いに対して違和感を覚えなかった。と、言うか昔イタリアに居た時にそのような特徴を持つ者が居ると聞いたことがあったような――、

「駄目だ……………全く思い出せない」

確か聞いたことがあつた筈だ。アルビートとリゾーナ、それだけでなくユニと一緒に居た時にだつて。だと言うのに全く思い出せない。綱吉は頭を抱えて必死になつて思ひ出そうとし、結局思ひ出すことが出来なかつた為そのまま机に顔を突つ伏した。

「思ひ出せないなら……………大したことじゃないだろうし、気にしないでおこよう……………」

それよりも今は身体を癒そう、そう決意し綱吉は再び意識を沈めるのであつた。

スモーキンボム

——俺は、この男を認めない。

建前上、この並盛中学校にイタリアから留学したと言うことになっている銀髪の少年、獄寺隼人は怒りを込めた相貌で一人の少年を睨み付けていた。その少年の名前は沢田綱吉——江戸幕府の五代将軍の名前と同じだが、全く関係ないので無視することにする。

兎にも角にも、獄寺隼人はこの綱吉という少年を三日間観察してそう結論を出したのだ。

この学校に転入する前に見せたあの決闘騒ぎ、あれだけは悔しいが認めよう。幼い頃、実家を飛び出してからマフィアが蔓延る裏社会で生きてきた獄寺には劣るもののあの剣道部の持田剣介という男はかなりの実力であった。それを死ぬ気弾のサポートがあつたものの一撃でノシてしまっているのだから。その上、あの後起きた逃走劇では死ぬ気弾の効果も切れており、その事から彼自身の技量が凄まじく高いことが理解できた。

話に聞いていた死を見る眼、パロールの眼だけの男では無いのだ。

——だが、認めるのはそれだけだった。

学業、特に勉強に関してはあまりに酷すぎたのだ。

「沢田、この化学式の意味を理解しているのか？」

「えつと……………一応知っているのを適当に書いてみたんですけど……………ダメでしたか？」

「駄目という話じゃない！ 何故テトロドトキシンと王水の化学式を書いたんだ貴様は！！」

「昔作つ——いえ、そんな猛毒になるとは知りませんでした。すみません」

理科の授業での一面、普通なら書かないようなことを書いたのだ。

それだけではない。国語、数学、音楽、どれをとつても人一倍劣っていたのだ。

体育に関しても決して良いとは言えないが、あのような動きをする人間なのだから手を抜いているのは明らかだった。

「認めない。俺はあいつがボンゴレ十代目になることを認めねえ」

十十十

「……………しつこい、なあ」

綱吉は不機嫌そうに顔を顰めながら後ろに視線を向ける。背後には誰も居らず静けさのみが漂っていた。それも当然か、なにせ今は文字通り授業中なのだから。普通なら

こんな所を歩いているわけがないのだから。

そう考えながら綱吉は校舎を歩きながら己に向けられる嫌な視線に辟易する。

——この三日間、ずっとこれだ。

恐らく己に殺意にも似た視線を向けているのはあの獄寺隼人という留学生だろう。

最初は気のせいだと思つて放置していたがどうやら気のせいではなかつたようであるらしい。

そこまで考えて綱吉は二三回程腕を軽く振るう。三日も経てば大体の傷は癒える、そう言わんばかりに軽く腕を動かした綱吉は瞳を閉じて自らの身体状況を把握する。

痛くない、軋まない、違和感も無い。大凡怪我を負う前の元の状態に戻つたと理解する。

「……………よし、ようやく治つた」

これなら少しくらい無茶しても問題は無いだろう。

そう判断した綱吉は素早く歩き始める。多少本気になつて走つてみるが中々振り払えない。しつこいと言つても良かった。

「ああ、本当に面倒臭い」

マファイアだかマフィンだか知らないがいい加減にしてほしい。

そう思いながら歩いていると3人の男子生徒達にぶつかつてしまう。

とは言え、その男子生徒達の格好は制服とは違い私服、それも身なりの様子から不良であるということが分かった。だからといってどうとするわけでもないが。

「おー、いてー。骨折れちまったかも」

恐らく先輩と思われる男子生徒の言葉に綱吉は更に苛立つ。

その程度で骨が折れるか、余程のことがない限り骨は折れない。過去に実際に折ったことがある綱吉からしてみたら戯言にしか聞こえない。特に最近の夢の中ですら休まないのだ。あのストーリーカー幼女のせいで強制的な睡眠学習を味わう羽目になったのだから。とは言え、愛歌にも用事があるらしく、それゆえに自身の夢の中に毎日来れるわけでは無いらしいのだが。

「おい、聞いてんのかよ」

不良達はいらだつた様子で綱吉の肩を掴む。どうやら自身が別のことを考えていたのが気に入らなかつたらしい。いや、それすらも建前だろう。恐らく偶然にも出会った綱吉のことを甚振ろうとしている。そう思わせるような下卑た笑みを浮かべている。

実際そうなのだろう、と勝手に予想する。とは言え、こちらも黙ってやられるわけにはいかないが。

心の中でそう吐き捨てた綱吉は自身の肩を掴んだ男の腕を絡め取り、そのまま背負い投げる。

右手が上から、左手が下からとほぼ同時に、微塵も曇り無く行われた一連の動作に、不良の一人はそのまま頭から地面に落下した。ゴチンと音を立てて男は地面に転がり落ちる。それに驚き戸惑う残り二人もついでに転ばせ、そのまま走り出した。

背後から視線を向けていた人物も綱吉を追いかけ始める。

「……………校舎は不味いよなあ。折角傷治つたのに雲雀さんとガチンコ対決だけは避けたいなあ……………そうだ。廃工場にしよう」

いつまでも追い掛けて来る相手に痺れを切らした綱吉は、廃工場に赴き、そこで迎え撃つことを考え付く。

どうせ戦うのならば周囲に人が居ないところの方が好都合だ。もしやらかしてしまつた場合の後処理が楽だから。

そう考えた綱吉は校舎から外に飛び出し、住宅街の屋根に乗ってそのまま駆けだした。

「ツ、アイツ猿かなんかかよ！」

背後から追い掛けていた少年はそんな綱吉を見て悪態をついた。

十十

並盛町は海、山の両方があり、雲雀家と呼ばれる名家が存在する資源にも人材にも恵まれた町である。しかし、だからといって全てが恵まれているかと言われればそうでは

なく、廃れた所が無いわけでは無いのだ。隣町の黒曜にある複合型娯楽施設の黒曜ランドが潰れたように、この並盛にも潰れた所はあるのだ。

そしてその一つの廃工場に足を踏み入れた綱吉は眼鏡を懐にしまい、近くに落ちてあつた鉄パイプを拾つて構える。

「……………ここなら人目につかない。来るなら来い」

蒼と橙色に輝くこの世のものとは思えない相貌である場所に視線を向ける。

相貌を向けてから数秒した後、一人の少年が息を荒くして入つて来る。

「息、上がつてるけど大丈夫？」

「てめえが走り回つていたからだろうが!!」

怒鳴り声を上げて怒り狂う少年、獄寺隼人の言葉に綱吉は両耳を塞ぐ。

途中、隼人が綱吉が耳を塞いでいることに気が付かず何かを話していたが、耳を塞いでいることに気が付いた瞬間まるで茹でタコのように真つ赤になった。それを見て綱吉は一瞬、愉快なものを見れたと笑みを浮かべそうになつたがなんとか我慢する。

「つけ、てめえとは会話するだけ無駄だな」

そう言うとう隼人は煙草を口に啣えて火を付けた後、懐からある物を取り出す。

取り出されたそれは筒のようなもので、所謂爆弾、またの名をダイナマイトであつた。

もしくはフィリピン爆竹でも可。

隼人が取り出した物を見て、綱吉は「あ」と短く声を漏らす。イタリヤに居た際、こんな話があったことを思い出した。

——いつも吸っている煙草を火種にし、複数のダイナマイトを投げつけて戦うという、命がいくつあつても足りない頭のおかしい少年が居たと言うことを。

その少年の異名は『スモーキンボム』とその少年に相応しい名だった。もしくは爆弾小僧、人間爆撃機とも。

「……………ちよつと、不味いなこれは」

「果てな」

綱吉は冷や汗を垂らしながら隼人が投げた爆弾を鉄パイプで薙ぎ払いながら後方に下がる。

それと同時に投げられたダイナマイトが爆発し、綱吉の身体を吹っ飛ばした。

爆発直前に後ろに下がっていたことで身体に掛かった衝撃は殆ど受け流すことに成功したが、持っていた鉄パイプが見事なまでにズタズタになってしまい、最早使い物にならなくなってしまうていた。元から錆びて傷んでいたというのもあつただろうが、正直なところこれは相手が悪過ぎる。せめて武器があつたら良かったのだが残念なことには持つて無いし、この間雲雀恭弥との喧嘩で両方とも大破している。

本当にどうしようもない。こうなったらこの場にあるもので徹底的に抵抗する——

——そこまで考えた瞬間だった。

一発の銃弾が綱吉と隼人の前を横切ったのは。

二人は揃ってその銃弾が放たれたであろう方向に視線を向ける。

「ちやおっす」

そこに居たのはニヒルな笑みを浮かべたりポーンであった。

怒涛の嵐

「リボーン、これは一体どういうこと？」

「見ての通りだぞ」

現在置かれている状況をリボーンに尋ねる綱吉であったが素っ気無く返される。

「どうやら問い質しても真面目に答えてはくれなさそうだ。そう思いながら見ていると隼人もリボーンに対し、問い掛ける。」

「あんたがああ最強の殺し屋と名高いアルコバレーノの1人、リボーンか」

「そうだぞ。そして今はそのダメツナの家庭教師だ」

「……………シヤマルが言っていた通りの人だな。それで、こいつを殺せば俺がボンゴレ10代目と言うのは本当なんだろうな？」

「ああ、その通りだぞ」

「おい」

「こっちの了承も得ずに勝手に決めるな、そう言おうとする綱吉だが隼人はそれよりも早くダイナマイトを構える。その姿を見て綱吉は何を言っても無駄だと悟り、リボーンに視線を向ける。」

「リボーン、俺武器この前壊したんだけど何か無い？」

「そうか。それならこれを使え」

そう言うとりボーンは懐から取り出したある物を綱吉に向かって投げつける。

綱吉は投げられた物を受け取り、それが何なのかを理解する。リボーンから渡された物はたきであつた。

まさかこれで戦えとは言わないだろうな、内心不安になりつつもリボーンの方に視線を向ける。

「それじゃあ戦え」

「巫山戯んな!!!」

渡されたはたきをリボーンに向かって思いっきり投げつける。

しかしリボーンはそれを読み切っていたのか少し身体を横に逸らしただけで回避する。

「刀とまではいかないからせめてナイフを寄越せよ!! こんなんで戦う事が出来るのなんて何処そのヒトツマニアくらいしか出来ないよ!!」

「その前例を知っているなら出来る。大丈夫だダメツナ。自分を信じろ」

「信じられるか!!」

無理矢理見せられていた夢の中で知ったとある英雄、その動きなら武器なんか無く

たつて倒すのは可能だろう。しかしあれは完全に長い年月をかけて染み付いた動きだ。完全に再現するにはかなりの時間がかかるだろう。

少なくとも一朝一夕で使える動きじゃない。

そんな人物の動きを模倣するのは出来ないわけじゃないがこの少年を相手にするにはあまりにも不足過ぎる。

「分かった。そんなに言うなら受け取れ」

「用意してるのなら最初から渡せよ」

投げ渡されたナイフを受け取って鞘から抜き取る。

刀身を見ればかなり手入れされているということが分かり、使い易いということが理解できた。

「良いナイフをありがとう」

受け取ったナイフを確かめながら綱吉は隼人の方に向き直る。

「待つててくれてありがとう。意外と真面目で律儀なんだね」

「はっ、別にただ待つててやったわけじゃねえ」

「そっか。なら、やりたくはないんだけど、闘おうか!」

どうせ闘うしかないのなら先手必勝、そう言わんばかりに一気に距離を詰め寄る。

すると隼人は後方に下がりながらその手に持つていたダイナマイトに火を付けて放

り投げた。自身に向かってくるダイナマイトの数は8本。その全てが同じ導火線の長さで、とても短かった。

「っ！ 猪口才な!!」

ナイフを一閃しダイナマイトを斬り捨てていく。だが同時に斬り捨てられたのは2本までで、残りは6本もあった。このまま黙って喰らうわけにもいかない為一瞬だけ速度を速めて爆発を回避するも、ダイナマイトは背後で爆発を引き起こし、綱吉の背中に爆風を浴びせる。

背後で起こった爆風に綱吉は「くっ」と苦痛に呻くも、爆風を利用して更に加速する。そしてそれを見ていた隼人は目を鋭くし、懐に手を突っ込んだ。

「2倍ボム!!」

今度は計16本のダイナマイトが投げ付けられる。

降り注ぐ爆弾の数はさっきの2倍、技の名前通りだと思ってしまうも数が増えた分厄介になった。

「流石にこれは回避できそうに無い、か……………」

このまま踵を返して来た道に戻った方が回避が楽なのだろうが、何故か後ろに戻つてはいけないと直感が告げて来る。

それに従い、勢いよく駆け抜ける。幸いなことに爆発する前に何とか爆破圏内から逃

れることができた。しかしそれは同時に爆風を背中にもろに浴びることに繋がりに――

「つと、危ない危ない……………」

後方で起爆し引き起こされた爆風は綱吉の予想よりも威力が高く、危うく転びそうになつてしまうもののか何とか堪える。本当に戦い辛い、隼人の戦闘スタイルに対して綱吉はそう評価する。

早く倒さないとこつちが負ける。そう結論付けた綱吉はナイフを構えて駆け抜けようとする。

しかしその直前、視界にある物が映つたことによりその足を止めることとなる。

「……………つちー！」

綱吉は舌打ちをしつつナイフを壁に突き立てる。いかに手入れの行き届いたナイフであつたとしても荒れに荒れていてもコンクリートの壁には突き刺さらない。そう、その筈だつた。

しかしナイフは音を立てることも無く、その刀身は勢いよく壁に突き刺さつた。

最初はこの行いに疑問を抱いていた隼人も時間が数秒経ち、綱吉が何をしたのかを理解する。

「成程、そういうことか。ようやく理解できたぜ、てめえの能力」

「理解したって、何を？」

「とぼけても無駄だぜ。今、てめえがそのまま前に進んでいたらその場所ごと爆発していた。そこにはトラップを仕掛けていたからな」

隼人は冷静に、それでいて淡々と話し続けながら少しづつ後ろに下がっていく。綱吉もそれに応じてゆつくりと、じりじりと隼人に近づいていく。

互いに警戒を続けながらも隼人はダイナマイトを手に持ち、説明を続ける。

「大方、その眼の力で罫があるのを看破し解除したんだろうが………今のではつきり分かったぜ。てめえの弱点」

自信満々と言わんばかりにしたり顔を浮かべる隼人に対し、綱吉は額から冷たい汗を流す。

「まだか、まだ時間が掛かるのか。このポンコツが。内心焦りながらも綱吉はそれを悟らせないように注意しつつ隼人の方に眼を向ける。

「へえ。それで？ 何か分かったの？」

「とぼけても無駄だぜ。さっきのダイナマイトもそうだが、てめえには手数が足りねえ。例えばどれだけその眼が物の死を捉えることが出来ようとも、その死を突くのはてめえの身体だ。だから同時に迫り来る攻撃やてめえ自身の限界を超えた動きは出来ない。それがお前の弱点だ」

「……………正解だよ。それに追加するのなら君のように絶え間なく範囲攻撃してくるような相手は更に苦手だ」

そう、それこそが直死の魔眼の弱点だ。

この眼は確かに物事の死を情報として捉えることが出来る。しかし、逆に言えばそれだけののだ。動きながら物の死をなぞることは非常に難しく、それが戦闘となると更に困難になる。

どれだけ凄い瞳を持っていようが結局はスベックの問題なのだ。故に隼人の戦闘スタイルは現時点での綱吉に対してとても有利に働いていた。

そして――、

「そうかよ。ならこれで終いだ」

隼人はその手に持っていたダイナマイトを大きく振り被る。

「2倍ボム!!」

投げられたダイナマイトは宙を舞いながらツナに襲い掛かる。

動きが止まっていた身体に無茶をさせて、このまま一気に詰め寄って勝つのが一番良い方法だ。しかしそれで勝てるかも少し自信がない。そもそもとして爆破する前に逃げ切れるかどうか分からない。

ならばどうするべきか――その答えは簡単だ。爆発する前に全てのダイナマ

イトの紐部分を斬ってしまえば良い。多少の身体に負担が掛かるができないわけでは無い。

そう考えた綱吉はナイフを強く握りしめ、振るおうとした瞬間だった。

——顔のすぐ横でダイナマイトが爆発したのは。

「あぐつ?! え、な……………」

爆発の規模としては先程見たダイナマイト一本にも遥かに劣る程度だったが、顔のすぐ横で爆発したという事実で綱吉は混乱する。

一体何が起きたというのだろうか、ダイナマイトがこんな近くにまで来ていたらすぐにわかるというのに。

「解せないようだな。特別に教えてやる」

混乱する綱吉に隼人はベルトからある物を取り出す。

取り出した物は非常に小さいダイナマイトだった。

「こいつはチビボム。今2倍ボムを放つ少し前に放り投げといた奴だ。その後には通常のダイナマイトを投げた事によつてめえの脳は錯覚を引き起こした。所詮遠近法つてやつだな——そして遅れて投げたダイナマイトが動きを止めたためえに襲い掛かる」

遅れて投げられたダイナマイトの導火線が燃え尽き、爆発を引き起こす。

計十六本のダイナマイトは連鎖的に爆発し、動きを止めた綱吉の身体に容赦なく襲い掛かる。

「不味いな……………これは、回避できない」

自らに襲い掛かろうとしている爆破寸前のダイナマイトの群れを見て、そう呟く。

どう足掻いても回避できない、攻撃範囲があまりにも広すぎる。殺すことも不可能だ、一つの爆発程度だったら殺すこともできただろうが複数の爆発は不可能だ。

正しく絶対絶命——、誰もがそう思う中で綱吉は笑みを浮かべた。

「果てな」

その言葉を最後に、綱吉の身体は爆発に飲み込まれる。

凄まじい轟音が誰も居ない廃工場に鳴り響いた。

これが物を殺すということ

「……………終わったか」

爆炎が漂う中で隼人は綱吉がさつきまで居た場所に視線を向けている。

今もなお炎上しているその場所は黒煙が立ち込めている。姿が確認できてはいないが恐らく無事には済まないだろう。むしろあの状況ではどう足掻いても逃げることはできない。

これで倒れた、等と欠片も思っていないがそれでも今のは大ダメージは确实。

隼人はそう考えながら煙が晴れていくのを待ち、もし生きているのなら更に爆撃の嵐を浴びせようとして、

身体が硬直した。

「ッ……………」

——それは獣の眼だった。

大凡そうとしか表現できない相貌で煙の中から自分を見つめている。

隼人はそう直感し、身体を動かして更に攻撃を叩き込もうとダイナマイトを取り出そうとして、自身の身体が動かないことに気付く。まるで恐怖で身体が動かないように、

美しい物を見て心を奪われているかのように。

そして煙が切り払われて綱吉が姿を現した。

「いつつ………久々に死にかけた」

全身はぼろぼろで身に纏っている制服は所々焼け焦げている。素直に言つて満身創痍としか言えない惨状だ。

それでもその瞳に宿る力は劣らず、むしろ先程よりも強くなっている気がした。
を

「つたく、時間が掛かり過ぎなんだよ。でも、これで戦える」

綱吉は心底煩わしそうに瞳を抑えながらそう呟き、眼を見開く。

蒼く輝く双眸は内に宿す橙色の光を更に強めながら隼人を射抜き、その手に持つていたナイフを突きつけた。

こいつ、まだ戦うというつもりなのか、そんな身体だというのに………。

満身創痍、最早立っているだけでも辛い筈だというのにそれでも刃を突き付ける綱吉の姿に隼人は恐怖を抱く。

しかし――、

「はっ、よく言うぜ。そんな身体で何が出来るっていうんだ？」

文字通り綱吉の身体はぼろぼろだ。それこそ今立っているのが不思議なくらいに傷

ついていた。

だというのに綱吉は隼人のその言葉を聞いて愉快そうに笑みを浮かべた。

「出来るよ。俺に出来ることならね——例えば今から瞬間移動するとか、ね」

綱吉がそう言った瞬間だった。隼人の視界から突然消え去ったのは。

「なっ、一体何処に——」

「後ろだよ」

姿を見失った為、すぐさま綱吉の居場所を探そうとした瞬間だった。

背後から声がしたのは。

「ツ!!?」

突然の出来事に隼人は思わず身体が硬直してしまい、動きが止まる。

それもそうだろう。何故なら隼人の背後に綱吉が立っていたのだから。

「お、お前いつの間に!!?」

「さあてね。俺が教えるわけじゃないじゃないか。それよりも良いの？俺から距離を取ら

なくて」

「くそっ!」

綱吉に言われるがまま隼人は後方に下がろうとする。

しかし時既に遅く、綱吉の右腕が隼人の首元を掴んでいた。しまった、と気付いた時

には隼人の眼前に綱吉の左拳が迫っていた。最初からそのつもりで構えていたのであろうと予測する前に、隼人の顔面に綱吉は拳を叩きこんだ。

十十十

(……………不味いな)

綱吉は隼人の顔面に叩き込んだ左拳の感覚に顔を顰める。

やはりと言うべきかなんと言うべきか、さっきのダイナマイトの爆撃でかなり身体に負荷が掛かっているようらしくいつものように動けない。と、言うよりは怪我のせいだかなり身体にダメージが蓄積しているだけなのだが。

どちらにせよ、今の一撃を入れただけで自分の状態というのがよく理解できた。

心の中で綱吉は自身の肉体の状況を考察しつつ、後方に打つ飛んだ隼人の姿を見つめる。

「……………っ、これぐらい全然大したことねえ!!」

しかしながら拳の入り甘かったのか、隼人は顔を擦りながら平気そうな顔を浮かべ

る。やはり大した一撃を与えることができなかった。その事実には歯噛みし悔しがるものの、この怪我では打撃を行っても意味が無い。むしろ自分のダメージの方が酷い。

さつきと同じ手は二度と通じないだろう。今のは直死の魔眼を使い、距離という概念

を殺したために起きた現象ではない。それに概念の死すら見えるようにしている為、かなりの負担を掛けている状態だ。

—— 沢田綱吉が有する直死の魔眼は、異なる世界における宙の理を持つ少女、退魔の家系の少年の有する特性と殆ど同じである。

違いがあるとすれば、少女の持つ魔眼のようにONとOFFの切り替えができないと言うこと、少年の有する魔眼のように使い過ぎると脳が壊れることはないこと、少女と同じ死を見ることが出来る上に少年と同じように点すらも見ることができること。

しかし、それ以上に綱吉の魔眼が死を見るには時間が掛かるのだ。非生物の死を見るのには時間が掛かり、より時間を掛ければ概念の死すらとらえることができるようになる。だが死を見ることが出来るのは綱吉自身がその死を見ようとしているからであり、意図的に眼を使っているからだ。故に綱吉はさっきのように距離を殺すという手段を最初から使えなかったのだ。

(しかも、この眼は意図的に見ようとしなければ元の状態に初期化される。魔眼殺しが無くても)

改めて使い辛いと心の底から思う。

戦闘で使うには技術が居るし物の死を見るようになるにはそれなりに時間がかかる。

負担は他の二人に比べて軽いが戦闘での実用性は二人に遥かに劣るだろう。

しかしそれがどうした。使いにくい、劣る？

そんなこと知るか、使えるものはなんだって使つてやる。

時間が掛かるならそれだけ時間を掛ければ良いのだ。ただ、それだけの話である。

「悪いけど、次は手加減できない」

ナイフを構えて隼人に突き付ける。

これ以上は自身の限界だ、もう既に手加減できる強さではない。

最悪、右手を切り落とす。そのつもりで戦う、そう決意した綱吉の瞳は今までの優しい眼とは違い、冷酷と言つても良い程冷たい色を見せた。

その視線にあてられたのか隼人はゾクリと一瞬だけ身体を震わせ、身体に走つた悪寒を振り払うかのように懐からダイナマイトを取り出す。取り出されたダイナマイトの本数はさつきまでの数とは桁違いに多く、今にも指から零れ落ちそうであった。

「3倍ボムー！」

その技の名を言うと共に隼人は手に持ったダイナマイトを投げようとした——その瞬間だった。

彼の両の手からダイナマイトがポロポロと零れ落ちたのは。

「なっ!?!」

両手から零れ落ちるダイナマイトに隼人は驚愕の声を上げるもののもそももとして

考えれば当然の結末でしかなかった。

獄寺隼人の技の殆どがただダイナマイトを投げつけているだけ、というわけではなく爆破するタイミングに合わせて放っていた。恐らく彼自身の知能が高いからこそ成立する技なのだろう。綱吉がその技を真似しようとしたら間違いなく失敗する。

しかし、それは平静の状態であればの話だ。今の隼人は綱吉の殺意に恐怖している。その上、今の今まで使わなかったあの三倍ボムとかいう技は恐らく彼自身でも上手く使えない。いいにない技なのだろう。

そして無理な技を使った代償として、隼人はその爆発の威力を己に味わうことになるだろう。

恐らく死、それ以外の結末は無かった。

そう、ここで獄寺隼人の敗北は確定してしまったのである。

十十

(はっ、当然の結末か)

今になって思い返せば本当に碌でも無い人生だったと心の中で隼人はそう呟く。

実の母親は父親のファミリーの手によって命を奪われ、その事を知った自身は実家であつた家から飛び出した。異母兄弟でありながらも自身のことを若干過保護気味に、されどはた迷惑な姉の制止を振り切つて。

それからの日々は最悪だ。東洋人の血が入っていると言うことでマフィアの世界からは鼻で笑われ、いざマフィアになれると思ったら鉄砲玉でしかなく、危うく自分を助けてくれた恩人の親子を不幸にするところだった。

そしてマフィアボンゴレの後継者である目の前の少年との闘いで死ぬ、本当に殺すつもりがあったわけじゃなかったが気に入らなかった。自分が持っていない物を最初から持っている彼が羨ましくて、憎くて――。

(ジ・エンド・オブ俺……………)

隼人は自らに襲い掛かる死に対して受け入れる覚悟を決める。

決闘として呼び出したのだ。死ぬことだって覚悟している。

「なに勝手に諦めてるんだー！」

しかしその決意と覚悟は隼人の顔面に綱吉の拳が当たった。

叩き込まれた拳は対して痛みも無く、自身の身体を後方に軽く突き飛ばすだけだった。

「なっ、てめえ……………」

突然の出来事に困惑の表情を浮かべる隼人はようやくそこで理解した。

沢田綱吉が自身を突き飛ばし、自分がさっきまで立っていた場所に居ると言うことを。

「あー、うん。これ足の一本じゃ済まなさそうだなあ」

他人事のように眩く綱吉の表情はとても安堵していた。

まるで自分を助けたことが嬉しいかのよう。

——そして綱吉は爆発に飲み込まれた。

さつきまでの規模の物とは比べ物にならない、それこそ身を焦がすどころではなく文字通り吹っ飛ばす程。爆発の際に発動した黒煙は綱吉の肉体をそのまま飲み込もうとした瞬間、綱吉の眉間に穴が一つ空いて仰け反ったのを、隼人の瞳は捉えていた。

命の価値

額に走った衝撃によって意識が暗転する中で綱吉は自分の身に何が起きたのかを理解する、理解出来てしまう。どうやら自分はまたあの変てこで尚且つ意味不明な弾丸、死ぬ気弾を受けてしまったようであるということ。

再び死の淵に追いやられる意識が再浮上し、額から炎が灯り、先日断ち切ったばかりの髪の毛が踵の辺りまで伸びきってしまう。

瞳が見る死の情報も一気に増えてオーバーヒートを引き起こし、両目から一気に血涙が噴き出す。ついでに鼻血もドバドバ出て来る。おかげで一気に貧血になったわけだが、そのせいで走馬灯を見ってしまう。

イタリアでユニを攫った悪漢どもを一人ずつ血祭りにあげた上で独房に叩き込んだこと、アルビートから幽霊の知識を貰ったこと、朝起きたら何故カリゾーナが裸になって一緒に眠っていたこと。それ以外にも級友の山本武と一緒にこの町に起きた怪事件を解決したり、雲雀恭弥に殺されかけたり、内藤ロンシャンの彼女を偶然見てしまいS AN値チェックすることになったり等……。

(あれ、碌な記憶が無い……………)

何故死ぬ気になってまでこんな走馬灯を見なくてはいけないのだろうか。そう思わずにはいられなかった。

幸いなことに死ぬ気であるこの状態なら爆破されても大怪我で済むだろう。

そんな時、ある言葉が脳裏を過ぎった。

『セイバーのスキルには魔力放出ってスキルがあつてね』

夢の中で愛歌が語っていた言葉の内容、それは異世界の騎士王が有する技術の話。

この世界に魔力は存在しない、分からないがそれを理解出来ている綱吉はその時は殆ど聞き流していた。しかし今、ある事を考えたのだ。

(別に使うの魔力じゃなくても良くないか?)

その事を考えた瞬間、綱吉は気力を炎に変えて身体から放出する。

殆ど意識せず、無意識的に、されど確実な使い方を今この場で直感し、使ってみせたのだ。

放出した炎は今にも消えてしまいそうな程に淡い橙色をしており、力強さは欠片も無い。まるで全てが足りていないかのように陽炎でしかない。しかし、夢で見た魔力の代わりとしては十分だ。

全身から噴き出した炎は己が身体を破壊しようとして迫り来る爆炎から守り、ダメージを最低限にする。全くと言っても良い程ダメージが無かったわけではないが、それでも身

体を守ることはできた。

爆炎が晴れ、視界も元に戻り、貧血でだるくなっている身体で一步、また一步前に踏み出す。

歩く先に居るのは先程殴り飛ばした隼人がへたり込んでいた。

十十

「……………何故、俺を助けた」

隼人は眼前に立っている綱吉の姿を見つめる。

身形はポロポロで今にも倒れてしまいそうな程弱っており、血祭りとしか形容できない程に血塗れだ。その上、眼、鼻、口からも血が流れている。

そんな状態であるという筈なのに、この少年は今もなお立ち続けている。自分を庇わなければここまで怪我を負う必要だつて無かつたはずなのだ。

「敵である俺を、何故——」

「……………身体が勝手に動いていた、じゃダメかな？」

質問の問いに対し綱吉は「ははは」と短く笑う。

その笑みはとても先程の冷たい瞳をしていた者とは思えない程、優しく慈悲深いものだった。

「俺は、お前の命を狙った奴なんだぞ!! なのになんで」

自身に向けられるその笑みを見て隼人は訳が分からなくない恐怖に襲われる。

理解できないわけじゃ無い、その笑みを浮かべる人を自分は知っているのだから。

「そんなの、助けない理由にならないよ」

やせ我慢していることが容易に分かった。

「そんなの、助けちゃいけない理由にはならないよ。だからゲホッ、ああくそ……………なんて言えば良いのか分からないな。俺、そこまで頭良くないし、馬鹿だし……………」

辛そうに頭を掻きながらも綱吉は言葉を続けようと考える。

「でも、これだけは言えるよ。生きることを諦めるな、死んだら全部おしまいなんだよ。死んだらやりたいことだって出来なくなるだろ」

その言葉を最後に綱吉は完全に意識を失い、地面に倒れ伏した。

ダイナマイトの爆発によって荒れた工場内で激戦を繰り広げた彼とは思えない程、その寝顔はとても安らかなものだった。

(こいつは……………いや、この方はそんな理由で俺の命を——)

隼人はその事実には戦慄し、同時に清々しく思ってしまう程思ってしまう。

最初から負けていた、いや、勝負するまでも無かったのだ。強さでは無く、心が最初から負けていたのだから。

「……………俺の、負けです。十代目」

不思議と口にした言葉は隼人が思っていたよりもすとんと心に落ち、染み渡った。

十十

「——で、ツナは転校生と決闘して大怪我を負ったわけか」

翌日の教室で武が笑いながら言い放つ言葉に綱吉はこくりと首を縦に振って頷く。

今はまだ話そうとするだけで全身が痛くなり、今にも泣き出してしまいそうになる程の苦痛が全身を支配していた。

「相変わらずツナは面白そうなこと笑いながらやってんのな」

「うん、山本のその天然さは変わらないね」

「ツナも天然なのな」

「ちよつと待って、俺の何処が天然なのさ」

等と下らない会話を繰り返す。

綱吉自身、我ながら本当に情けない話だと諦めた様子で包帯まみれの自身の肉体を見つめる。

随分と鈍つたものだ、これでも毎日努力はしてきたつもりなのだが本当に情けない話だ。

そう思いながら包帯塗れの身体に浮かぶ線を見て、溜め息をつく。

「そーいやツナ。お前何で眼鏡をしていないんだ？」

「喧嘩のせいでぶっ壊れた」

正確にはダイナマイトの爆撃の際に服の内側にしまっていたのが割れたのだが、どちらにせよ結果的には一緒だった。あの決闘、と呼ぶには少しばかり凄惨な争いだったがそれだけの被害を出したのだ。建物が無事だったこと自体、不思議としか言いようがなかった。

そしてそんな爆撃を受けてなお五体満足で生き残っているのは少し驚きだが。

「おかげで最近では眼鏡を外して過ごしてるんだよ。見ようとしなければ線も見えづらくなるし。無くてはもまあ何とか生活はできるよ」

「折角だしこれを期に眼鏡を外したら良いんじゃないか？」

「嫌に決まってるよ。感情的になつたらすぐに線が見えるんだし、出来る限り使いたくないんだよ俺は」

自分の性格が感情的になりやすいということを理解している。

だからこそ魔眼殺しを付けていたというのに、おかげでしなくても良い苦勞をする羽目になっているのだ。

心の中でそう愚痴っていると教室に一人の生徒が入って来る。獄寺隼人だ。

隼人が入って来た瞬間、教室の中の空気が凍り付く。それもその筈、転校してきてから僅か数日で校内でも恐れられる不良となったのだから。

そんな彼が綱吉の下にまで歩み寄って来る。

(もしかしてこの前のことで文句でもあるのか?)

それならばまた相手をするだけだ。今度は十分に用意し、対策をすれば良いだけなのだから。

しかしどうしてだろうか、何故か物凄く嫌な予感がする。

上手くは言えないが何かこう、厄介な赤ん坊の思惑通りになっ**て**いつ**て**いる**よ**うな**気**が**す**る。

何故か湧き上がる不安を気のせいだと思ひ込み、払拭しようとする綱吉に隼人は近づき、

「おはようございませす十代目!!」

敬語、それも相手を心の底から敬服し慕っているであろう言葉遣いと目をしてそう言ったのだ。

その瞬間、教室内の空気が変貌する。恐怖から疑念に、違和感に、そして何が起こっているのか分からない理解不能さに。

「……………ん?」

そしてそれは綱吉も同じであり、隼人の言葉が理解できな**か**った。と、**い**う**か**理**解**し**た**く**な**か**つ**た。

「ちよつと待つて獄寺君。今の言葉の意味つて一体——」

「これから貴方の右腕として誠心誠意仕えさせていただきます！」

「お願いだから人の話を聞いて、頼むから！」

目の前で欲しいおもちゃを貰った子供のように目を輝かせる隼人に困惑する。

しかし偶然にも窓の外で木の上に上り、双眼鏡を持つて此方を覗き込んでくる黒スー

ツの赤ん坊、もといリボーンの姿を発見する。

リボーンは綱吉と目が合うとニヒルな笑みを浮かべて口を動かす。

読唇術を持っていない綱吉でも、この時ばかりはリボーンの手紙が理解できた。

『ファミリーゲットだぜ』と。

(あ、あのたれまゆがあ……………!!)

怒りに身を震わせるも、この後に待ち受けるクラスメイト達からの詰問や隼人の対応

のせいで綱吉は黙り込んでしまう。

しかし内心では自身の家庭教師を自称する赤ん坊に対しての怒りで満ちていた。

(イタリヤに送り返そう。段ボールにつめて宅急便で)

天然な野球少年との出会い

最近、ユニは少しばかり不機嫌になっていた。

気が付けばいつも大怪我を負っている婚約者の姿を見て、しよっちゆう不安になる。それなのに我が婚約者様はいつものように笑みを浮かべて「大丈夫、心配しなくても大丈夫だよ」と語る。

全身に包帯を巻いて治療してなお痛みで顔が歪んでいる時があるというのに、そんな姿を見てしまったら大丈夫なものかと断言する他ない。

だが自分に何が出来るといえるのか、ユニはそれがわからなかった。

しかし、どういった偶然か、気がつくとも知らない場所に居たのだ。

そこは正に原初の地獄と言っても良い場所だった。

そしてそこに存在するドリルのような形状をした剣を見て、何故かは知らないがとても惹かれたのだ。

それは剣の方も同じようで、ユニは自分に使われたがっているということを理解する。

故にユニは剣に手を伸ばし、

「ほお、まさか××がこの我以外を認めるとはな」

突然現れた金色の王に腕を掴まれ、その行動を止められた。

男から放たれる威圧感は凄まじいもので、かつて垣間見た婚約者の放つ圧よりも強い。

まるで全てを支配する王であるかのように。

「ふむ、成る程……………そういうこともあるのだな。中々に愉快な話だ」

心底おかしそうに男は笑い、剣を手に持ちそのままユニの身体にへと突き刺した。

深々と突き刺さった剣は身体に沈み込んでいき、最初からそうだったかのように身体に文様が浮かび上がった。

「良いだろう、今回限りの特例だ。貴様にくれてやろう。最も、異なる世界の法則だから

このようなことができたのだがな」

くつくつと笑みを浮かべる男にユニは何故か申し訳ない気持ちを抱く。

先程のあの剣、あれは間違いなくこの男性の物であり、とても大切な物であるということが窺えたからだ。

しかし男は大して気にも留めず、黙って首を横に振る。

「気にするな。なあに、此度の我はついでで招かれたのだからな。無粋といえば無粋なのだろうよ」

男はユニの頭に手を置いてガシガシと強く撫でる。

「では行くが良い。異なる世界の古き血を引くものにして新しき人類■よ。貴様の運命は今、大きく変わった。貴様は戦う力を、己が運命を切り開く力を手に入れたのだ」

その言葉を最後にユニの意識は浮上する。

まるで導かれるかのように浮上する意識の中で、ユニは確かに聞いた。

「既に覚醒を果たしている海は涙を、そしてお前は乖離を手に入れた。貝の方は未だ手に入れていないがな。心せよ小娘、此度の結末は我が瞳をもつてしても、根源と繋がった者でさえ予測つかない結末になるだろう」

「お疲れさまでした十代目!! お荷物をお持ちいたしますー!」

「やらなくて良いからね獄寺君。お願いだから」

あの一件以来、何故か隼人が自分の事を十代目と呼ぶようになってしまった。

綱吉個人としては非常に迷惑、というわけでもない。隼人個人と友人になれたという意味合いでもあるし、何より素の彼は結構愉快な性格だ。面倒ごとはあまり好きじゃないし、巻き込まれるのは更に嫌だが、こうしてバカ騒ぎ出来る友人ならば歓迎だ。

少し人の話を聞かないところもあるが、それはそれで愉快だし、何より一緒に居て楽しくてうれしいのだ。

「何を言います十代目！ 十代目の荷物持ち、身辺の警護は右腕である俺の役目です！」
「大丈夫大丈夫。そんな事ならないから」

しかしだからと言ってここまでやられるとは思わなかった。

きつと彼のような人が頭の良い馬鹿と言うのだろう。そんな考えが綱吉の脳裏を過る。とは言え、このままなのは少しばかり良くない。

何故なら先程から自身に向けられる視線が嫉妬交じりのものになっているのだから。

理由は分かる。獄寺隼人はイケメンで、なおかつ不良だ。近頃の若者はああいった者に対して魅力を感じるのだろう。最も隼人は不良どころかマフィアなわけなのだが、決して悪人では無いし、意外と常識的なところもある。

綱吉が関わりと三枚目になるが、普段は二枚目だ。これでモテない筈がない。

だからこそ綱吉は女子達から嫉妬の視線を向けられていた。それが鬱陶しいわけなのだが、それだけならばまだマシだった。中には時折不気味で背筋が凍るような視線を向けてくる者も居り、それ自体に恐怖を覚えていた。

何故かはわからないが、その視線の持ち主の意思だけは直死の魔眼をもつてしても殺すことができないような、そんな恐怖感があるのだ。

等と心の奥底で思っていると、何者かにヘッドロックを掛けられる。

「ようツナ！ 今日一緒に帰らねえか？」

ヘッドロックを仕掛けてきたのは親友の山本武であった。

「て、てめえ！ まさか十代目の命を狙っているヒツ——」

「獄寺君止めて止まって。俺の友達だから！」

教室内でダイナマイトを取り出そうとする隼人に、綱吉は制止の声を掛ける。

隼人は「わ、分かりました」と口では言うが、心の底から理解しているわけではない様子だった。

「あははは、変わった奴だなツナ！」

「見ている分には愉快だし、巻き込まれると大変だけど良い人なんだけどね。少し暴走しちゃうところが……」

「じ、十代目!?!」

まるで裏切られたといった表情を浮かべる隼人。

そんな彼を、否、綱吉を含めた三人を見る周囲からの視線が更に濃厚になった。

具体的には澱みまくった汚泥の、それこそ深淵の果てにある根源にして起源のようなそんな感覚だった。決して「寝取られ!?! 寝取られなの!!?」と顔を真っ赤にして鼻息を荒くしている腐った婦女の方々の姿なんて見えない。見えないっただけ見えないのだ。

「それじゃあ獄寺君、今日は三人で帰ろっか」

「なっ、十代目!?!」

「大丈夫大丈夫。山本だから大丈夫だよ」

「ん、まあな。帰りは家に来て寿司でも食わねえか？」

「よし頑張る。山本のお父さんのお寿司美味しいし」

楽し気に会話をしつつ綱吉達は学校を後にする。

去り際に腐った欲望をぶつけられるが、もう無視することにした。魔眼殺しが無くなつたことで、見えちゃいけないもの見れるようになってしまったのは本当に嫌な話だ。

「……………それにしても山本とこうして帰るなんて珍しいよね」

「ん、ああそうだな。あの時は本当に大変だったんだぜ？」

「いやー。俺等二人が警察の厄介になりかけたりしたこともあったしねえ。本当に大変だったよ」

昔の事を思い出し語らう綱吉と武。

そんな二人のやり取りを見て、隼人は武に対して苛立ちを覚えたのか懐に腕を突っ込む。

「そーいや獄寺、お前ツナに命救われたんだつたっけ？」

「……………ああ。俺は十代目に命を救われた」

隼人の言葉に武は笑みを浮かべる。

「俺もそうだ。俺もツナに命を救われたんだぜ？　だいぶ前の話だけだな」

その言葉に隼人は驚愕の表情を浮かべ、綱吉は懐かしそうに呟く。

「ああ、確かあの時だったね。山本と友達になったのって、丁度このぐらいの時間だったよな」

夕方、それも日が沈む時間帯——それは夜の始まり。

——
××—— 此度は彼等の出会いを語るとしよう。

山本武は恵まれた人間である。少なくとも他人から見た評価がそれだろう。

運動神経抜群で性格も明るく、勉強は得意では無いが決してできないわけでもない。大凡誰からも好かれる人間だ。

だがそんな彼でも苦勞したことが無いわけじゃない。母親は既に亡くなっている。だが父親がその分育ててくれたのだ。そんな父親の手伝いとして仕事をやることもある。最近では野球をやっている為中々できないが、父親は応援してくれていた。

だからこそ精一杯野球をやっていたのだが——、
「くそっ、まさか自肅になるなんて……………」

悔しそうに呟きながら手に持っていたバットを振るう。

野球部だけが活動を自肅しているわけではなく、全ての部活動やごく一部を除いた委

員会も活動せず、生徒は全員下校していた。

何故下校しているのか。その理由は、最近殺人事件が多発しているからである。

ただの殺人事件ではなく、一家惨殺。それも手口や手段も酷いなんて言葉では片付けられない程に残酷だったのだ。

警察だけでなく、雲雀恭弥率いる風紀委員ですら犯人を特定できていないという。

「……………こんな事をしている場合じゃないっていうのに」

歯を食いしばり、拳を強く握りしめる。

もうすぐ野球の大会があった。入学してから初めての大会があったのだ。

だというのにこんなことで躓いてなんかいられない。ただでさえ最近はうまくいっていないのに。

「……………って、こんな時間か」

何とかスイングだけでも維持しようとバッティングセンターでトレーニングをしてきたが、どうやらかなりの時間が過ぎていたらしい。

その事に気が付いた武は帰路につく。

身を焦がす程の焦燥が武を苛み、全身を力ませる。どうして良いのかすらも分からな
い。

そんな時だった。金属同士がぶつかり合う音が響いたのは。

「ん、なんだこの音？」

ふと気になった武はその音がする方に歩を進める。

数分程歩き続け、音の出どころに辿り着いた武が目にしたのは――、

刀を振り回している甲冑姿の包帯男と、同じように刀を振り回している沢田綱吉の姿があつた。

――これは家庭教師と出会う前。

――イタリヤから戻って来た綱吉と武が友達になつた最初の事件、その始まりである。

イタリア帰りの鮪

ぶつかり合う剣戟の数々、互いに火花を散らしあいながら鏖戦り合う二人（片方は人であるかすら怪しいが）の姿。大凡この世のものとは思えない程幻想的であり、現代日本では間違いなく一発で警察に御用となつてしまつても文句も言えないだろう。

しかし武にはその姿にとても目を奪われたのだ。

「一体、何が起こつているんだ？」

茫然と呟く武の前で二人の戦いは決着を迎えようとしていた。

包帯甲冑の男が振るつた刀を回避し、綱吉は懐に潜り込んで切っ先を胸の中央に突き刺す。

ガシヤリと甲冑が揺れる音と共に包帯甲冑の男は地面に崩れ落ちた。

「魂と肉体の繋がりを殺した。もう、その身体でお前は戦えない」

地面に崩れ落ちた包帯甲冑の男に綱吉は懐から取り出した塩、ウイスキーボトルに入つた琥珀色の液体を振りかける。

するととてもではないがこの世の物とは思えない悲鳴染みていながらも声にもなつていない叫び声をあげる。あまりにも悲痛に満ち満ちた叫びは木霊する度に周囲の

木々を揺らし、

マッチに火をつける。

「アルビートも言っていた。『火は除霊にも重要なものだ。特に肉体を得た霊には更に効果的だ』って」

殆ど無感情と言つても良い程冷たい表情で綱吉は火のついたマッチを放り投げる。

放り投げたマッチの射線上には琥珀色の液体が全身に降り掛かった騎士甲冑の男の身体であり、マッチが落ちると共に男の全身は勢いよく燃え上がった。

あまりの蛮行に武は制止させようと飛び出そうとするが、男の口から耳を劈くほどの悲鳴が鼓膜を振動させ、武は思わず両方の耳を塞いでしまう。

「あ、ぐう……………」

最早身動きすら取れない中で、武はその眼で確かに見た。

今もなお燃え上がっている男の瞳が此方を向いて、口から青白いプラズマのような物が飛び出し、自身の方に向かってくるのを。

「なっ、しまった!!」

綱吉はすぐさまその手に携えていた刀を青白いプラズマ目掛けて勢いよく投擲する。

運動神経が悪い同級生が放ったものとは思えない一撃はいとも容易くプラズマを貫いた。

『ツ、——れ、——えん、流!! ——、剛ツ!!』

刀に貫かれたプラズマは一瞬だけ、途切れ途切れに言葉を発するがすぐに消え失せる。

プラズマを貫いた刀はそのまま武の顔の横を通り過ぎて地面に突き刺さった。

「つち、殺せなかつたか……………」

消え失せたプラズマの姿を確認し、綱吉は眉間に皺を寄せる。

「はあ……………何でこんな所に人が居るのかなあ。アルビートじゃないから人払いの結果とか張れないんだから仕方が無いんだけどさあ」

ため息交じりに髪の毛を掻き分けて頭をガシガシと掻きながら武に歩み寄る。

「さて、取り敢えず質問するけど怪我とかは無いかな?」

×× 普段の彼とは思えない程、冷静な二色の相貌が見下ろしていた。

×× 場所は並盛町の商店街にある竹寿司と呼ばれる寿司屋。

近頃の回転寿司等手頃なお値段で食せる場所と違い、由緒正しき老舗と言っても過言でない回らない寿司として有名な高級寿司店である。

そんな寿司屋の店内で綱吉は自身の前に置かれている二貫の寿司を視界に収めていた。

大凡完璧と言っても良い程、バランスの取れたネタとシャリの形状と大きさ。それは最早一つの芸術と評してもいいだろう。

しかし問題なのは味だ。どれだけ見た目が美しかろうと味が悪ければ全てが台無しなのだ。

鮭の赤みの寿司を手で掴む。寿司を食べる時に箸を使うのはマナーとしてなっていない。が、そんなのは関係ない話だ。

軽く醤油をつけて一口で食べきる。口の中一杯に広がる新鮮な生魚の風味、赤身の旨味が口腔内を支配する。

「……………うん。美味しい。すみません、おかわりしても良いですか？」

「おうさー！ 武のダチなんだろう？ なら遠慮しないで食っていけ！」

「ありがとうございます」

一瞬で舌が敗北したことを理解した綱吉はそのまま欲望に身を任せて寿司を食すことに耽る。

「で、寿司は美味しいから良いとして……………山本は何か聞きたいことはある？」

綱吉の発言に隣に座っていた武は顎に手を当てて考える。

つい先程見たあの謎の包帯甲冑の男、炎が燃え上がり男が居たであろう場所には何も存在しなかった。正確には焦げ屑のようなものは残っていたのだがそれはとても人と

は思えないゴミ屑でしか無かったのだ。

「んー。正直分らないことばっかりなんけどな」

「だよねー。まあ簡単に説明しちゃうとあれは悪霊かな？ 生前に恨みを抱えた靈魂がなるといふあれ」

「……………えっと、ツナってそう言うの信じてるのか？」

「信じてるってか見えてるし、つい最近までイタリアでそういうのを見ることが出来る人たちの所に居たんだよ」

呆気らかに寿司を頬張りながら綱吉は簡単にそう説明する。

「世界ってのは広いんだよ。少なくとも俺は雷を浴びて受肉、物質化した幽霊にあの世に連れて行かれそうになったこともあるし」

「はは、ツナって変わった奴なんだな」

「……………変わっているってのは自覚してるけど山本にそれを言われるのは釈然としな」

「でも面白い奴なんだな。学校だとすっげえ大人しいのに」

「……………学校でも気を使わないといけないのは辛いんだよ。ストレスだってたまるし」

「そういうものなのな」

「そういうものだよ。本当に面倒な話なんだけどね」

そう言うのと綱吉は最後の寿司を口の中に運び、お茶を飲み干す。

満足気な表情を浮かべてほっと一息を付く綱吉の姿を見て、武はついさつき行われていた争いを思い返す。

あれは本当に命のやり取りだった、奪い合いだった。

遊びなんかではない、それこそ命を懸けた文字通りの死闘。ほんの少しでも間違っていたら死んでいたし、そうでなくても大怪我は避けられない。

その事実を山本武は知ってしまったのだ。

「なあ、ツナ——」

だからこそ武は綱吉に対して手伝いを申し出ようとして、

「駄目だよ」

それを察した綱吉によって断られてしまった。

「ま、あれは俺が何とかするからさ。山本は今回見た事は忘れて構わないよ」

「え？ いや、俺も何か手伝えることがあれば——」

「そーいうと思ったよ。でもその優しさだけで十分だよ」

微笑みを浮かべながら武にそう告げると綱吉は鞆と刀を入れたケースを持って竹寿司から出て行く。

「山本は野球やってるんでしょ？　ならそっちに専念しなよ。俺なら大丈夫だからさ」
綱吉が浮かべた笑顔に武は何も言えなくなってしまう。

もし、この時、どんなことを言ったとしても綱吉は一切として聞き入れようとしなかつただろう。しかし、もしこの時にもう少し綱吉に対して意見を言っていれば結果は違つただろう。

そして山本武はこの後、心底から後悔することになる。

それはかつて敗れた残骸の、その成れの果てだった。

過去に轟かせたその名は既に忘れ去られ、自身を破つたあの篠突く雨は既に刃を捨てた。

口惜しい、口惜しい、嗚呼口惜しい。

もし血肉があれば、戦うことが出来る肉体があるのであれば復讐することが出来ると言うのに。

怨念にも似た呪詛を吐き散らしながらソレは今もなお憎悪の炎を燃え上がらせる。

「ふうん。君は復讐がしたいんだ」

その声が届いたのか、一人の青年が口を開く。

「なら僕が何とかしてあげるよ。君の復讐を果たす為に必要なものは僕が用意する」

青年の言葉に怨念はその炎を更に燃え上がらせる。

嘘だというのであるならば燃やし尽くすと言わんばかりに強めて。

だが青年はどこ吹く風と言わんばかりに飄々とした態度で、その手に持っていた近未来的な三色の刀身を有する剣を地面に突き刺した。

「大丈夫だよ。僕は嘘はつかないからね」

そう言うとき青年は極めて愉快そうに口元をゆがめた。

時雨の燕

——これは沢田綱吉がイタリアから帰ってきた頃の出来事で、山本武と親友になるまでの物語である。

「……………本当に、ちょこまかと逃げ回ってるな」

ビルの屋上に座り込み、綱吉は町全体を見下ろしていた。

プランプランと地に着かない足を揺らしながら浮遊感を楽しみ、手に持っていた牛乳を飲み干す。

両方の瞳から流れ落ちる血涙が僅かに入ってしまったのか、少しだけピンク色になった牛乳の味は濃厚なミルクの風味に鉄の味がミスマッチしており、とてもではないが飲めた味じゃない。

しかし栄養は取らないといけない。徹夜で街中を見渡していたのだから疲れがたまっているのだ。

特に脳に栄養を送り届けなければならぬ。雑味である鉄の味も、流れ出た血液を補給するという意味に変えれば何とかなる。

自らにそう言い聞かせながら綱吉は飲み干した牛乳瓶を投げ捨てる。

綱吉の手中から離れた牛乳瓶は重力に従って自由落下し、ガシャンと音を立てて砕け散った。

「……………今回の事件、間違いなく人為的に起こってる」

幽霊にはこのようなことは出来ない。

そう結論付けた綱吉の脳裏に親友の言葉が蘇る。

『霊と呼ばれるものは例外を除き、基本的に生前の恨みや後悔で動く』

親友の言葉通りだった。今回ののは明らかに霊が一人で動いたものではない。

生前が人間だったとしても基本的に肉を持たない存在だ。生前と同じように行動が

できるわけでもないし、意思だって希薄な物になるだろう。

よって強い意志、つまり恨み等の要因が必要になるのだ。

だからこそ、霊が肉体を手に入れるという行動を取った時点で第三者が介入しているというわけなのだ。

「ま、誰かが関わってるのが分かったってどうしようもないんだよなあ……………」

「いやいや、そこまで分かるだけでも見事だよ沢田綱吉君。やっぱりこの世界の君はかなり変わってて面白いよ」

ガキインと甲高い金属同士がぶつかり合う音が響き、互いに持っていた武器が唾競り

合う。

綱吉がその手に持つ日本刀と背後に立っていた男が持っていた青、赤、緑の三条の光を有す近未来的な剣は擦れ合いながら火花を散らす。

「うん♪ やっぱり、出会って良かったよ綱吉君。僕の名は白蘭って言うんだよろしくね。」

「……………お前が全ての元凶か？」

「アハハハハ♪ 尋ねながらも攻撃してくるなんて、もう殆ど確信してるよね」

一見好意的に話をする白蘭と名乗った男は綱吉の拳を紙一重で避けながら心底楽しそうに笑う。

その笑みに嘲りは無く、ただひたすらに純粹だった。

「……………お前、一体何者だ？ 一体どうしてこんな事を——」

「やだなあ。君も分かっているくせにさ」

「……………」

言外に自分が主犯だと言っている白蘭は奇怪な剣を振り回しながら楽し気に告げる。

綱吉は白蘭の背後に、とても恐ろしい死を連想させるような髑髏が浮かんでいるのを見ってしまう。

「うーん。やっぱり見えてるんだね、まあその眼は便利だからねえ。ああ、僕も欲しい

よ」

「お前が思っている程、便利な物じゃない」

「そうだろうね。でも僕は欲しいよ。君のその眼と違って今僕が使ってるコレは冥界の神を謳ってる割に便利じゃないし。まああそこのは主神筆頭にゴミ屑だから数少ないまともなのが酷かったらダメなんだろうけどさ」

「……………分かった、もうお前とは話さない」

他人事のように話す白蘭の言葉に、綱吉は話しても無駄と結論付ける。

実際のところこの男は苦手だ。天敵だ、正直二度と会いたくない。

そう自分に言い聞かせながら綱吉は距離を取って構える。

「お前が今使っているそれが例え神様であろうと、俺の眼は死を見る。生きていようが死んでいようがそこに居るのであるならば、神様だって殺してみせる」

そう、どんな相手だろうが殺すことが出来るのがこの眼だ。

この男が全ての原因であるならばここで仕留めれば良いだけの話なのだから。

「——君、何でそんなに悲しそうな顔をしているのさ」

ピクリと、白蘭の放った発言によって綱吉の身体の動きはそのまま停止する。

「僕だって前まではさ、この世界の事を退屈とか思っただけだよ。でもさ、よく考えるとね、この世界程面白い物は存在しないって答えに辿り着いたんだよ。楽しもうと思えば

なんだってできる。まあ、それでも自分の居場所がここじゃないって気持ち悪さはあるけどね」

先程までの笑みを浮かべていた青年の物とは思えない表情で語るその言葉に、綱吉は言葉を失う。

「なのに、君はとても悲しそうだよ」

「……………俺からしたら、どうしてそんなに楽し気に出来るのか分からないけどね」

白蘭の言葉に綱吉は思わず苛立ちを隠そうともせず言葉に吐いていた。

口から出た言葉はもう自分の意思で止めることも出来ず、決壊したダムのように言葉が飛び出て行く。

「この世界程悲しい物は存在しない、最終的に死と断絶で終わる物語だ。楽しかったことも、嬉しかったことも、最終的には悲しいことで終わるんだ。それなのに、どうして楽しめるんだよ!!」

この世界は今にも崩れそうで、簡単に砕けそうで、悲劇は簡単に訪れることをこの眼を手に入れたことで知った。

今までは楽しいと思えたことが本当は辛いことだと知ってしまった。

「俺の居場所はここにあるし気持ち悪いなんて欠片も思わない。でも俺はこの世界が決して楽しい物でないことを知っている。この世界程悲劇に満ちている物を俺は知らな

い。壊すことはできるのに壊れないことは無いこの世界はあまりにも悲しすぎるから

「——うん♪ やつぱり、この世界の君はとても良いよ」

綱吉の言葉を聞いた白蘭は心底愉快そうに微笑んだ。

その笑顔を見てしまった綱吉はゾツと背筋が凍り付くのを実感してしまう。

初めてだった、このような感覚を覚えてしまうのは。

「やつぱりライバルは必要だからね。じゃあね、綱吉君。今度は優勝賞品を掛けて闘おうか」

「——ッ、待て!!」

この場から去ろうとする白蘭の背に向かって綱吉は手を伸ばそうとする、が——

「あ、そう言えばさ。幽霊、放っておいて良いの?」

白蘭の放った言葉により、中断してしまったのであった。

綱吉が一瞬動きを止めてしまったのを見て白蘭は口の端を吊り上げ、燃え上がるオレンジ色の炎とともに消え去った。

「逃がしたか………いや、逃げさせてしまった。綱吉は心の中で後悔しつつも、白蘭が何故このようなことを行なったのかを考える。」

しかし、残念なことにあの男は計画的な行動と見せかけて基本的に面白ければそれでよいという利那主義的なところがあつた。

だからこれ以上は無駄と考へたところだ——あることを思い出した。「待て。あの霊は何に固執していた？」

その事を思い出した綱吉は答へに辿り着き、後悔することになる。

××

「やっぱり、黙つてみてるしかねえのかな？」

バツティングセンターからの帰路についている山本武は昨日綱吉に言われた言葉について考へ込んでいた。

確かに、綱吉が言つた通り彼に任せていた方が良いだろう。自分もそれなりに喧嘩の腕には自信がある。しかし、あの時のぶつかり合ひは喧嘩の領域を超えていた。

剣同士がぶつかり合う剣戟の応酬、それは目を惹かれるものであつた。

「……………やっぱり、俺には何にもできねえのかな？」

自分に来ることは少しでもあるのではないだろうか。

その様に考へながら歩いてた、その時だつた。

「——ッ」

「空気が変わった。世界が変わった。常識は非常識に、生は死に反転した。ガシャンガシャンと金属が擦れ合う音と共にそれは山本武の前に、恐怖を伴って現れた。」

「本、つよ——ッ!!」

出現した存在は昨日見た甲冑男そのもので、男はそのまま刀を引き抜いて武に斬りかかる。とす。

武は自らに迫り来る刃に反応することすらできず——、

——血が飛び散った。

うつす水面

血が飛び散った。血礫が飛び散った。どうしようもないほど鮮血が飛び散った。

武は目を見開き、起こった出来事に息を飲む。

自身の身体に傷は一つもついていなかった。いたって無事だった。

しかし、それは同時に自分では無い誰かが傷付いたという意味であり、武を庇った者が血を流して前のめりに倒れようとしている。

ゆっくりとスローモーションのように倒れ行く者の姿に、武は心当たりがあった。

「……………ツナ?」

先日親しくなり、警告をしてきた少年は今、肩口から脇腹にかけてまで一閃された大きい傷から血を流しながら地面に倒れ込む。

血の水たまりを作り、動かなくなつた綱吉の姿はまるで死体を連想させるかのように動かなくなっていた。

「おい、ツナ!!」

びくびくと痙攣し、口の端からも血が流れている綱吉の姿を見て武は急いで駆け寄り声を掛ける。

身体を揺らそうとして、綱吉の怪我の様子から下手に手を出さない方が良い怪我だと理解する。

否、素人目から見てもこの怪我はかなり危険だ。恐らく内臓も斬られているのではないだろうか、そう思ってしまう程大きな傷だ。

急いで病院に連れて行かなければ間に合わない、否、死ぬだろう。

「……………ぐう、あ……………い……………」

幸いなことに意識だけは失っていないが、それが幸運なことなのかと聞かれれば間違いなく違う。

むしろ気絶していた方がどれだけ良かったことだろうか。

「に、げろ……………！ 山本……………！」

苦痛に呻きながら絞り出した声音に武は「はっ」と気付き、自身に向かって刀が振り下ろされていることに気付き、迫り来る斬撃を紙一重で回避する。

綱吉が教えてくれたこと、そして武の超人的身体能力と鍛えた肉体、そして超一流の才能があったから出来た事だ。

「……………奥の、手の……………煙玉！」

そして綱吉は懐に隠し持っていた煙玉を叩きつぶし、煙幕を張る。

ボフンと間の抜けた音と共に白い煙が周囲一帯を塗りつぶし、風が吹いた時には綱吉

(この眼で出血を殺す、やってみれば意外と出来るもの、か)

初めての使用方法が上手く行ったことに安堵の息を漏らす。

最も、ここまで大怪我を負うという事が無かった為であるので状況的には最悪に近いのだが。

「……………こつちには来てないぜ」

「そつか……………」

武の言葉に綱吉は安堵の息を漏らす。

あの後、煙幕を張った綱吉は武に担がれるまま近くの建物の中に逃げ込んだのだ。

逃げ込んだ場所は幸いなことに誰も住んでいない空き家だったらしく、何故か会った酒瓶の中にスピリタスが入っていたが幸運なことだろう。

(多分、というか間違いなく白蘭のせいだろうけど)

あまりにも都合が良いすぎる立地に道具があることに綱吉の直感自身は自身の考えが正しいということを告げている。

本当に迷惑極まりない。今回の一件も全てアイツの仕業だろうに。

綱吉は苛立ちを覚えながらもこれ以上同じことを考えていてもどうしようもないと結論付け、武に問いかける。

「……………山本、一つ聞いても良いかな？」

「あ、ああ……………」

「あの幽霊、明らかに山本を狙っているみたいだけさ。恨まれるような覚えはある？」

「いや、無いと思う」

「だよ。山本だし……………」と、いかあんな刀を振り回すような幽霊と知り合いな筈が無いよね。ごめん」

恐らく恨まれるとしたら先祖辺りの誰かだろう。

もしくは父親という線もあるだろうが、恐らく逆恨み染みた妄執だ。

「どちらにせよ。逃げ場は無いよなあ。今ここで倒さなくちゃ俺たち死ぬし」

「なんか、死ぬって簡単に言うのな」

「現実として待ち構えているんなら変に取り繕っても仕方が無いよ。それなら割り切った方が早い」

とはいえ、倒す方法が全くと云っても良いほど思いつかないわけなのだが。

死を視るこの直死の魔眼はあくまでその点や線をなぞらなければ発動しない。

戦闘中にその線をなぞる必要があるのだが相手はかなりの腕前だ。そしてこの眼が視る死は状態によって変動する。ここまで重症を負えば自らの体の死が多くなることも必定だった。

少し動いただけで全身がばらばらになって死ぬ感覚が自らに迫る。それが夢幻のも

のであるということを理解してはいても恐怖が身体を蝕んでいく。

それが流血のし過ぎによる身体の震えなのかは分からないが、今になって死ぬのが怖いと思ってしまう。

「なあ、ツナ」

そんな綱吉の様子に山本はいつもどおりの軽快な口調で話しかける。

「俺に出来ることはないか？」

自らの命をかけることを簡単に宣言した。

「……………山本、簡単に命を捨てるようなことを言うなよ」

山本武は素晴らしい人間だ。きっと多くの人を笑顔にすることができんだろう。

自分みたいな死を視るしか脳の無いような人間とは違い、きつとなんだって出来るだろう。

彼には野球という夢があり、将来があり、いつか必ずたどり着ける未来がある。

——— 獣に墮ちるしか無い自分よりも遥かにマシな人間なのだ。

「いや、俺達友達だろ？」

だというのにそんな自分のことを友達だと言ってくれるのだ。

「あの時さ、殆ど喋りもしなかった俺のことを助けてくれただろ？ だから俺もツナの助けになりたいんだよ」

否、これこそがこの仮初の命の答えだ。この憎悪を晴らすまでは決して消えたりはしない——!!

甲冑姿の男は憤怒を携えたまま背後に居るであろう二人の姿を睨む為に振り向く。

「決着、つけにきたぞ」

一本の刀を二人で持つ形で、綱吉と武は甲冑姿の男の上を取る形でその姿を表した。

方や死に掛けの半死人、取るに足り得ない存在だ。とはいえ、奴が有する眼は此方を滅ぼせる唯一の手段な為、油断や慢心など出来ないのだが。

男はそう考えて二人の所まで歩を進めようとして、その前に二人が飛び降りた。

「——ッ!!」

誰がどう見ても自殺行為でしかない筈の行動に男は驚愕する。

あの高さから落ちれば間違いなく死ぬだろう。しかし、それは自身の目的が達成できなくなるということと同義。

故に男は跳躍した。重みを感じさせない軽やかさで二人に接近し、そのまま両断する。

「お前なら、そうすると思っていた」

しかし、両断したはずのそれはただの水でしかなかったのだ。

既に刀は降り抜かれており、迎撃は不可能。

「お前のその怨念は誰かに向けられたもの、誰かを殺したくてたまらないと言わんばかりのものだ。だからお前は必ず攻撃を仕掛けて来る。そしてその読みは当たった」

そして二人は剣を振るう、綱吉に誘導されるがまま山本が振るう。

振り抜かれた斬撃は男の線をなぞり、その身体を両断した。

「——ッ!!?」

与えられた死は絶対の物、最早足掻く事すら許されない。

『山本剛』に復讐する為に蘇ったというのに、身体が魂ごと崩壊を始めている。

「——ッ、ッ——」

男は必死になって手を伸ばそうとする。

しかし綱吉に睨み付けられたことにより、手が引つ込んでしまう。

元より仮初の命だった男は声すら出すこともなく、どうして蘇ったのかを語ることも

無く、完全に消滅した。

(……………それが一番良い結末だ)

落下する最中、綱吉はついそう考えてしまう。

あの男が何故山本に固執するのか、その理由について何となく察しがつくからだ。

だがそれは所詮過去の話しだ。今更掘り返しても誰も幸せにならない。

例え後味が悪くても真実は知らないままにしておいた方が良いのだ。

「で、この後どうしよう」

綱吉はついそう呟いてしまう。

武の発案に乗ったわけなのだがこの後どうするかを考えていなかった。

あの男を斬った際に勢いは殺せたがこのままだと怪我を負うだろう。

しかし、どう足掻いても良い案が思い浮かぶはずもなく、二人は二秒後に地面と激突するのであった。

新たな問題

「——ま、その後俺は山本を庇って地面に激突。全治二ヶ月の大怪我を負ったんだよ。本当、あの時は死ぬかと思ったよ」

「よく生きてたよな。そういやツナ。あの時の怪我、半月もしないで治ったよな」

「こっから見えても鍛えてますから」

そう言つて二人は「H A H A H A」とアメリカ人のように陽気に笑う。

全くと言つても良い程笑えない所詮ブラックジョークのような内容だったが全くと言つても良い程笑える内容では無かった。

綱吉の方は本当に笑っているようにも見えたが山本の方は全く笑っていなかった。どちらかと言えば苦虫を百匹くらい噛み潰した顔をしている。

「でも本当にやめてくれよ？ あの後も何回か怪我してるんだからさ。オカルトハントアの仕事をしているからって見ているこっちの肝が冷えるぜ本当に」

「いや、本当にごめんって。俺も怪我したいと思つていないんだよ。でもなぜか厄介事が向こうから関わって来るんだよ。いや、本当に」

武との一件以降からも何度か通常では考えられない事件に遭遇した。

そしてその全てにあの白蘭の影があることも理解していた。と、ういかあからさまにわざとばれるように痕跡を残している辺りは流石だと言うべきだろう。

その無駄な努力をもうちょっと別の方向に傾けたら良いのに。

「じ、十代目。今の話って本当なんですか？」

「うん。色々と端折っているけど大体本当。あれ、俺の人生って基本怪我ばかり？」

隼人の言葉に綱吉は同意しつつ己の人生を振り返ってしまう。

とは言え、話した内容の中に白蘭のことは含まれていないが。流石にあの男の件を話すとりボーンがうるさい。

そう判断しながらも自分の人生が主に戦いばかりだった事実にげんなりする綱吉。

「でもまあ、山本も結構巻き込まれてるよね俺のせいで。雲雀さんも結構な頻度で巻き込まれにやってくるけど」

「良いんだって。気にするなよ。俺達親友じゃないか」

「おい野球バカ！ てめえ十代目の足引っ張ってんじやねえよな!」

「いや、むしろ俺の方が助けてもらってるからね獄寺君。山本って剣の才能凄いあるし」

「あははは。そんな事無いぜ。俺の方もツナには色々世話になってからな」

笑い合いながら三人は夕暮れの中、帰路につく。

このまま何事もなく毎日を過ごせば良いのに、そう思わずにはいられない綱吉で

あった。

だが彼はまだ知らなかった。

この後渡日してくる牛柄の服を着た幼子が及ぼす一波乱のせいで休日が台無しにされることを。

沢田綱吉——ボンゴレ門外顧問C E D E Fのリーダー『沢田家光』の実子。

性格は危うい所があるものの極めて温厚、人の上に立つ素養こそ持っているがマフィアとしては不適合である。変わったところもあるが平凡な生活を送っていた人間である。

しかし平凡な所は同時に異常な部分でもある。

「……………いや、奴の場合は普通に平凡な人間よりも異常な人間に好まれるタイプか」

一通り報告書に記していたリボーンは飲みかけのエスプレッソを口に運ぶ。

口の中に広がる苦味は赤ん坊の姿になったとしても決して嫌いになれない好みの味だ。

そういう意味では風が少しだけ不憫だと思ったがその事を頭の隅に追いやり再び書類仕事に戻る。

「戦闘能力も高く数年前までイタリアで同盟ファミリーのエヴォカトーレで過ごし、異

能の修行にあけてくれている。なお、そこでファミリー次期ボス補佐候補を落としていく、と」

何気になんてことをやらかしてるんだらうか、下手したら外交問題だぞ。

思わず口に出してしまいそうになるが何とか抑え込む。実際悪くない話だったのだらう。

マフィアの政略結婚としては決して悪くはない相手だ。特にエヴォカトーレファミリーは特異な異能を有しているマフィアだ。流石に構成員全員がその異能を使えるわけではないが、エヴォカトーレファミリーの次期ボスと次期ボス補佐は二人とも使うことができる。それはすなわち次期ボス補佐は間違いなく血縁関係があるものと考えても良さそうだ。

恐らくは愛人、妾、第二夫人の子。次期ボスの腹違いの兄妹といったところだろう。そう考えながらマフィア専用のネット回線、またの名をマフィアネットで調べ、リボーンは自分の推測が当たっていたことを知る。

「ある意味では獄寺と似ているな」

違うことといえば獄寺隼人が婚姻関係を結んでいない愛人との子であるのに対し、エヴォカトーレファミリーの次期ボス補佐は第二夫人の子であることだろう。

マフィア界では正妻との子以外はマフィア界では許されていない。最も獄寺隼人の

場合は母親の方にも問題があり、結婚することができなかったのだが。

「本当に政略結婚としては理想的な相手だな。ダメツナがボスにならないければの話だが」

そう、正に理想的な話しなのだ。

ボンゴレファミリーのボスの血縁関係者が他のファミリーの重鎮と婚約関係を結ぶことはとても重要な意味を持つのだ。

最も、本来ならば綱吉がマフィア関係者と婚約関係を結ぶことは無かったのだが。

リボーンの友人で綱吉の実父である沢田家光も本来ならば息子がマフィア界に関わることを好ましく思っていなかった。

そもそもとして他のボス候補が死ななければ綱吉はマフィア界に関わることなく一生を終わらせたのだろう。

だがそうはいかなかった。全ては綱吉が直死の魔眼等という異能を手に入れてしまった事から始まったのだ。

誰も聞いたことも見たこともない前代未聞の能力。ケルト神話の魔神パロールを連想させる力。アルコバレーノに掛けられた呪いすら一部とはいえ解除することができ、個人が有するには重すぎる力だ。

そしてその異能の存在を知っていた今代大空のアルコバレーノのエリアが、息子が死

にかけていると聞いて急遽帰国した家光よりも先に接触したことが問題だった。

「俺からしたら、あいつは大恩人なんだけどな」

藁にも縋る気持ちだったのだろう。

子を持たないリボンでは気持ちは分からないがそれでも同じアルコバレーノである以上気持ちは理解できる。しかしそれは限りなく悪手に近かったのだ。

結果的にはアリアの望み通り、ユニの呪いは殆ど解けた。解けてしまったのだ。

変質しているとはいえアルコバレーノの呪いを解けるということはその気になれば自分達も同じように解除することが可能だという事。

それが原因で一部のアルコバレーノが暴走を引き起こし、綱吉の身柄を狙っているのだ。

問題児は当然として呪いを解くことに執着している者も、そして犬猿の仲に居るあの元軍人も綱吉の身柄を狙っている。ボンゴレファミリーが情報を規制しなければもっと広まっていただろう。

「家光からしたら複雑な心境だろうな」

息子を守るために己が守って来たのに、運命は嘲笑うかの如く残酷な運命を背負わせたものだ。

そう思わずにはいられなかった。友人が頭を抱えて悲痛そうな顔をしている姿等。

「何も出来なかった、その気持ちはなんとなく分かるけどな」

自分の生徒となった少年が手に入れた力は明らかに異質だ。

本来彼の血に宿ったものとは異なる、偶然手に入れただけの力だ。

だから父親である彼は制御する方法を教えることができなかった。

その結果、家光は同盟ファミリーかつ異端な力を使うエヴォカトーレファミリーに託したのである。

それでもマファイア等の裏社会のことを知らずにいたのは幸福なことだろう。

とは言え、ボスの娘を口説き落とすとは思っていなかったが。

最も、綱吉がボンゴレファミリーの次期十代目になってしまった時点で婚姻関係を結ぶことは出来なくなったのだが。

いくら同盟ファミリーであっても組織のナンバー2となる人間と別組織の人間を婚姻させるわけにはいかないのだ。これで綱吉以外の候補者たちがまだ生きていてその中の誰かが十代目になるのだったら話は別なのだが。

もしくはエヴォカトーレファミリーが何らかの理由でボンゴレファミリーに敵意を向けるような行動をした場合だろう。

「ま、そんなことは起こらないだろうな。それよりも今はユニの方が問題か」
頭の中をリセットして別の事を考え始める。

リボンとしては孫のように可愛がっているユニをあんな軟弱な男に渡すわけには
いかない。

確かに恩人ではあるのだろうし性格も悪いわけじゃない。ユニも先のエヴォカトー
レファミリーの次期ボス補佐とは違いまだマフィアじゃない。

婚姻関係を結ぶこと自体は悪くないのだ。問題が無いわけでは無いが。

だが今のままではダメなのだ。

何故かは分からないがリボンの勘が告げている。

——このままだと沢田綱吉は想像を絶することをやらかすと。

明確な根拠は存在しない。だけどそう思わずにはいられなかった。

あの死ぬ気モードを見た瞬間から、沢田綱吉が途轍もなく恐ろしいものだと思つてし
まったのだ。

だからこそ、家庭教師である自分が原因を見つけてなおさなくてはいけないのだ。
そう考えて書類に記載していくリボン、だが彼は気付かなかつた。

いや、知ろうとしなかつたのだろう。

何故なら、リボンが沢田綱吉から感じた悪寒と同じものをユニから感じたのだ。

しかし気のせいだとリボンは思い込むことにした。

「原初は、語り……………天と地は分かれ、我は再び——」

それが後に最悪の結果を呼び込むと知らずに。

牛小僧の齋す大波乱、その予兆

ある日の事だった。

学校も休日だった為、最近一緒に行動する機会が少なかったユニと外出していたのは。

最近は何しくて共に居る事が出来なかった分、その穴を埋める為に今日は二人きりでシヨップピングだった。

「……………ユニ、大丈夫？」

「———はい、私は大丈夫です」

「本当に大丈夫なの？」

「———はい、私は大丈夫です」

「ねえ。ちよつとこつちを見て欲しいんだけど……………」

「———はい、私は大丈夫です」

「駄目だこりゃ」

放心しているユニの様子を見て綱吉は両手を広げて宣言する。

最近ユニの調子がおかしいことは理解していた。だが、ここまで酷いとは思っていない

かった。

はつきり言つて何が起きているのか分からない、気が付いたらこうなつていたのだ。

「一体何が起きているんだか……………」

頭を掻きながらユニの身に起きた異常に困惑する。

唯一分かることと言えばユニの全身に赤い文様が刻まれていることだろう。

一見してタトウーのようなものかと思つたものの、ユニがそんなものを彫るとは思えなかつた。と、いうかそんなのいつ彫ると言うのだろうか。

だがこれが原因であることは分かつた為、リボーンに伝えた結果——、

「何だそれは？ 俺には見えねえぞ」

とのことだつた。

つまり、綱吉が有する直死の魔眼にしか見えない代物だつたということだ。

だが見えるというだけ、綱吉はこの線に干渉できなかつた。

否、そもそもこれは死の線ではない。あくまで何か、強大な力の上澄みが出てきただけではないということだ。

「本当、何が起こつているんだよ……………」

妹分であるユニの身に異常が起きたのは確かなことだ。

だから兄貴分である自分が何とかしないとイケないのだ。決してユニのことを見

守っている保護者の一人から非通知で「姫に何かあったら、ぶつ殺す」と電話が来たからではない。

とは言え、方法が分からない以上どうすることも出来ない。

あの自称お姉ちゃんは何か知っているのかもしれない。物凄く驚いていたし、その後浮かべた表情がとても愉悅に満ちたものだった為、教えてくれるとは思っていないが。

「やあ、綱吉君。大変そうだね」

思考の渦に囚われつつあった綱吉に、誰かが声を掛ける。

その声を聞いた瞬間、綱吉は頭をハンマーで殴られた衝撃を味わう。

知っている、忘れられない、この声を忘れることなどありえない。

綱吉は声のした方向に視線を向ける。

そこには綱吉が知っている男、白蘭がカレーパンを持って立っていた。

「白、蘭……………」

「久しぶりだね。綱吉君、本当に奇遇だね。いや、本当にね——」

「ほら、[×]食[×]べなよ。安心して、毒なんて入っていないからさ」

立ったまま話すのもなんだから、そう言われた為に三人揃って公園のベンチに座る。

ベンチに座ったところで綱吉は差し出されたアンパンを見つめる。すると白蘭がそう呟いた。

「ふぎけんな。確かに毒は入っていないけど、怪しすぎだろ」

「流石は直死の魔眼といったところだね。でも残念だけど今日は僕も偶然ここに居るだけだからね」

白蘭はシユガートーストに齧り付きながら言う。

「どうやら嘘は言っていないらしい。綱吉も同じようにアンパンに齧り付く。」

「口いっぱいには餡子の味が広がっていく、と、というか甘すぎる何だこれは。」

「ちよつ、甘すぎ………何このアンパン」

「フッフ。それは僕の好みの味だよ。マシマロの次くらいには好きかな?」

「何がマシマロだ。マシユマロだろ」

駄目だ、会話していると頭が痛くなってくる。

正直言つて白蘭という人間は苦手だ。内心感じていた苦手意識を再度自覚する。

「やっぱり、俺はお前のこと苦手だ」

「僕はそうじゃないけどな。特に綱吉君つていじると面白そうだし」

「愉悦的な意味かよ!!」

白蘭の台詞にツツコミを入れる綱吉。

一体何を考えているのかが全く分からない。いや、それも正確ではない。どちらかというとう理解したくないの方が正しいだろう。

正に綱吉の天敵とも言える存在だ。

「ま、話はこれくらいにして、ユニちゃんだよな?」

「……………もしかして知り合いなのか?」

「いや? この世界では初めましてになるかな」

胡散臭い笑みを浮かべながら訳の分からないことを言う。

この世界? どういうことだ? そう聞こうとする前に白蘭は目を細める。

その表情は先程までの愉快的な物を見る眼とは違い、何かを観察するような視線だった。

「うーん、二人目は綱吉君かと思ったけど……………ユニちゃんの方が先だったか」

「白蘭、お前……………ユニがずっと上の空な理由分かるのか?」

綱吉の問いに白蘭は無言のまま頷く。

「うん。まあ、これはユニちゃんだけの問題かな? 大丈夫大丈夫、暫くしたら戻るから

さ」

「……………ええ、今戻りましたよ。初めまして、白蘭」

いつの間にか取り出したマシユマ口を口に頬張りながら白蘭が説明をしていると、突

如としてユニの意識が覚醒した。

「ユニ！ 大丈夫!？」

「すみません沢田さん………少し、本当に迷惑をかけました」

ユニは頭を抱えてふらふらと綱吉の身体に寄り掛かる。

本当に参っているのか、顔色も優れていない。

「さて、ユニちゃんも元に戻ったみたいだし。僕は帰るね」

白蘭はそう言つてベンチから立ち上がり、足早に去ろうとする。

色々と聞きたいことが山程あるがどうせ答えてくれないというのは分かっている。

何故ユニと初対面の筈なのに知り合いのように接しているのか、そもそも何者である時は何故あんなことをしたのか等。

だがそれを答えるような相手じゃないこともわかってるし、綱吉も何となく分かっている。

恐らく白蘭にはユニと似たような異能を持っているということ。

「あ、そうだユニちゃんに綱吉君。この後色々大変みたいだけど頑張つてね。ユニちゃんは羞恥的に、綱吉君は未来的に絶望しそうだから」

「おい！ それはどういう」

言葉を最後まで言う前に白蘭の姿は消え去った。

最初から最後まで意味深なことを言うような奴だった。

逃げられたことに腹を立てながらも自意識が戻ってきたユニに安堵し、その頭を優しく撫でる。

ユニは嬉しかったのか、顔を綻ばせる。

「すみませんツナさん。ずっと迷惑をかけて……………」

「気にしなくていいって。俺も好きでやってることだし」

「……………あの、沢田さん。一つだけお願いしても良いですか？」

「何？」

姿勢が辛かったのか、ユニは頭部を綱吉の膝の上に乗せながら続ける。

「もし、私が悪い人になったら……………殺してくれますか？」

「え、やだ」

「即答ですか……………」

ユニの口から出てきた言葉を一蹴して軽く拳骨を加える。

「いたっ」と僅かな痛み顔に顔を顰め、ユニは拳骨をされた個所を手で押さえる。

「ユニはそんな悪い人にならないだろ。だからそんな事言うなよ……………」

「うー、痛いです。でも、もしかしたらそんな人になっちゃうかもかもしれません。私だつて子どもです。大人になったらどんな人になっているか、分かりません」

「それを言うなら俺だって同じだよ。ううん、誰だって悪に堕ちる時はある」
直死の魔眼を覚醒した時もそうだった。

あの場にアリアが居なかつたら、きつと自分は悪に堕ちていたかもしれない。
ついそう思ってしまうもののユニにはその表情を見せないように気を配る。

「だからそんなことを言うなよ。ユニのことを大切に思ってる人は沢山居るんだから
さ」

「でも、私はそんな風に思ってもらえるような人じゃ……………」

「ならもしユニが悪い子になっちゃったらさ、俺が責任を取って止めてやるから」
「それは、どういう……………」

「勝手に悪いことできないよう、ずっと側に居てやるってことだよ」

綱吉がそう告げるとユニの顔色が僅かに紅潮する。

「うう、沢田さんは卑怯です」

「はいはい、卑怯で良いから。それじゃ、帰ろっか」

そう言つて綱吉は立ち上がつてユニを背負うとこの場を後にする。

しかし、彼らはこの時まで知らなかつた。

この後綱吉達の予想がつかない事が一人の幼児の手で引き起こされることを。

それもかなり頭の悪い方向で。

十年後よりこんにちは、ようこそ惨劇

それは綱吉とユニが白蘭と言う名の不審者に会って家に帰って来た後の事だった。

「ちね！ リボン！！」

牛柄の服を着たアフロ頭の幼児が綱吉の部屋の窓から侵入し、髪の毛の中に隠していたミサイルランチャーを取り出してリボンの方に向ける。

明らかにアフロの大きさよりも大きいだろう、よくそんな物騒な代物をそんなところに隠しておけたな、てか何で俺の部屋にそんな物を向けているんだよ。

最近のとんでも展開に加え、白蘭という謎の頭お花畑に出会って頭の中が麻痺し掛かっていた綱吉が心の中でそう思った。

別にこの謎のニヒルな赤ん坊を狙うのは構わないが何で自分の部屋まで一緒に攻撃を仕掛けるのか。

（あ、そつか。部屋ごと吹き飛ばした方が逃げ場も無いからか）

「普段勉強の方には全く向いていない頭脳が刹那の間に回答を出す。

だからといってこの状況を覆す方法があるか無いかで言えば後者になるのだが。

「お前が死ね」

だがリボーンは最初から知っていたかの如く手に持った拳銃の引き金を引いた。

銃口から放たれた弾丸は吸い込まれるようにアフロ頭の幼児が持っていたミサイルランチャーに直撃した。

するとミサイルランチャーに亀裂が入り、亀裂から光が走る。

「ぐびゃつ!？」

アフロ頭の幼児の断末魔の叫びは爆発音に巻き込まれて掻き消えた。

一連の行いを見て綱吉はリボーンが本当に容赦の無い奴だと言うことを改めて思い知る。

「な、なありボーン。今のはいくらなんでもやりすぎなんじゃ……………」

この場にユニが居なくて本当に良かった、心の中で安堵しつつリボーンに話しかける。

「なにがだ？」

「いや、だから今の……………」

「なにがだ？」

「いや、だから……………」

「なにがだ？」

「そうやって分からない振りしてたら誤魔化されると思ったら大間違いだぞ」

無理矢理にでもさっきのことを闇に葬ろうとするリボーンの状態に怒りを露わにする。

するとリボーンは「仕方ねえな」と呟いて綱吉の方に視線を向ける。

「大丈夫だぞ。さっきの奴は死んでねえ」

その言葉を聞いた後、家の外から幼子の泣き叫ぶ声が響いた。

念の為、窓の外から下を眺める。子どもは泣いているものの特にこれといった怪我は無い。どうやら本当に死んでいなかったらしい、その上無傷だ。

「なありボーン。あの子、お前の命を狙ってきたけど知り合いですか？」

「さあな。俺は格下は相手にしねえんだ」

中々に格好いいことを言ったりリボーンを無視しつつ綱吉は幼子の方に視線を向ける。

どうやら大丈夫そうだ。しかしこのまま外で放っておくわけにもいかない。

そう判断した綱吉は外に出て行こうとし、その前に扉が開いた。

「つ、ツナさん！ 今の爆発音は一体——！」

部屋の扉を開けたのはユニだった。

しかしついさっきまでシャワーでも浴びていたのかバスタオルを身体に巻くだけという、はつきり言って全裸よりはマシとしか言いようが無い格好だった。

「ユニ。ちゃんと着替えてから来てね」

部屋に入つて来たユニを宥めつつ、綱吉は部屋の外に出た。

十十

本人から事情を聞いた結果、ランボと名乗った幼子はボヴィーノファミリーと呼ばれるイタリアの中小マフィアに属することがわかった。

ランボがリボーンの命を狙っていたのは、最強の殺し屋というビッグネームがあったからだという。要するに名を上げたかっただろう。

確かに、こんなナリでも実力は高い。正直綱吉が何人いても勝ち目は殆ど無いだろう。

もし倒すことができれば名を上げることだって夢じゃない。もし、倒すことができればの話のだが。

「なんていうか、こんな子どもがマフィアなんて思えないよ」

「オレも赤ん坊だぞ？」

「こんな赤ん坊がデフォルトだったら世界は今頃焦土になっているよ」

リボーンの戯言を聞き流しながら綱吉はランボをあやす。

やんちゃ坊主と言った感じで意外と可愛い、まるで手のかかる弟を持ったみたいだ。

「うう、わ、私だけのツナさんが……………ツナお兄ちゃんが……………」

部屋の隅っこの方でユニが不貞腐れた様子で此方を見つめているが、後で埋め合わせ

しておくことにしよう。

「ツナク、ランボさんお腹減ったぞー？」

「葡萄味の飴しか持っていないんだけど舐める？」

「なめるー!!」

無邪気な様子を見せるランボの姿に思わず頬が緩む。

まるで昔のユニと戯れているようだ。本当に、何もかもが懐かしい。

「ツナツナー、良い物見せてやるんだもんね」

飴玉を上げたことで気に入られたのかランボは上機嫌にアフロの中に手を突っ込む。

そして明らかにアフロの大きさよりも遥かに大きいバズーカが出てきた。

「じゃじゃーん！ これがおれっちのファミリーに伝わるー0年バズーカなんだもんね
!!」

ランボは取り出したバズーカを高らかに掲げて見せびらかす。

一見してみれば普通のバズーカにしか見えない、しかし綱吉はそれが何なのかを視て
しまった。

「いぎっ!？」

詳しく見ようとして眼を凝らした結果、飛び込んできた凄まじい情報量に綱吉はダ
メージを負う。

両の瞳から滂沱の如く血の涙が流れ落ちていく。

何だ、あれは一体何なんだ？　とてもじゃないが死の線を視ることなんて出来ない。

例え視ることが出来たとしても間違ひなく脳がパンクする。そもそもこんな物が存在して本当に良いのか？

「ぐびゃっ!!？」

「だ、大丈夫ですか!!?　ツナお兄ちゃん!!」

両目を抑えて苦痛に呻く綱吉にユニは心配の声を掛ける。

ここ最近呼んでいたツナさんではなく、ツナお兄ちゃんと昔の呼び方になっている辺り、彼女も今回の事は予想外のようなのだった。

「お前はいつつも血ばっかり出してんな」

「……………俺だって、出したくて出してるわけじゃないよ。ユニ、大丈夫……………落ち着いたから」

ダバダバと血の涙を流しながら綱吉は心配するユニを制し、呆れた様子のリポーンに返事を返す。

「しかし、それが辺境のボヴィーノが持っているときれる十年バズーカか」

「リポーン……………10年バズーカって何？」

「簡単に言っちゃえばあのバズーカに撃たれた奴は五分間だけ10年後の未来の自分と

現在の自分を入れ替えちまう兵器だ。おとぎ話レベルの架空の兵器みてえなもんだとされていたが……お前を見てたらそれは本当だって分かったな」

「人を使つて真贋を判断するなよ」

しかし、それならば納得できると綱吉は一人納得する。

そんな魔法のような道具、何の覚悟もせずに視たらダメージを追うのは当然の結末だ。

例え分かっていたとしてもそうなっていたらだろうか。

「にしてもこの世にそんな摩訶不思議な兵器があるなんて……いや、兵器なのかこれ？」

「ツナー、だいじょうぶ？」

「大丈夫だよ。こう見えても結構頑丈だから」

流血の方も止まっている為、心配そうに顔を覗くランボに元気な姿を見せる。実際のところスプラッタに見えるのは外見だけで、内面は既に大丈夫だ。

驚いたのは最初だけだし、10年バズーカとやらも集中して見なければ問題は無いだろう。

「おいりポーン！ ランボさんとしようぶするんだもんね!!」

そう考えているとランボがまたりポーンに絡み始めた。

やめれば良いというのに、ついそう思ってしまう綱吉だったがリボーンは興味無きげに呟く。

「俺は格下は相手にしねーんだ」

「ぐぴやつ!?!」

容赦無い台詞にランボは涙を浮かべる。

本当に相手にしないのかと呆れ顔を浮かべていると、ランボは泣き始めた。

最も、先程の自爆に加えてリボーンのこの態度では仕方がない話だが。

「が、が……ま……ん……うわあああん!!」

泣き出したランボは10年バズーカの銃口を自身に向けた。

ランボの背後に居るユニにも、銃口は向かれていた。

「えっ、ちょよ!?!」

止める間もなく10年バズーカの引き金は引かれ、部屋一面に煙が広がった。

未来からの単独顕現

バズーカから放たれた弾は煙を巻き上げ、二人を包み込む。

これにはさしものリボンも舌打ちをし、綱吉はやらかしたと言わんばかりに顔を歪める。

止めれば良かった、と後から後悔するが今の綱吉はかなり消耗していた状態だった。

10年バズーカを見て出た出血は収まったが、やつぱりというか疲労までは回復していない。

むしろ貧血気味である。

誰から見ても責められない、というか突然過ぎた出来事だった。

煙が時間経過と共に晴れていく。

それはわずか数秒にも満たない時間で、ランボがさつきまで居た場所に一人の少年が座っていた。

線の細いイタリア男と言った感じで、中々にイケメンだ。

10年バズーカは撃たれた対象を、十年後の対象と入れ替えるという特殊な武器だ。

そしてそれは限りなく本当に近い真実であり、この優男が十年後のランボだと言うこ

とになる。

しかし、だが、いや、されど、綱吉にはこの少年があのアホ面を晒していたランボだとは思えなかった。

「やれやれ……………久々に呼び出されたかと思つたら、ここはもしかや10年前のボンゴレの部屋では？」

優男は溜め息をつきつつも周囲を見渡し、綱吉を見つけると口を開く。

しかし先程とは違い、何処か嬉しそうな雰囲気醸し出していた。

「この時代では初めまして、になるんですかね？ それともお久しぶりです、なのか」

「え、えつと……………あなたは……………？」

「俺です。さつきまでここに居たランボです」

時の流れというものは本当に偉大である。

まさかあの知性の欠片も無いような幼子が、こんなイケメンになるのだから。

「今失礼なことを考えてませんでしたか？」

「考えてません」

どうやら本当に知性的になっているらしい。

やはり時の流れというものは偉大だ。

改めて実感する綱吉は自分に変な視線を向けてくる10年後のランボから目を逸ら

す。

「そ、そういうランボはさつき変なこと言っただけ？ 確か10年前のボンゴレの部屋だとか何とか」

「ええ、言っただけだよ？ だって10年後の貴方は立派なボンゴレのボスやっただけだし」

「えっ、何？ 聞こえない？」

「いや、だから10年後の貴方はボンゴレのボスに」

「えっ、何？ 聞こえない？」

「いや、だから」

「えっ、何？ 聞こえない？」

「……………そうやって目の前の現実から目を逸らしていても良いことはありませんよ？」

ランボの生暖かい視線が綱吉の心を傷付ける。

しかし、本当に十年後の自分は何をトチ狂ってマフィアのボスになってしまったというのだろうか。

衝撃の事実が綱吉の顔は真っ青になる。

このリボンと名乗る変な赤ん坊が居る限りマフィアのボスになるしか未来は無い

のだろうか。

「なんだおめえ、マファイアのボスになりたくないのか？ マファイアはモテモテだぞ？」

「誰が好き好んでマファイアになりたい奴が居るんだよ。いや、居るには居るだろうけど俺がそんな奴に見えるのかよお前は」

リボーンの言葉に辟易を隠さずにそう言い放つ。

もし、あの時自分にこの赤ん坊もどきを如何にかできる実力があつたならば段ボールの中に詰め込んで宅急便でイタリアまで送り返しただろう。

あるいは、この眼を持ってさえいなかったならばリボーンの言うことを信じずに接していただろう。

そうなつた時は間違いなく彼の暴力の嵐に巻き込まれていただろうか。

心の中でそう考えているとランボが唐突に、静かに笑い出す。

「若きボンゴレ、やはり時間が過ぎても………いえ、この場合は時が遡つて若い頃であつたとしても、貴方は変わりませんね」

ランボは何処か懐かしいような、嬉しいような口調で呟く。

「背の高さも外見も昔から変わらないのは当然として、口調とか些細な違いはあれど中身も変わっていません。昔の優しい兄ちゃんのままです」

綱吉にとってはあまり嬉しくない事実を言っていた。

「ちよつと待って、外見が変わっていないってどういうことなの？」

「え、いや、そのままの通りですよ。まあ、髪の毛が長かったり角が生えていたりの違いもありましたけど」

「そ、それじゃあ俺の背は伸びないの……………？」

「ええ。背は伸びてませんね。でも十年後のボンゴレは『この外見も結構便利なんですよ？ 中学生料金で利用できますからね』って言って結構気に入っていた様子ですが」

更なる事実がランボの口から語られ、綱吉の心は砕け散った。

元々小柄な体格をしているのは自覚していた。イタリアに居た時の親友であるアルビートは自分よりも背が高い。それに関しては仕方がないと思いつつも出来た。外国人であるアルビートは日本人に比べ体格が良いのだから。

だが日本に戻り中学生になったというのに綱吉の背丈はあまり高い方では無かった。

親友の山本武はアルビートと同じ位背が高いし、獄寺隼人もその二人に比べれば背が低いもののもので中学生男子の平均ではあった。

だが綱吉にも希望はあったのだ。父親である沢田家光の体格を知っているから、あの父親の血を受け継いでいる自分にも希望の芽はあるのだと。

しかし、時の流れは残酷だった。

「いつまでもめめそめそしてんじゃねえぞダメツナが」

「いぐつ!？」

あまりにも無情なこの世界の現実と未来に絶望していた綱吉の頭蓋にリボーンの足が振り下ろされる。

後頭部が土踏まずにフィットする嫌な感覚が襲う。

「それよりもユニは何処に行ったんだ?」

「あ、そ、そうだよつ! ユニは、ユニは何処に!？」

リボーンの言葉に綱吉はランボが放った10年バズーカに巻き込まれた妹分の事を思い出す。

10年後のランボから語られた衝撃の事実について気が逸れてしまった。

恐らく無事だとは思いますが、それでも心配だ。

「——えつ、ユニさん来てるんですか?」

「ああそうだよ! この時代のランボの10年バズーカに巻き込まれて」

そこまで言うのと10年後のランボが居た場所が急に煙に包まれる。

どうやらいつの間にか5分経過していたらしい。

つまり一緒に巻き込まれたユニも戻ってきている筈だ。

「一体何処に——」

周囲を見渡してユニのことを探そうとした瞬間だった。

世界そのものが凍り付いたのは――。

「全く、私の事を今まで放置して、本当に罪人だ」

、綱吉の身体は背後から何者かに優しく抱かれる。

抱き締めたのは恐らく女性で、自分と左程体格は変わらない。むしろ自分の方が少し背が高いくらいだ。

声の雰囲気から察するに声の主は恐らくユニだ、それも10年後の。

しかし、10年バズーカは5分間しか入れ替えることが出来ないのだ。

じゃあどうして10年後のユニは今もここに居るのだろうか。

「えっと、ユニ………なんだよね？」

抱き締めている腕を優しく避けてから後ろを向く。

そこに居たのは成長したユニだった。

ユニの年齢を考えるとまだ十代後半と言ったところだが、その年齢の平均に比べ小柄だ。

胸もどちらかと言うと慎ましい、いや、貧しい。

「はっはっは。今失礼なことを考えてなかったか？」

「滅相もございません」

どうやら自分が考えていたことはばれていたらしく、ユニは綱吉の両肩を強く握りし

める。

肩に走る痛みを甘んじて受け入れつつ、綱吉は改めて10年後のユニの姿を眺める。纏っている装いはホットパンツにへそ出しと若干露出が激しい格好をしており、その上にマントを羽織っている。

しかし、それ以上に目立つ物があつた。

ユニの頭には角が二本、顛顛の辺りから生えていた。

何かの装飾品かと思つたがそういうものではなく、あくまで自然に生えてきたものと理解する。

人間に角が生えるなんてことは通常在り得ない。身体の異常や骨等が變形して角が生えることはあれど、ユニに生えている角は自然的なものだつた。

だがそれ以上に気になることが一つ、今のユニには死の点はおろか、死の線すらも写つていなかった。

「……………ユニ、一つ聞くよ?」

「ほお。我が夫はあまりにも性急すぎるな。まあ、そこが愛おしいのだが」

「その口調については突つ込まないからね。てか根っからの御姫様体質なんだからそんな怪しい雰囲気を出しても可愛さでかき消されてるよ」

「……………折角、10年前に呼ばれたから私に対する印象を変えてやろうつて思つて

たのに」

10年後のユニは綱吉の言葉にさめぎめと泣き始める。

しかしだからと言って質問を止めるわけにもいかないだろう。

決して見たいわけじゃないが、彼女の死が見えない原因を探らないといけない。

もしかしたらこの眼を封じる何かがあるのかもしれない。

そう考えた綱吉はユニからその方法を聞こうとして、いつの間にか自分の唇に指が置かれていくことに気が付いた。

——速い、全く見えなかった。

「残念ですがツナの望みを叶えるものは10年後の未来にはありません。私の死が見えないのは私が既に■■■■になっているからなんです」

「……………」

「私が10年バズーカの効果時間よりも長く居られるのも、私が獣になったからに過ぎません。いいえ、多分そうなのでしょうね」

だから綱吉の思ったことはならない。

ユニが言った言葉は暗にそう告げているも同然だった。

綱吉としてもあまり期待はしていなかったが、それでも何処か気が抜けてしまう。

「それじゃあ、私は元の時代に戻ります。次、会う時はいつになるでしょうか？」

まあ、その時の私が今の私になるかはわかりませんが」

10年後のユニが告げた瞬間、身体が煙に包まれて元のユニに戻る。

それと同時に凍り付いていた世界が解凍し、世界の時が再び刻み始める。

「……………どうやら無事だったみたいだな」

茫然としているユニを見てリポーンは安心したような顔をする。

先程の時間はリポーンには認識できなかったらしく、特に何の反応も示していなかった。

「どうやら自分しか認識できないものだったらしい。」

「つと、ユニ。大丈夫？ 何か、体調とか崩してない？」

啞然とした表情をしているユニに声を掛ける。

するとユニは口を開き、一言呟いた。

「——ツナお兄ちゃんって、十年経っても変わってないんですね」

時の流れと言うものはやっぱり残酷なものである。

毒サソリと春と委員長と極限

並盛町にあるとあるおでん屋、そこは昔ながらの伝統がある屋台でやっている店で、その店主は昔からこの並盛町でおでん屋を営んでいた。

夜になると仕事終わりの中年サラリーマン達が店にやってきて酔っぱらっていく。

その際に出る愚痴を聞くのが店主にとって毎日の日課だった。

しかし、何事も例外と言うものはあるようで本日店にやって来た客人は中年のサラリーマンでは無く、二人の少女だった。

「ああ、リボン………愛しい人」

「本当に可愛いですよ、キュートなリボンちゃん」

一人の少女は高校生ぐらいの女性と言う表現の方が適切な外国人だった。勿論未成年には見えない。

もう一人の少女は中学生ぐらいの少女だった。しかもよく見たら着ているのは偏差値の高い女子中学校、緑中の制服だ。

本来ならば未成年であるというのにも関わらず彼女達はおでんをつまみにしながら日本酒を飲んでいた。既に一升瓶を三本も開けている。

しかし店主は冷静だった。よく考えればこの町は並盛と言いなながらも住んでる住人は全然普通じゃない。

つい先日だって並盛中学の旧い学ランを羽織った少年や銀髪の少年がおでんを食べに来ていた。

だからおかしくないのだろう。よくあることだ。

店主は見て見ぬふりをすることにした。それが夜の町で暮らす賢い者の生き方である。

「でもビアンキさんもリボンちゃんと同じだったんですね。ハル、驚いちやいましたよ」

「ええ。彼とはイタリアに居た頃からの付き合いよ。彼との日々はとつてもスリリングだったわ」

二人は日本酒を飲みながら話を酌み交わす。

結構度数の高い酒だったというのにここまで飲めるとは、出来る人たちだ。感心する店主の心を知らず、二人はかばかばと飲み干していく。

すっかり酔っぱらってる二人の会話はどんどん弾んでいく。

何やらツナと呼ばれている少年に対し互いに意見を交わしているが、さっきのリボンという人物に比べ何やら物騒な言葉をつらつらと連ねているが店主はあくまで店主

だ。

真面目に仕事をこなして四十年も生きてきたのだ、守秘義務と言う物がある以上どうすることもできない。

「リポーンは殺し屋だったのよ。それも超凄腕の」

「またまた、ビアンキさんって嘘が上手——はひっ？ な、涙………もしかして本当なんですか？」

何やら物騒な言葉が聞こえたが店主は無視していた。

それにしても今日は月が綺麗だ。

「それにね、リポーンが今家庭教師をしている沢田綱吉って奴はね。とんでもないクソガキなのよ」

「はひっ!? く、クソガキって………一体なにかあつたんですか?」

「実はね——」

ビアンキから語られた言葉を聞いていた少女はどんどん顔を真っ青にしていく。

そして同じように聞いていた店主はこう思った。

——明日から別の場所で店やるか。

××

あの日以降、ユニとの間に少し距離が出来た。

と、いうのもこれからどんな風に接して良いのかが分からないのだ。

綱吉の方は十年後以降もあんなに好意を示してくるユニの姿に、ユニは恐らく十年後の自分と出会ったことにより互いに混乱している状態なのだ。

——十年後のユニ、綺麗になつてたな。

ついそんな邪なことを考えてしまい、綱吉は顔を横に振る。

何を考えているんだ自分は、あれは十年後のユニだぞ。妹分ではないユニだ。

ついちよつとした悪戯はする時こそあれど、あれだつて加減したりしている。妹分だからこそ大切に思つてるし、ちよつと過保護すぎるのではないかと思う時だつてある。

だからこそこんな邪な感情を持つてはいけないのだ。

「最近お前変だな」

「ちよつと黙つてよりボーン……………」

「お前の考えていることは分かるぞ。お前しか見ていなかったが十年後のユニのことを考えていたんだろう」

読唇術でも使つたのか、リボーンは綱吉の考えを簡単に見抜く。

「まあ、ユニはルーチェの孫だからな。将来は美人になるだろうから、その気持ちは分かるぞ」

「お前何歳だよ……………」

「秘密だ。それにしてもツナ、お前すれているように見えて意外と純情だな」
「うるさいー！」

リボーンに指摘された為、顔を背ける。

顔を真っ赤にして否定している時点で凶星だと言っているも同然だが、否定したかった。

「俺から言えることは一つ、ユニを泣かせたらお前を地の果てまで追いつめてから殺す」
「そんな無茶言うなよ！ 泣かせないようにはしてるけどさ!! でも……………ずっと泣かせないようになんてできるわけがないじゃないか」

昔、ユニを守った時に一度大怪我を負ったことがある。

それが原因でユニは物凄く大泣きした。

「俺は弱い……………俺なんかよりも強い奴はいくらでも居る。ユニを狙う奴等から守れない」

「だつたらずつと一緒に居て守ってやれば良いじゃねえか」

「こんな化物と一緒に居てユニが幸せになれるなんて思えないよ」

こんな全てを壊してしまう目を持っている自分が彼女を幸せにしてやれることが出来るだろうか。

いや、そもそも自分が壊してしまわないだろうか。

そう思うたびに心が苦しくなっていく。

「……………安心しろ。ダメツナ、お前は化物じゃねえ。人間だ」

「嘘でも、いや、嘘じゃないか。そう言ってくれるだけでもうれしいよ」

「俺が言えた義理じゃねえけどな。お前はもう少し他人を頼つても良いと思うぞ。お前はボンゴレ十代目になる男なんだからな」

「絶対にならないからな」

「マフィアになればモテモテだぞ？」

「お前今ユニを泣かしたら殺すって言わなかったっけ？」

互いにそんな会話をしていると隼人と武の二人が駆け寄つて来る。

「すみません十代目!! こっちには見当たらなかったです!」

「ああ、こつちもだ。タイムカプセルつてこっちには無いんじゃないのか？」

「そつか、多分そつちには無いとは思つてたけど、やっぱりか」

二人の報告を聞いて綱吉は頭を抱える。

今現在、自分達は教師の根津銅八郎に難癖をつけられてタイムカプセルを探すことになったのだ。

とは言え、何となくだが綱吉にはいくら探してもタイムカプセルが見つからないということが分かっていた。

そもそもとして埋めていないのか、いや、埋めては居るのだろう。ただしそれは目当ての物じやないのと言うまでもない。

「……………やっぱり、やるしか無いか」

最初から準備はしていたとはいえ、やっぱりきついものがある。

両目から血涙が流れ、眼で見て取れる死の線の数が増えていき、眼から発する痛みが大きくなっていく。

その激痛を堪えて、綱吉はある一点を見つめる。

「……………あそこだ」

直死を使い過ぎれば間違はなく気絶し、自分は動けなくなるだろう。

その事が分かっていた綱吉は駆け出して点が見えた場所に向かう。

崩れそうになる身体を持ち堪えながら点まで辿り着くと、綱吉は拳を振り下ろした。

その瞬間、他者の視点では綱吉が殴った箇所を中心にしてグラウンドに亀裂が発生し、広がっていく。当然なら綱吉の視点では大地の死の点を貫いた為、こうなったというだけのことである。

そして出来た亀裂の中に、何やら箱のようなものが存在した。

「ごめん、俺もう無理……………」

久々に直死の魔眼を酷使した影響か、綱吉は意識を手放した。

ひんやりとしたグラウンドの感触を肌で実感し、薄れゆく意識の中で隼人が箱の中身を見て何かをやっていたようだが、残念なことに意識が持たず消失した。

× × ×
バリ×と音をたてて応接室の窓が割れる。

苛立ちが募る、怒りが募る、またやってくれたという気持ちで胸がいつぱいになる。何となく分かっていたとはいえまさかまたやってくれたとは思わなかった。

「……………沢田綱吉」

最初は何処にでも居るような草食動物だと思っていた。

その考えが間違いだと知ったのは町で彼を見つけた時だった。

並中で見ていた彼とそれ以外の場所で見かける彼が別人のようだと気付いたのはその時間も掛からなかった。

だからだろう、あれは草食動物じゃないということを知ったのは。

かといって自分のような肉食動物ではない、彼にそんな力があるとは思えない。

一番近いのは小動物だろうか。生きる為に必死に足掻くその姿は正に彼と同じだろう。

ただ一つ、沢田綱吉は小動物ではない。

——彼は『獣』だ。

何故かそう思った。疑問を抱くことも無く、そう結論付けた。

自分にとって人間とは肉食動物、草食動物、小動物の三つが居ると思っていた。実際の三つしか居ないだろうと。

だが自分は知った。世の中にはそれ以外の存在が居ると。

故に、彼は『獣』だ。人間が倒すべき——絶対の敵だ。

「……………きみは僕がかみ殺す」

×

噂話で後輩の事を聞いていた。何をやってもダメ、劣等生だと。

だが後輩は自分の妹を助けた。そして目の前にある脅威に立ち向かうことができるとても強い人間だと。

そんな彼と拳を酌み交わしてみたいと思ったのは、自明の理だった。

とは言え、彼の事を自分はよく知らない。

妹からよく聞く彼の姿の事は知っているが自分自身で見えてはいない。

だが今、見た。見てしまった。

彼はグラウンドを割って見せた。正しく、神に愛されているかのような存在だ。

「沢田アー！俺はお前をボクシング部に入れてみせるぞー！」

少年は自分の部屋で「極限だー！」と叫ぶ。

かくして、一人の少年を巡る争いが始まろうとしていた。

ポイズンクッキング・いず・はる

「なあ、リボーン。お前のそれは何だ？」

「俺の子分からの情報を入手してるんだぞ」

「だからといって顔面にカプト虫が密集しているのはおかしいと思う」

素直にいつて気持ち悪い、そう思わずにはいられなかった。

少なくとも可愛らしい赤ん坊の顔にカプト虫がびっしりと張り付いていたら誰だつて叫び声を上げるだろう。

ユニの場合は話で聞いていたのだろうが、それでも顔を青褪めた。

流石に赤ん坊の顔面に虫がベツタリと張り付いているのは気味が悪過ぎである。

本当に幼い子どもが見たら間違いなく泣くだろう。ランボは全く泣いていないどころか「ランボさんはリボーンなんかには負けられないもんね！」と言って全身に蜂蜜を塗りたくり、その結果スズメバチの群れに突き刺されることになってしまったのだが。

幸いなことにスズメバチの毒はその場で殺したから良かったものの、刺されたことによる痛みまでは消すことが出来なかった。今では大人しく家で過ごすことになってい

「それにしても、最近本当に暑くなってきたよな。おかげでさつきから変な幻聴が聞こえるんだけど」

綱吉は背後からガシャンガシャンと何か重たい物が歩いているような音を耳にしていた。

とてもではないが後ろを振り向きたくはない。今は物凄く熱くなってきたし、恐らく幻聴なのだろう。

ジュワアアアアアアアア等と毒々しい音が鳴っているのも気のせいなのだろう。

どうやら最近の熱さに注意し忘れて水分不足になっているらしい。ちゃんと体調に気を付けなくては――。

「そうだな。幻聴じゃ無いな」

「何で眼を逸らそうとしていたのに現実を突き付けるんだよー！」

リボンから告げられた残酷な現実綱吉は思わず叫んでしまう。

何が悲しくて朝っぱらからこんな厄介事に関わらなくちゃいけないのだろうか。そう思いながら綱吉は決意を固め、後ろを振り向く。

「ぐああああああああああ!!？」

振り向いた瞬間、綱吉を襲ったのは目が染みるほどの強い刺激臭だった。

「眼が、眼が物理的に痛い!!？」

あまりの刺激に綱吉は両目を閉じてしまい、その場で悶え苦しみ始める。

これ毒だ。間違いない毒だ。そう理解するのに然程時間はかからなかった。

「チャンスよ！ くらいなさい、ポイズンクッキング・串刺しパスター！」

視界が封じられた綱吉に何者かが飛び乗り、攻撃を仕掛けようとしてくる。

涙が止まらず、線も見えないくらい滲んだ視界で綱吉は振り下ろされる何かを両手を

使って回避し、相手を突き飛ばした。

「ぐつ、少しはやるようね……………」

突き飛ばされた相手は口元を拭いながらそう呟く。

声の高さからして女の声だという事に気付き、綱吉は襲撃者から距離を取る。

「はじめまして、といったところかしらね。ボンゴレ十代目」

その女は一見して見るととても美しい美人だった。

イタリア美人という言葉は彼女の為にあるくらいと言っても良いくらいに、優れた容姿を持っている。綱吉が知りうる限り、アリアぐらいしか大人のイタリアの女性を知らないがそれでもこの女が美人であるという事だけは理解出来た。

ユニヤリゾーナとは違い、美しさという印象を受ける。

しかし、それ以上に彼女が発する毒々しいイメージが綱吉を恐れさせた。

と、どうかこの女の人。何処かの誰かさんと似た空気を感ずる。

頭の中でそう言った考えが浮かぶ中、リボーンはいつも通りの淡々とした表情で襲い掛かって来た女性の名を言う。

「久しぶりだな。ビアンキ」

「ええ。久しぶりね。リボーン」

どうやら相当長い付き合いがあるのか、二人ともかなり親しげである。

しかしながら綱吉としては自分の命を狙っているのに、その下手人相手と親しくしている姿を見るのは少し腹が立つ。

最もその態度は自分が殺されないと確信しているから、取っているのだというのは分かっている。かっている。

分かっているからといって、怒りを覚えないわけじゃないが。

そんな事を考えながら綱吉はリボーンに怒気を向ける。

顔面にスリッパと化したレオンを叩き付けられた。

十十十

ビアンキ、通り名を毒サソリのビアンキ。

イタリアで活動している殺し屋で、ポイズンクッキングという作った料理が何故か劇物毒物に変えてしまうという、メシマズも真つ青な異能の持ち主である。ちなみに彼女自身そのポイズンクッキングのことは自覚しているがよく他人に食べさせようとして

くる。本人曰く「愛があれば大丈夫」とのこと。

なお、メシマズによくある味見をしないで振る舞うということは無く、ビアンキは自分の作った料理をちゃんと食えることが出来る。

グロテスクな見た目の割に味は良く、一流のレストランでも通じる程だ。ただのメシマズとは違うのだ。毒味をした上で食事を出すことも出来る。

食べたら死ぬが。

「そしてビアンキはオレの愛人だ」

「どうなってるんだよこのマセガキ」

いくらなんでもユニの情操教育に悪すぎではなからうか。

と、いうか愛人という言葉の意味を理解した上で言っているこの赤ん坊恐ろし過ぎる。

見た目通りの年齢じゃないのはこの眼があるので分かる。もし無かったら分からなかったが。

「それできみは誰だよ」

「ハルはハルです！」

「いや、だから誰なんだよ」

そして突如として現れた緑中の制服を身に纏った少女の登場に綱吉は混乱していた。

「この娘は三浦ハル。外で歩くリボーンの姿を見て、そのキュートさに心を奪われたの」
「……………あの、何でそんな娘がここに居るんでしょうかね？」

「リボーンを独占している貴方に対して決闘を申し込むつもりだったのよ」
「ねえ、本当に行つて良いですか？」

本当ならば普通に並中に登校する筈だったのだ。

それがどうしてこんな朝っぱらから騒動に巻き込まれなくちゃいけないのやら。

「ハル達はっ！ リボーンちゃんを独占している貴方に決闘を申し込みます！」

「いや要らないからこんな産業廃棄物。とつと引き取つてくれよ」

リボーンの土踏まずが綱吉の後頭部にフィットする。

激しい痛みに悶え苦しみそうになるが、流石の綱吉もそろそろ文句を言いたかった。

今回に関しては自分では無く、リボーンが持つてきた騒動だ。

一人は全く違うが他人の色恋沙汰に手を出すつもりは無いのだ。

そう、だから今まで内に溜め込んできたものを言おう。

心の内側に積もつていた思いをぶちまけようと綱吉は口を開く。

「そもそも俺がリボーンを独占しているとか言うけどさ、本当にリボーンが好きならば
そんな事を氣にする必要は無いと思うんだよ」

長年殺し屋をやっていた者としての勘か、リボーンはこれ以上綱吉が口を開くと不味

いということを理解してしまう。

だが綱吉はリボンから距離を取り、攻撃を回避できる立ち位置に移動していた。

これではあの減らず口を止めることが出来ない、リボンは憎々し気に舌打ちをする。

(きつとそんな事を考えているんだろうなあ)

赤ん坊の癖にプレイボーイなりボーンの姿を眺めつつ、綱吉は話を続ける。

「不満しか無いけど、俺の家庭教師やっているとはいえずつと俺の教育をしているわけじゃないんだ。その合間だって時間を取ることが出来るだろうに」

「悪いなツナ。オレは今、お前の教育で手一杯なんだ。主にしよつちゆう血涙でぶっ倒れるどこぞのクソガキのせいだな」

「そりゃ悪かったね——つて、ちよつと疑問に思っただけどき。何で二人は俺を倒そうとしてるのさ」

脳内のスイッチを切り替え、綱吉は直死の魔眼で二人を見抜く。

ここ最近の間、魔眼殺しを使わないでいたせいとか、それとも慣れてしまったせいなのかは知らないが以前よりも楽にはなっている。

「ああ言わなくて良いよ。リボンに自分の方向を向いてほしいって思ってるんだよね？でもそれってさ、愛って呼べるの？」

「ええ。それが私の愛よ。ハルは可愛らしいリボーンに焦がれているから少し違うわね」

「……………そっか、ならビアンキさんだっけ？ 貴方は愛している人の邪魔をしたいんだね」

「違うわっ！ リボーンは最強の殺し屋よっ！ それがこんなぬるま湯に浸っているなんて……………」

「でも邪魔をしているのも事実だ」

綱吉の言葉は深く、そして二人の心に突き刺さる。

これは不味い。そう思ったリボーンはその場で掛けて綱吉の口を塞ごうとするが、それを予測していた綱吉はあっさり回避する。

「本当に愛しているのならば。その人のやっていることを見守るとか、応援したりするものなんじゃないの？」

別に綱吉としてもビアンキと三浦ハル、その兩名を傷付けようとは思っていない。だが一方的な事で愛を語る、その事に我慢が出来なかった。

——憐憫の獣が居た。

彼のモノは行き付いた答えこそ間違えたが、その過程には深い愛があった。でなければ人類を一人一人殺す必要等無いから。

でなければ人類を再設計する必要が無いから。

—— 回帰の獣が居た。

彼女は存在するだけで悪だった。だが彼女はただ母親だったのだ。

母親が子を慈しみ守るのは当然のことだ。

もう一度必要とされたいと思う事の何が悪いのか。

—— 快樂の獣が居た。

彼女は己の快樂の為に他者を殺した。それは本当に許されないことだ。

自己愛の極みと言つても過言ではない。だが彼女はそれでも人を救つたのだ。

例えその目的が自分の快樂を満たすものだったとしても。

—— 比較の獣が居た。

彼は目覚めること無く、その機能は停止した。

だが彼は見つけたのだ。美しい物を、とても美しい物を見たのだ。

こんなに美しい物があるのなら世界を滅ぼす必要なんてない。

—— そして『全能』の少女が居た。

彼女は目的の為に罪の無い少女達を沢山殺した。

沢山の人達の人生を捻じ曲げ、不幸にしてきた。

それは決して許されないことで、まぎれもなく彼女は悪だった。

「だけど、彼女はただ好きになつた人に幸せになつてほしかつただけなのだ。

「だとしたらそれは愛なんかじゃ無いよ。一方的な押し付けがましい感情だ」

自分は知っている、彼等の愛を。だからこそ一方的な愛は否定するしか無かつた。

何故なら自分自身も虹の少女や海の青年同様に『愛』を宿しているのだから。

女難

「成程、貴方にとつての愛についてはよく理解できたわ」

綱吉の口から語られた愛、それを聞いていたピアンキは一つの答えを得た。

どうやら自分はこの少年のことを誤解していたらしい。

一人を愛する者としてこの少年を、沢田綱吉を見くびっていた。

「私の愛が真面目で無いと言う事、貴方はそれを言っていたのね」

ならばこそ自分がすべき事はただ一つ。

「それでも私はこの愛を貫き通すわ。私の胸の内にあるこの感情を、私は愛と名付けた
いのだから」

「——愛は肉欲、だけどそれは切り離せないものだ」

ピアンキの言葉を聞いた綱吉は語り始める。

今までの綱吉の物とは思えないような口調で、まるで別人が話しているような印象を
植え付けさせた。

だがここに居るのは間違いなく沢田綱吉であることは間違いなかった。

「その愛、最後まで貫き通すが良い。応援しているぞ」

「ええ。分かったわ。リボーンを狙う魔の手から私は必ず守って見せる」
「それならリボーンを託すことが出来る。ああ、本当に安心した」

かつて神話の舞台にはバベルの塔と呼ばれる天にも届く巨大な塔が存在した。

神は人間が犯した過ちを罰する為に塔を破壊する。その後、人間達から言葉を剥奪した。

この時剥奪した言葉を統一言語と言い、これを奪われた人間達は互いに傷つけ合い争うようになったのだ。

——しかし、話し合えば分かることもある。

神に言葉を奪われて争うようになったからと言っても、人はこうして分かり合うことが出来るのだ。

「おいダメツナ。綺麗ごとで誤魔化しているが要するにオレを生贄にしたいだけじゃねえか」

尤も、相互理解と言う名の取引の材料にされた生贄（リボーン）からしたら堪ったものじゃないが。

「良いじゃん。ビアンキ美人なんだし、リボーンみたいな女泣かせな奴でも一生養ってくれるよ。地下室で」

「それは世間一般で言う監禁となんら変わらねえじゃねえか」

「別に良いんじゃないの？ 俺が被害にあうわけじゃ無いんだし……………」

「本当に他人事だな」

「実際他人事だしね。リボーンの結婚生活がどうなろうと知った事じゃないし。まあ流石に命の危機になったら助けるけど」

「そうか。ならオレもお前の将来が女関係で悲惨な目にあっても助けないからな」

「いや、俺の事を好きになってくれる女の子なんて居ないから。もし居たとしたらそれってどんな奇特な人間って話だよ」

「……………少なくとも二人は居るんじゃないか？」

そう言つてリボーンは綱吉の背後、大凡三百メートルくらい離れた場所に居る二人の少女に視線を向ける。

片方はユニ、もう片方は金髪の少女だった。

目を擦つてもう一度確かめる。すると金髪の少女の姿はまるで最初から居なかったかのように全く見えなくなっていた。

「……………おい、ちよつと待て。なんか一人増えているような気がしたんだが」

「気のせいじゃないの？」

全く興味無さそうに、実際に興味が無いのだろうが、そんな風に振舞う綱吉にリボーンは何とも言えない視線を向ける。

恐らくだが今の沢田綱吉に何を言ったところで無駄だろう。

「そうか。なら気のせいだな」

だが、マフィアのボスとしてや学業に関する教育こそ任されているもの、女関係は任されていない。と、どうかそまでは面倒を見切れない。愛人が沢山居るリポーンならば扱い方や接し方などを教える事が出来るとは言え、女心は難しいのだ。その上、女性に対して優しく振舞うのは紳士としての嗜みである。

こういう事は一度痛い目を見ておかないと学習しないのだ。

本当に大変な事になる前に手助けはするつもりだが。

「ま、ビアンキは良いとして……………えっと、きみの名前は何だったっけ？」

「ハルです！ 三浦ハル！」

「ゴメン。ちゃんと覚えていなかった。でも今度は覚えたよ」

綱吉はハルの名前を聞き、顔を覚える。

「さつきも言ったけどこんな産業廃棄物なら喜んで上げるから」

リポーンの土踏まずが再び綱吉の後頭部にフィットする。

頭に行った激しい痛みが綱吉は悶え苦しむ。

「ま、まあ、リポーンにも事情があるわけだし。そういうのは当人で話しあった方が良いでしょう。正直な話、俺に話を振られても何にも答えられないからさ」

後頭部を蹴られた痛みで涙を流しながらも綱吉はハルにそう告げる。

「それじゃあ、俺はそろそろ学校に行かなくちやいけないから行くよ……………三浦さんも遅刻しないようにしなよ」

自分の言いたい事のみ告げて綱吉はこの場から走り去った。

口で言ったようにそもそもとしてこの一件、綱吉は全く関係無いのだ。

リボンが原因の騒動に巻き込まれた被害者に過ぎない。

それに、全く関係無いが今日が風紀委員が持ち物検査をやるのだ。別に校則で違反している道具を持っているというわけではないが、もし遅刻でもしたら何をされるか分かったものじゃない。

風紀委員会は見た目通りの不良ではあるものの、所属している生徒に関してはかなり礼儀正しい。ただし、そんな彼等の頂点に立つ雲雀恭弥だけは話が別だ。

以前の決闘騒ぎが原因なのか、あの日以来睨まれている。

確かに自分は褒められた生徒では無いだろう。しかし、不良が多い並盛中で何故劣等生である自分が目を付けられるのだろうか。

もしここで遅刻なんてしてしまつたら余計に睨まれることになるだろう。

だからこそ綱吉は逃げるように走り去った。主にこれからの自分の学校生活の為に、逃げ出した。

「納得いきません!!」

逃げるように走り去った綱吉と、そんな彼を追いかけるように去っていったリボンとビアンキの後ろ姿を思い出しながらハルは学校に向かっていた。

怒っている理由は半ば不条理なモノだという事は自分でも分かっているが、それでも怒らずにはいられなかった。

綱吉からしたら完全なとぼちりでしかないのだが。

「次は必ず、リボンちゃんの手で話し合ってみせます!!」

彼の語った愛に対して何も言うことが出来なかった。

だから今度会った時、ちゃんとリボンのことについてしっかりと話し合おう。

そう考えつつ文句をたれながら道を歩いていた時だった。

何者かに背後から襲われたのは。

「きゃっ?! い、一体何をするん——!!?」

「うるせえ!! いいから大人しくしやがれ!!」

突然身に襲った出来事に文句を言おうとした瞬間、ハルの頬に軽い切り傷が出来る。

切り傷が出来た原因は背後で自身を羽交い絞めにした男が持っていたナイフに切り付けられたからだ。

「ヒッ………」

自分が置かれている状況を理解した、理解してしまったハルは恐怖で身動きが取れなくなってしまう。

凍り付いたかのように恐怖で震えるハルを見て、男は笑みで顔を歪める。
そして男はハルを連れ去ろうとして、

「——今日は遅刻確定だ」

背後から現れた綱吉の奇襲を受ける事になった。

綱吉の蹴りを背中に喰らった男はその衝撃でハルを放してしまう。

「こっちだー！」

「は、はひっ!!」

男の腕の中から解放され自由になったハルを抱き寄せ、自分の背後に居るように促す。

ハルは怯えながらも綱吉の背後に身を潜めるようにして隠れる。

「本当、何でもこんなに治安が悪いんだよこの町は………雲雀さんちゃんと仕事してよ」
「て、てめえ………よくもやってくれやがったな。ヒーロー気取りか？」

この町の治安を守る風紀委員長の顔を思い浮かべながら文句を垂れていると、男は怒りの形相を綱吉に向ける。

しかし綱吉は男からの殺意に対して冷やややかな視線を向けた後、ハルに向かって笑みを浮かべた。

「無事で良かったよ。嫌な予感がしたから戻って正解だった」

そう告げると綱吉は男に向かって駆け出した。

その後ろ姿を見て、ハルは恋に落ちたのであった。

風紀委員

三浦ハルとピアンキ。

この兩名と遭遇した日から既に三日が経過した。

最初の出会いこそ決して良くはなかったものの勘違いが解けた事で打ち解ける事が出来た。

最も、ハルに何故か好意をもたれてしまったりピアンキが綱吉の家に居候することになったり、それが原因で何故かユニが少し怒っていたりしていたが問題は無事解決したと言つても良いだろう。

そして時は流れて現在、並盛中学校の屋上。

「ぜえ……………はあ……………」

綱吉は体調不良で苦しんでいた。

「じ、10代目……………大丈夫ですか？」

「……………ごめん、全然……………大丈夫じゃない」

苦しんでいるのを見て自身の体調を心配する隼人に綱吉はそう告げる。

とてもではないが空元気を振り絞る気力さえなかった。

「や、やつぱり……………この前水に飛び込んだのが原因だったのかな？」
だとしたら非常に厄介だ。

直死の魔眼は炎症やウイルス等といった身体に悪さをしているものを直接殺すことが出来るという利点がある。

しかし、それはあくまで身体の中にある元凶を殺しているだけに過ぎない。逆に言えば無いものは殺すことが出来ないということだ。失われた体力はしっかりと休息を取らなければ回復しない。

試しに直死の魔眼で自分の身体を観察する。

身体の中に元凶と思われるウイルス等といったものは存在しなかった。

それどころか死の線や点等が自分の身体に沢山出来ていた。

弱っているのだから当然と言えば当然の話だが、それを見た瞬間綱吉の顔から血の気が引いていく。

「きゆう……………」

元々体調を崩すくらいに気分が悪かった綱吉は、自分の身体の線や点の多さを見てしまった事で意識を手放してしまう。

そのまま倒れそうになる綱吉の身体を武は受け止めた。

「つと、大丈夫……………じゃねえみたいだな」

「おい山本。10代目を保健室に連れて行くぞ」

気絶した綱吉を見て二人は保健室に連れて行くこうとする。

「休ませるなら応接室が良いぞ」

だがその瞬間現れたリボーンという言葉を聞いて考えを改めた。

「……………×××何処だろう、ここ？」

気が付いた時、見知らぬ建物の中に居た。

間違いなく夢である事は間違いないだろう。しかし、ただの夢であると断じるには妙な夢だった。

恐らく、恐らくではあるがああ姉を称する愛歌の時と同じような感じだ。

ただ違うのは彼女が此方にやって来たのに対し、自分は向こうに迷い込んだのだということだろうか。

そう考えた綱吉は早く戻らなければと思いつながら周囲に視線を向ける。

「それにしても、綺麗だな」

白く、白く、ただ白い。

何処までいっても浄罪の如き真っ白なこの空間はただひたすらに清浄さに満ちていた。

それこそ悪を一切許容しないと云わんばかりに。

だが、何故かは分からないが綱吉には居心地がとても良かった。

建物の中、否、城の中を歩く。そして玉座にて一振りの剣を見つめる。

——その剣はとても美しい剣だった。

人間の手で作られた代物ではない。

これは星の内海にて鍛えられた人の祈りの結晶。

沙条愛歌に見せられた夢に出てきたものとは少しばかり形状が違うが、間違いなく同じ剣だった。

自然と足が前に出ている。

あの剣は自分を招いている、だから自分はここに居るのだ。

玉座に刺さっている剣がそう告げているような気がした。

そして綱吉は玉座の前に立ち、剣を引き抜こうとして——、

「待ちなさい」

何者かに腕を掴まれて止められた。

止めたのは獅子を連想させるような兜を装着した人物だった。

「その剣に触れてはいけない」

「貴方は……………?」

「今の貴方にはこの剣は使いこなせない。いいえ、使う事は出来るでしょうがまだ早い」
兜を付けた人物は問い掛けを無視し、綱吉の身体を放り投げた。

悲鳴を上げる間もなく空に投げられた身体は浮上し、同時に意識が消失していく。

やがて完全に意識が消える間際、兜を付けた人物が静かに語った。

「誇りを知りなさい。全てを殺すその力を、世界を壊してしまいかねないその愛を、正しく使う為の誇りを」

「う、うう………一体どういう意味なんだよ………」

眠りから目覚めた綱吉は重くなった瞼をゆっくりと開ける。

不思議な夢だった。空に向かって放り投げられた事もそうだが、あの場所にあった剣についてまだ。

いつかの日、白蘭が持っていた不思議な剣と似たようなものだろう。

さつきよりはマシになった体調のおかげか、寝惚けているのにも関わらず妙にすつきりとした頭でそう考えながら起き上がろうとして、

「やあ、目が覚めたんだね」

この学園で最も恐ろしく、綱吉にとっても天敵である並盛中学風紀委員会の長の声が耳に届いた。

「——ッ!？」

飛び起きた綱吉は雲雀恭弥と対峙する。

そして床に伏している隼人と武の姿を見て、何があったのかを理解する。

「ああ、安心して良いよ。大した怪我は負わせていないからね」

獰猛な笑みを浮かべながら語るその言葉に嘘は無かった。

「獄寺隼人は兎も角、山本武は武器があつたら話が違つただけだね。もし無手じゃなかつたらもう少し楽しめたよ」

そう言つて恭弥はトンフアーを構える。

「じゃあ、やろうか」

戦意を滾らせた恭弥はトンフアーを振るつた。

自らに迫り来る一撃を綱吉は回避しようとする。しかし、その一撃を完全に回避することは出来ず、魔眼殺しである眼鏡を砕かれてしまった。

「い、いきなり何を」

するんですか、そう言葉を続けようとして恭弥の瞳を見てしまう。

彼の瞳は何処までも冷徹で、ただ只管に自分を殺すという殺意のみで満ちていた。

「……………俺、雲雀さんを怒らせるような事を、してましたっけ?」

「覚えがないのかい?」

「すみません。割と怒らせるような事をしてましたね」

決闘騒ぎに校庭に亀裂を作ったり、色々な事をやっていた。

正直な話、並盛の風紀を守ると公言している彼からしたら自分は真っ先に叩き潰す敵だろう。

「そうだね。きみは並盛での風紀を乱している。主に女性関係でね」

「えっ、何それ知らないんですが」

「まあそれはどうでも良い事だよ。兎に角、きみはここで一回かみ殺す」

その言葉と共に恭弥は再びトンファーを振るう。

回避は不可能。速さは当然だが避けられるだけのスペースが存在しない。

かといって反撃するには体調が万全ではない。

このまま攻撃を受ける、そう思った瞬間だった。

突如として現れたりボーンが十手に変化したレオンでトンファーの一撃を受け止めたのは。

「ワオ、やるね」

自身の一撃を受け止められた事に恭弥は歓喜の声を上げる。

「リボン!!」

「よっ、元気になったみたいだなダメツナ」

恭弥の一撃を弾いたりリボーンは綱吉の方に顔を向ける。

ニヒルな笑みを浮かべる赤ん坊の顔を見て、綱吉は全てを察した。

「もしかしなくても、お前が全ての元凶だろ！」

「よくわかったな。その通りだぞ」

「その通りだぞ、つてお前なあ……………!!」

綱吉は怒りを込めてリボーンを睨みつけようとする。

しかし、それよりも先に恭弥のトンファーが綱吉に突き付けられた。

「話している暇があのかい？」

「……………ありません」

雲雀恭弥は戦闘狂でもある。それなのに明らかに強いリボーンよりも自分を狙っている。

どれだけ怒らせてしまったのだろうか。そう思わずにはいらなかった。

「つーわけだ。雲雀にボコられたくなかったら死ぬ気で何とかしろ」

そう言つてリボーンは綱吉の額に銃口を向け、死ぬ気弾を放った。

放たれた死ぬ気弾は綱吉の眉間に命中し、その場に倒れる。

その様子を見ていた恭弥は静かに一言呟く。

「感謝するよ赤ん坊。彼と戦わせてくれて」

恭弥の言葉を聞いてリボーンは思い返す。
それは三日前の出来事だった。

雲雀恭弥

「やあ、初めましてたいったところかな。赤ん坊」

並盛中学校の応接室。そこでリボーンは雲雀恭弥と相對していた。

風紀委員会の委員長にして不良の頂点という相反する立場にして、並盛町という一つの町の頂点。

歴戦の殺し屋であるリボーンからすれば未熟だが、それでもこの年齢でここまで強いのは驚嘆に値する。

リボーンが内心、そう評価していると恭弥は話を切り出す。

「単刀直入にいこうか。沢田綱吉をここに連れて来てくれない？」

「……………何？」

恭弥の口から語られた言葉にリボーンは訝しむ。が、すぐに納得する。

自分の教え子である沢田綱吉は何かと騒動に巻き込まれたり、そもそも騒動の中心に居るトラブルメーカーのような存在だ。

校舎を破壊したり、彼のバイクに乗って逃げ出したり、綱吉を注視するのは当然と言えば当然の事だった。

と、いか今まで逃れられていたのが奇跡なくらいだ。

「お前なら呼び出せるんじゃないかねえのか?」

「呼び出して来た事は一度も無いよ」

恭弥のその言葉を聞き、リボーンはボルサリーノを深く被る。

無意味な方向に根性がある。取り敢えず後でとちめておこう。

「それに、牙を折れるのは今しか無いからね」

「牙?」

あのヘタレにそんなモノがあるだろうか。

そう思っていると恭弥は立ち上がり、窓の外に視線を向ける。

「そう、あの獣の牙を、ね」

窓の外、グラウンドでは綱吉が校庭に亀裂を作っている姿が映っていた。

十十十

「赤ん坊には感謝するよ。前々から逃げ続けて来たきみをここに連れて来たんだから」

「リボーン!! やって良いことと悪い事があるだろ!!」

恭弥の攻撃をナイフで受け止めながら、綱吉は自分達がこんな惨状に置かれている原

因に向かつて怒りの声を上げる。

だがリボーンは我関せずと言わんばかりに素知らぬ顔をした。

「おめえが今までやったツケを支払う時が来たただけだろ」

「確かに!! その通り……………だけでもッ!!」

トンファーとナイフがぶつかり合う金属音が鳴る。

一方は相手を叩きのめす、否、かみ殺す為に激しく攻める。もう一方はその攻撃を只管に防ぐ。

「そういうわけだから自分でなんとかしろ、ダメツナ」

リボーンの言葉を聞いて、助けてくれない事を理解する。

家庭教師なんだから少しは自分の事を助けようとはしないのかと内心文句をたれつつも、綱吉は応接室内を見渡す。

幸いな事に今の自分は死ぬ気弾を撃たれて身体能力が上がっている。

普段ならば勝ち目が無い風紀委員長相手でも、これならば太刀打ち出来る。

後は隙を見つけ、直死の魔眼を使ってこの応接室から脱出すれば――、

「きみの考えていそうな事は分かるよ。隙を見てこの応接室から脱出するつもりだろう？」

「――ッ！」

「やせなこよ」

綱吉の心を読んだのか、恭弥は更に勢いを強める。

とてもではないが隙なんか見つけれられない。と、いうより隙を作らないように動いている。

ならば武器を殺して動きを止めようとしても、此方のナイフを防御した際に、自分が振り下ろそうとした箇所からズラして攻撃を受け止めている。

直死の魔眼は非常に強力な異能で、この瞳に映る点と線を突けば、それがどんな強度の物であろうと簡単に殺す事が出来る。けれど、点と線を突かなければその効果が発揮される事は無い。

「きみのやりたい事をさせると思ってたのかい？」

「雲雀さんは、そこまでオレをかみ殺したいんですか!!？」

「それ、態々口で言う必要がある？」

口頭で伝えながらもトンファーとナイフのぶつかり合いは更に激化する。

それにしても本当に戦い方が上手い。このままやり合っていれば必ず負ける。

何とかして線か点を突かなければ――、

「これで終わりだよ」

必死にトンファーを殺そうとナイフを振り下ろした瞬間、刃が鉤爪に捕らえられる。

「っ、仕込み鉤」

ナイフを使えなくなった綱吉に向かってトンファーが振るわれる。

防ごうにも武器が無く、回避しようにも近過ぎる。

詰み——その事実に行き着いた時には雲雀恭弥のトンファーの一撃を受けていた。

十十十

沢田綱吉は決して強くはない。

勿論、弱いというわけでも無い。直死の魔眼という特大の異能があるのは事実だし、その力を使って今まで戦いに勝利してきたのも事実だ。

だが、その強さは直死の魔眼があつてこそだ。

能力を理解しているのならば対処は容易。ある程度の実力者であるならば視線から何処を狙っているのかが分かり、それを防ぐ事は簡単だ。

とはいえ、非常に危険な能力には違いなく、防ぎ方を間違えば命を失う事になるだろう。

だからこそ、怯む事なく攻撃をし続けた雲雀恭弥という人間は傑物だった。

「強いな」

ただの中学生、一般人の領域を遥かに越えている。

彼ならば裏社会でも普通にやっていけるだろう。今はまだ未熟かもしれないが、経験を重ねていけば自分にも届き得る才覚の持ち主だ。

一連の戦闘を見ていたリボーンは雲雀恭弥を高く評価し、次に殴り飛ばされて床に伏した沢田綱吉に視線を向ける。

「そして、ようやく理解したぞ。ダメツナ、お前——死ぬ気になっていないんだな」

死ぬ気弾は脳天を打ち抜いた場合、被弾者は全身のリミッターを外すことになる。

結果、下着を除いた衣類が弾け飛ぶ。尤も、意識的に死ぬ気をコントロールする事が出来るならばそうはならないが。その為、リボーンも最初は衣服が無事だった事から死ぬ気をコントロールする事が出来ると考えていた。

だが今の雲雀恭弥との戦いで確信した。

——沢田綱吉は死ぬ気になれてないという事を。

死ぬ気弾の効果によって身体能力は上がっている。が、身体のリミッターは外れていない。

正確にはリミッターが外れているのだろう。ただ100パーセントの力を発揮しないように無意識の内にブレーキをかけている。

「……………どうしたもんか」

リボーンは困ったように呟く。

まさか死ぬ気弾の力でさえ、リミッターを外す事が出来ないとは思わなかった。

やはり直死の魔眼の影響なのだろうか。

「まあ、それが分かっただけでも良いとするか」

死ぬ気弾を撃たれると何故か髪の毛が伸びるといふ特徴等、まだまだ気になるところは沢山あるが今はどうでも良い。

それよりもそろそろ止めた方が良いだろう。

このまま放置していたら本当に再起不能になるまでボコられかねない。

そう判断したりポーンは、倒れた綱吉に追撃を仕掛けようとする恭弥を止めようとレオンを左手に変化させる。

その瞬間だった——綱吉か唐突に起き上がり、恭弥の持つトンファーを掴んだのは。

「……………」

青く光り輝く双眸から血の涙が溢れ、額から出ている炎は更に激しく燃え上がっている。

その瞳に理性は欠片も無く、明らかに正気ではなかった。

それは——明らかに死ぬ気だった。

直後、握り締められていたトンファーが突如としてバラバラになって床に転がる。

「ふうん……………どうやら牙はまだ見せてはもらえないみたいだね」

だというのに恭弥はそんな綱吉を見て退屈そうに呟いた。

武器を失ったにも関わらずに、だ。

「……………死ね」

綱吉は武器を失い、抵抗する術を失った恭弥に指を突き付けようとする。

とてもではないが人間を殺す事なんか出来ないようなお粗末な攻撃だ。威力も無く、速度も無く、なにより貧弱。

だが直死の魔眼という異能があれば話が違う。

線をなぞり、点を突くだけで人が殺せるようになるのだ。

そして今、沢田綱吉は雲雀恭弥の命を奪おうとしている。

「止めろ。ダメツナ」

リボーンは正気を失っている綱吉の顎に蹴りを入れて沈黙させる。

いくら死ぬ気だったとしても脳を揺らされれば平常を保つ事は難しい。

肉体的にはそこまで強くない教え子ならば猶更だ。

「うう……………」

「つたく、手がかかる奴だな」

呻き声を上げて倒れている綱吉の頭の上に乗りながら呟く。

今のを見て理解した——ダメツナを死ぬ気にさせるのはあまり良くは無いということを。

普通に死ぬ気弾を使うぐらいならば問題は無い。

だがが無意識的に彼がかけているブレーキを外してしまえば何が起こるか分からない。あれが沢田綱吉の意識だとは思えない。もっと別の何か——。

「分かっていた事だったけど、牙を折るには単純ではなさそうだね」

教え子の豹変に戸惑うリボーンに対し、恭弥は事も投げな様子だった。

「雲雀、お前ダメツナについて……………何か知ってるのか？」

「そこで伸びている問題児については詳しく知らないよ。でも、彼が獣であるということとは分かる」

「獣？」

「そうだよ。尤も、直感のようなものだけだね。だけど、彼が危険だという事だけは分かる」

恭弥の言葉にリボーンは首を傾げる。

「赤ん坊。彼を人間のままにしておきたいなら注意しておいた方が良いよ」

笹川了平

最近、とてつもなく運が悪い。

内心そう考えながら綱吉は学校に向かっていた。

元々決して運が良いとは言えなかったが、ここ最近は特にそれが目立っている。その理由は分かっている。全てはあの傍若無人という言葉を体現しているリボーンのせいである。

「全てオレのせいにするな」

リボーンがそう言うのと同時に後頭部に赤子の土踏まらずがフィットした。

何度喰らっても慣れない。と、いか段々威力が上がっている気がする。

「い、いや……………大体お前のせいだろ……………」

「確かにオレが関わってるのも事実だ。が、オレが関わらなくてもその内爆発してたと
思うぞ」

「そんなわけないだろ……………たく……………」

綱吉はリボーンに文句を垂れながらも歩みを進める。

何故かは知らないが、こんな風に平和に登校するのは久しぶりな気がした。

最近友達になった獄寺君は今日はボムを仕入れにいつているし、山本は野球の試合が近い為朝早く登校している。風紀委員会の持ち物チェックに引つ掛かる物は持っていないし、雲雀さんに目をつけられる心配も無い。

心の中でそう思いながら、綱吉は久しぶりの平穩を噛み締める。

「引つ手繰りだ！ 誰か、その男を!!」

そしてその平穩が一瞬で失われた事に溜め息をつく。

「ダメツナ、こっちに來るぞ」

「言われなくても分かってるよ」

リボーンの言葉に気怠そうに返しながら後ろを向き、攻撃を叩き込もうと構える。

「退け退けえ!!」

引つ手繰りの男は道を塞いでいる自分に対してそう怒鳴りながら突っ込んでくる。

その行動に躊躇いは無く、邪魔をしようものなら容赦なく攻撃を加えて來るだろう。

「普通なら恐怖を覚えるんだろうけど」

綱吉はそう呟きながら引つ手繰りの男の間合いに潜り込み、

「生憎普通じゃないんでね!!」

その顎にアッパーカットを叩き込んだ。

「へ、え……………?」

下顎部に拳を叩き込まれたことで平衡感覚を失ったのか、男はフラフラとした足取りになり、そのまま倒れ伏す。

「どうやら上手くいったみたいだ。」

「気絶した男を見下ろしつつ、盗まれたものを手に取りながら綱吉はほくそ笑む。」

この前の雲雀恭弥との一件以来、綱吉の直死の魔眼の能力は以前よりも向上していた。それが良いか悪いかで言うならば決して良くは無いのだが、以前よりも見れるものが増えて選択肢が多くなった。

「今までなら過剰ともいえる行いしか出来なかったが、今では意識を殺してそのまま眠らせる事も出来る様になった。」

「ダメツナ。顔凄いことになってるぞ」

「ただその代償として負担も倍以上になってしまったが。」

「綱吉はポケットから取り出したハンカチで鼻血と血涙を拭う。」

「相変わらず見た目がグロッキーになる奴だな」

「放っておいてくれよ」

「盗まれた物を返した後、綱吉達は並盛中に再び向かう。」

「だが、直死の魔眼を使った代償か物凄い疲労感が全身を襲っていた。」

「顔真つ青だぞ」

「そりや、使うつもりなかったからな」

リボーンに相槌を打ちつつも身体は言うことを聞かなくなっていく。

呼吸は荒く、全身は怠く、意識は朦朧としている。

「もう、無理」

薄れ行く意識の中、綱吉は立っていられずそのまま前のめりに倒れ込む。

その時だった。倒れた自身の身体を何者かが支えたのは。

「大丈夫か？」

「は、はい。すみません……………」

自分を支えた相手に謝りながら、綱吉はその人物の顔を見る。

白髪に額に傷がある人だった。

確かボクシング部の部長をやっているという笹川京子の兄だっただろうか。

「しかし、見事な一撃だったぞ！ 突っ込んでくる盗人相手に一步も引くこと無く立ち

向かうとは」

「もつと怖いのを知ってましたから」

少なくとも風紀委員長に比べればあの男等微塵も怖くは無いだろう。

「オレは笹川了平だ。ところで沢田よ、ボクシング部に入らないか!？」

「遠慮しておきます」

「何故だあー!!」

大声をあげる了平に綱吉は苦笑いする。

ただでさえ直死の魔眼の負担が大きいと言うのに、ボクシングなんかやれば更に酷くなる。

その上、白蘭が何か企んでいるかもしれないのだ。

とてもではないがボクシング部に入る気にはなれない。

「元々病弱というか、身体が弱いのでボクシングみたいな激しいのは出来ないですよ」

「そうか……………それならば仕方がないか」

口ではそう言いつつも完全には納得していない様子の了平に、綱吉は乾いた笑みを零す。

実際に倒れそうになったところを見せてなければしつこく勧誘されていた事だろう。

そんな事を考えながら、綱吉は了平と話しながら学校に向かった。

++++

イタリヤのとある場所に存在する古城にて、一人の老年の男が椅子に腰掛けていた。

男の名はティモツテオと言い、現在のボンゴレファミリーのボス、ボンゴレIX世である。

「……………ふう」

最後の書類にサインを記したティモツテオは一息つく。

こうして長い時間椅子に座り、書類仕事に耽るのは久しぶりだった。

書類仕事自体は毎日の事で慣れている。だが歳を重ねて老いたせいも、以前ならば楽々熟せていた筈の量の書類でも疲れるようになっていた。

まだまだ若い者には負けない、とはもう言えないだろう。

だからこそ後継者を選んだのだ。

だが、

「リボーンも、今回は苦戦しているみたいだね」

自身の依頼を受けた最強の殺し屋であるアルコバレーノの事を思い返す。

さつき処理した書類の中にあつたりリボーンからの報告書を見る限り、育成の方はあまり上手くない様子だ。

とはいえ、それも無理は無いだろう。

歴代ボンゴレの中でも沢田綱吉はかなり異質な存在だ。

ボンゴレI世の直系の子孫であり、直死の魔眼という破格の異能を持っているのだ。

いかに歴戦の家庭教師といえど育てるには時間がかかるだろう。

尤も、リボーンは一流の家庭教師である為、その心配はしていない。

初めから長期の依頼なのだ。むしろこの短期間でマフィアのボスとして相応しく

なつたのなら逆に心配するぐらいだ。

「さて、と」

ティモツテオは軽く背伸びをし、数枚の書類を手に取る。

その書類にはボンゴレファミリーの傘下のあるファミリー、その次期ボス候補とボス補佐候補や後の幹部候補について記されていた。

「若いボス候補同士の顔合わせ、か」

歳の近い者同士、関係を深めるのはマフィア界でなくても別に珍しい話ではない。

今、ティモツテオの手の中にある書類は其々のファミリーの中でも綱吉にと歳が近い者について記されていた。

「エヴォカトーレ………：………：そういえば、エヴォカトーレは昔綱吉君が過ごして事もあつたな」

もし彼がボンゴレ10代目の候補にならなければ、他の候補者が生きていたならば、エヴォカトーレファミリーに引き取られていた事もあつたのかもしれない。

それだけ彼と、エヴォカトーレの次代を担う者達との仲は良かった。

「綱吉君も親友との再会は喜ぶだろう」

そう呟いた後々、ティモツテオは立ち上がり部屋を後にする。

エヴォカトーレだけではない。綱吉と同じ年でありながらファミリーのボスをやつ

ているシモンファミリーや、並盛町に拠点を置いているトマゾファミリー。

「彼等との出会いはきつと、綱吉君に良い影響を与えるだろう」

歳が近い者との出会いは互いに切磋琢磨する機会を齎す。

そして、この行動が綱吉にとって良い成長に繋がるということを超直感が告げている。
た。

「だから、少しだけ待ってはくれないか」

ティモツテオは自らの指にはめているリングに視線を向ける。

ボンゴレファミリーの紋章が刻まれたそのリングは、ティモツテオの言葉に呼応するかのように炎を灯した。

顔合わせ

「ツナ、今から出掛けるぞ」

学校から帰って来た瞬間、玄関で待ち構えていたリポーンが言ったその言葉に綱吉は盛大に溜め息を吐いた。

「人の顔を見て溜め息を吐くなんて失礼だな」

「溜め息の一つや二つしたくもなるよ」

つい先日、意識を失った際に風紀委員会風紀委員長雲雀恭弥の根城、応接室に親友の獄寺隼人と山本武を唆して運び込んだという前科があるのだ。

コイツの考えている事は分からない。だが、考えている事は間違いなくろくでもないものだろう。

とはいえ、それが分かっていたところで逆らう事は出来ないのだが。

「それで、どうしてなんだよ」

「マフィアのボス同士の顔合わせだ。歳が近い奴同士、親交を深めておくというのも悪くないからな。まあ、正確には殆どがボス候補なんだがな」

リポーンの発言を聞き、綱吉は二度目の溜め息を吐く。

やっぱりろくでもないことだった。マフィアのボス同士の顔合わせ等、はつきりいつてやりたくはない。そもそもマフィアのボスになるつもりは無い、なりたいと思う気持ちすら皆無なのだ。

「リボンおじ様、支度を終えました」

綱吉がそう考えていると、ユニが玄関にやって来た。

その装いは普段家に居る時の服装とは違い、自宅に居る時でも可愛らしい格好をしているが、それでも一目見たただけでおめかししているのが分かる。

その事に訝しんでいると、自身が家に帰って来た事に気が付いたユニは視線を此方に向ける。

「ツナさん、お帰りなさい」

「ただいま。ところでユニ、その格好は……………?」

「ユニも今回の顔合わせに参加するんだぞ」

ユニに問い掛けた質問にリボンが答える。

すつかり忘れていたが、ユニはそもそもジツリヨネロファミリーのボス、アリアの一人娘である。それを踏まえて考えるならば、顔合わせに参加するのは当然の話だ。

「お前より歳下のユニがしつかりやっているのに、歳上のお前はやらないなんて情けないな」

「うるさい」

リボーンの発言に少しだけ苛立ちながら、綱吉は家に帰って来てから三度目の溜め息をつく。

「ユニ。出たく無いのなら出なくても良いんだよ?」

マフィアのボス、もしくは次期ボスの顔合わせ等、間違いなくろくでもない話である。

綱吉はそんなろくでもない事に妹分であるユニを行かせる事に忌避感を抱いていた。

だがユニ笑みを浮かべたままゆつくりと首を横に振る。

「いいえ、必要な事ですから」

「……………そっか」

ユニの言葉に綱吉は何とも言えないような表情を浮かべて空を仰ぐ。

そして何かを決意したかのように眉間に皺を寄せてリボーンに視線を向けた。

「分かった。オレもその顔合わせに出る」

「出ないんじゃないのか?」

「オレ一人なら出るつもりなんてなかったよ。でも、ユニが行くのならオレも行くよ。」

そんな所にユニを一人で行かせるわけにはいかないから」

本場の事を言えば、マフィアのボスやボス候補が集まる場所に行きたくななんてないし、顔合わせなんてしたくもない。実の妹のように大切にしている妹分もそこに行かせ

たくなんてない。

だがユニが自分で行くと決めた以上、止める事は出来ないだろう。それならば自分が側に居た方が安心だ。

そう考える綱吉にユニは顔を少しだけ赤くし、リボーンはそんなユニを見てボルサリーノを深く被る。

「ダメツナ。今度から特別授業で女性への接し方について教えてやる」

「えっ、何で？」

言っている意味が理解出来ない、そう言わんばかりに視線を向ける。

綱吉から向けられる視線にリボーンは少しだけ顔を逸らし、困ったかのように溜め息を吐いた。

十十十

「ここが待ち合わせの場所？」

「ああ、そっただぞ」

正装に着替え、顔合わせの場所であるホテルに着いた三人。

並盛町にある唯一の高級ホテル。なんでこんな町に都会であるような、こんな立派なホテルが存在するのだろうか。思わずそう考えてしまう綱吉だったが、よくよく考えれば別におかしい話ではないという事に気がつく。

「雲雀さん辺りが作らせたのかな？」

この並盛町の表から裏まで取り仕切っている風紀委員長だ。

群れるのは嫌いだが、かといって下手なものを作って景観を損ねる事を嫌ったのかも
しれない。

そう考えているとリボンがユニを連れてホテルの中に入っていく。

「おい、ダメツナ。早く行くぞ」

「分かってるよ」

リボンに急かされ、綱吉は駆け足で進み、扉の前に到着する。

「はあ、何だか……………緊張するな」

この扉の先に居るのはマフィア関係者だけである。

果たして、どこのような人外魔境がひしめいているのだろうか。

「とつと開けろ」

緊張から扉を開けることが出来ないでいると、痺れを切らしたりボンが容赦なく扉
を蹴り開ける。

バタンと盛大に音を立てて扉が開かれた瞬間、中に居た人達の視線が一斉に綱吉達に
向けられる。

「お、おいリボン……………何で勢いよく蹴り開けたんだよ」

「主役の登場だからな。目立った方が良いだろ」

「良くないよ！」

「本当は扉を蹴り破りたかつたんだけどな」

「もし蹴破つてた場合、お金とか誰が払うんだよ」

「勿論お前だぞ」

「お前本当にふざけんなよ!!」

目立たないように静かに入つてやり過ぐそうと考えていたのに、このタレ眉のせいですべてがご破産となった。

その事実に関吉は殺意を込めてリボーンを睨み付けるものの、当の本人はどこ吹く風だった。

「つたく……………」

綱吉は不貞腐れながら頭を掻きながら周囲に視線を向ける。

赤毛で傷だらけ、そして根暗そうな雰囲気身を纏う少年。その少年に付き従つているようにも見える巨乳の少女。

何故か見覚えがある赤毛の騒々しそうな少年。そんな彼の隣に居るおじさん。

ここからでは距離が遠くて顔が見えないが、金髪の少年少女。

中に居る人数はそこまで多くは無いが、誰も彼もが自分の事を観察しているようにも

見えた。

本当にあまり長居はしたくない場所だ。

「はは、相変わらずだな。リボン」

内心、家庭教師という名の理不尽に対して怒りを募らせていると、金髪の青年が近付いて来た。

その背後には髭を生やした黒スーツの男性が立っている。

「久しぶりだなディーノ。相変わらずへなちよこなのは変わんねえな」

「こう見えても成長してるんだぜ？」

「どうだかな。ボスはまだまだ俺達が居ないと不安で仕方がないぜ」

「ロマーリオ、お前なあ……………」

にかつと朗らかな笑みを浮かべながら三人は楽しそうに談笑する。

「おじ様が今話してらっしゃるのはキャバッローネファミリーのボス、跳ね馬の異名を持つディーノさんとその部下のロマーリオさんです」

「なんか、随分とリボンと親しいみたいだけ……………」

「ディーノさんはおじ様がツナさんの家庭教師をやる前に受け持っていた人です。ツナさんから見たら兄弟子になりますね」

「ふうん……………成る程……………」

ユニの説明を聞いて綱吉は納得する。

通りで随分と親しいわけだ。だがあのリボーンの教え子をやって、よくあんなに親し気に話せるものだ。

そう考えていると、金髪の男、デイーノは自身の方に視線を向ける。

「で、そいつがボンゴレの後継者か？」

「ああ。その通りだぞ。まあ、マフィアになりたくないってごねてるけどな。昔のお前みたいに」

「へえ、どれどれ……………」

リボーンという言葉を聞き、デイーノは綱吉の方に歩み寄り品定めでもするかのように眺める。

「んー、何っーか……………色々いっぱいって感じがするな。そう、余裕が無さそうだ」

「えっ……………えっ」と

「あれだな。マフィアのボスとしては未熟もいいところだな」

「結構失礼な事を言うなこの人」

ニカツと笑みを浮かべながらそう言い放つデイーノに綱吉は思わずツツコミを入れる。

「ただまあ、何も心配する事は無いぜ。オレも昔はへなちよこデイーノって呼ばれてたからな」

「いや、そもそもマフィアのボスになるつもりなんか欠片も無いんですけど」

「最初からマフィアのボスになりたいだなんて言う奴は碌な奴じゃねえからな。お前ならきつと良いボスになれるさ」

「あの、話聞いてます?」

爽やかに笑いながら会話を続けるデイーノに綱吉は溜め息を吐く。

良い人ではあるのだろう。ただ何処かズレている。

とはいえ、今まで会った中ではかなり常識的な人間だ。

リボーンの弟子であるというマイナスポイントさえなければ、仲良くしたいと思ったのに。

その事実綱吉は両肩を落とし、自身の近くに一人の少女が立っている事に気が付く。

「久しぶり、ツナ」

少女はそう呟くと同時に綱吉の顎に手を添え、驚く暇も無く唇を重ねた。

普通と特別と夢

「沢田さん。何か弁明はありますか？」

広間の端にて正座で鎮座する綱吉の前で、ユニは笑みを浮かべながら立っていた。

尤もユニは顔以外全くと言ってても良い程笑ってはおらず、むしろその逆で明らかに怒っていた。

「あ、あの……………」

「何ですか？」

「……………すみませんでした」

歳下の少女、妹分とは思えない程の迫力を、凄みを見せているユニの前に綱吉はあるただただ謝るしかなかった。

一体どうしてこうなったのか、何で怒られているのか、彼女が不機嫌なのか。その理由が全くと言ってても良い程に分かっていない綱吉にはただただ謝るしかなかった。

そしてその隣では何故か自分の隣に居るリゾーナの姿があった。

リゾーナはまるで飼い主に甘える猫の様に綱吉の側にいた。

「悪いなツナ。庇いたい気持ちが無いわけでは無いんだが、今回は無理だ」

リボーンに至っては何故か綱吉から離れてディーノの肩に乗っていた。視線を向けつつもリボーンは一切此方を見る事は無く、視線を合わせる事は無かった。

「まあ、良いです。それでリゾーナさんはなんでツナさんにあんな事をしたんですか？」
ユニは視線を綱吉からリゾーナに向ける。
するとリゾーナは平然とした表情を浮かべた。

「挨拶」

「あ、挨拶って……………確かにイタリアではキスは挨拶ですけど、ここは日本ですよ？
それもあ、あんなディーブなのはイタリアでも挨拶にはなりません！」

「じゃあ挨拶じゃない、宣戦布告」

「せ、宣戦布告……………？」

「うん。同じ人を好きになった人同士。だから、私は負けないって伝えたかった」
強い意志を込めて言い放つリゾーナの姿に、ユニは息を呑む。

知らないわけではなかった。綱吉がエヴォカトーレファミリーに身を寄せていたことは前から話で聞いていたし、知ってもいた。だけど、彼に好意を抱いている人が居るとは思ってなかった。否、思わないようにしていた。

ユニは何とも言えない気持ちになる。

今まで抱いた事が無いような感情だった。それがどういったものなのか、幼いユニにはまだ理解出来ない。

ただ一つ分かる事があるとすれば、その感情が良くないものだけのことだけだが、

「私も、私も負けません。沢田さんは渡しませんから」

胸の内から湧き出たこの想いをユニは否定する事が出来なかった。

それどころか、その感情のままに目の前の敵を睨む。

「うん。分かった。それでも、私が勝つから」

ユニの睨みにリゾーナは微笑ましいものを見るような笑みを浮かべる。

大人の余裕、いや、幼馴染の余裕というやつなのだろうか。

そんな風に火花を散らす二人を、綱吉は死んだ魚のような目で見ていた。

「……………どうして、どうしてこうなったんだろう」

綱吉は心の底から思った事を言葉にする。

その顔は酷く疲れていた。

何せ、親友だと思っていたリゾーナが自分に対して好意を抱いているというのを知ったのだから。そして妹分であるユニと自分を巡って争おうとしているのか。

何でこんな昼ドラみたいなのを自分で体験する羽目になっているのか。

と、いかかユニといいリゾーナといい、何で二人の好意に気が付かなかったのだろうか自分は。よくよく思い返せば異性を相手にデーブな方のキスをする時点で好意があるのは分かるだろうに。

鈍感にも程がある。

「明日からリゾーナにどう接すれば良いのか、分からないよ」

「モテモテだね沢田ちゃん！」

全く気付いていなかった、気付こうとしてなかった綱吉が自嘲しているとロンシャンが笑みを浮かべて話しかけてきた。

一見茶化しているか、もしくははぶぎけているような感じだが恐らくこれは素だ。

悪意を微塵も感じないロンシャンの笑顔を見て、綱吉は溜め息を吐く。

「ロンシャンだっけ？ お前のその樂觀さは素直に尊敬するよ」

「それ程でもないって！ そうだ！ こうして親交を深めた事だし合コンでもやらない？ 可愛い子いっぱい紹介するよ！」

「今のオレの置かれてる状況見てそれ言ってる!？」

全くと言っても良い程に空気の読めていないロンシャンの発言に、綱吉は思わずツツコミを入れる。

ロンシャンが「合コン」と言った際にユニとリゾーナの視線が鋭いものに変わったよ

うな気がしたのは、決して気のせいではないだろう。

「アルビート、一つ聞いていい？」

「別に構わないが」

このままロンシャンと会話をしていたら向こうのペースに飲まれかねない。

そう考えた綱吉はアルビートに問いを投げかける。

「何でリゾーナの事、教えてくれなかったの？」

「普通気付くだろう」

正論だった。これ以上無い程の正論だった。

「それにエヴオカトーレファミリーの次期ボスとして、次代のボンゴレに嫁がせるのは悪くない話だからな。それに、オレ個人としてもリゾーナの事を応援している」

「……………ボンゴレを継ぐ気は皆無なだけどき、仮に継いだとしても他に婚約者が居るような奴に嫁がせるのは良くないんじゃない」

「一夫多妻という言葉がある。どちらにしろ、お前ならリゾーナを任せても問題無い。むしろ、お前以上に適任な奴が居ない」

「う、うぐう……………」

アルビートのその言葉に綱吉は何も言えなくなる。

ボンゴレを継ぐつもりは無い、とは言っても今更普通に生きられるとは欠片も思っ

いない。

平々凡々な暮らしを送るにはこの瞳があまりにも邪魔過ぎる。

それに加えて以前夢の中で愛歌が夢を見せた事で、そういった選択肢を除外してしまっている自分が居る。

とはいえ、自ら望んでマフィアのボスになりたいかと聞かれればそういう訳では無い。むしろその反対だ。例え未来でボンゴレ10代目になるのが決まっていたとしても、出来る限り抗うつもりである。

「……………はあ」

何故か酷く疲れた、精神的に疲労した綱吉は二人の側から離れる。

すると一人の少年が歩み寄って来た。

確か、古里炎真という名前だっただろうか。

「隣、良いかな?」

「良いよ」

炎真は綱吉から許可を取ると、その隣で壁に背を預ける。

そして手に持っていた、紫色の液体が注がれたグラスに口を付ける。

「それ、ワインじゃないよね?」

「ワインだよ。これしか無かったからね」

「……………未成年にアルコールを出して良いのかよ」
少なくとも日本の法律上ダメな筈だ。

尤も、ここに居るのは裏社会の関係者達。表社会の法律など守るわけがないだろうが。

「ねえ、一つ聞いても良い？」

綱吉が頭を悩ませていると炎真が話しかけてくる。

「別に良いけど……………何？」

「きみはさ、マフィアになりたくないんだよね？」

「あ、うん。その通りだよ」

「それはどうして？」

「どうしてって言われても……………普通マフィアなんかになりたくないと思うけど」

「普通、ね」

炎真は目を細めて、口を開く。

「きみが普通という言葉を使うべきじゃないよ」

そして毒のある、否、明確に綱吉を否定する言葉を呟いた。

「えっ……………？」

「はじめは普通だったのかもしれないけど、きみはもう普通じゃない。ボンゴレファミ

リーの後継者に選ばれたからじゃない、もつと前から………きみがその特異な目を手に入れてからだ」

「た、確かにその通りだけど………」

「その力で大空のアルコバレーノを救う事が出来た。僕はアルコバレーノの事情なんて全く分からないけど、最強の赤ん坊達が解こうとしている呪いという奴を、きみは解くことが出来た」

「………呪いの全てを解除できたわけじゃないよ」

「アルコバレーノが必死になって解こうとして、なお解くことが出来なかったものだよ。それを少しでも解いた時点できみは普通じゃない」

炎真が突き付ける言葉の刃に綱吉は思わずたじろぐ。

「それに、マファイアになりたくないって言いながらもきみはマファイアの力を借りてるじゃないか。エヴォカトーレファミリーのところに身を寄せた事とかさ」

「………オレは、エヴォカトーレがマファイアだと知らなかった」

「知らなかったとしても普通じゃないのは分かるでしょ。その能力を手に入れたきみはその能力を制御する為に、父親の伝手でエヴォカトーレの下に身を寄せる事になったんだから」

「まさか………父さんが………？」

「——呆れた。きみの眼つて万物の死は見えるくせに、自分の事とか周りの事とか全く見れないんだね。いや、違うか。きみは見たくないものを見ないようにしているだけか。或いは意図的に目を逸らしているだけか」

心底呆れたと言わんばかりの炎真の瞳。

今まで向けられた事の無い感情が込められたその視線に綱吉は静止する。

「分かってないみたいだから言っておくよ。きみがマフィアのボスになろうがなからうが待っているのは血に塗れた未来だけだ。普通の生活を送るにはその異能は邪魔過ぎる」

「……………そんな事、分かっているよ」

「いや、分かっていない。もう一度言うよ。マフィアになりたくないって言いながらマフィアの力を借りているきみが普通なんて使うべきじゃないよ」

まるで責めているかのように突き刺してくる炎真の言葉に綱吉は言葉を失う。

何も言い返す事が出来なかった。彼の言う言葉全てがその通りだったのだから。

「それに、本当にマフィアのボスになりたくないって言うのなら他にやりたい事とか、きみにはあるの?」

「……………ゆ、夢?」

「そう、夢。その様子なら夢とかやりたい事とかも無いみたいだね」

そう言うのと炎真は踵を返し、綱吉に背を向ける。

「夢ややりたい事とかも無いのなら、マフィアのボスになるのがきみにとって一番良い選択だよ」

将来

「どうしたんですか？ そんなに黄昏て」

ボス、ボス候補、側近の顔合わせもひと段落つき、綱吉は外で一人黄昏していると声を掛けて来る人が居た。

一体誰だろうか？ 綱吉は声が聞こえた方向に視線を向ける。

視線を向けた先に居たのはお洒落なドレスを身に纏ったユニだった。

「ユニ……………」

「心なしか顔色が悪いようにも見えますが」

「うん。ちよつとね……………」

ユニの問い掛けに綱吉は曖昧な答えを返す。

姿を確認するまで聞きなれた妹分の声が分からなかったという事実には軽くショックを受けるも、それ以上に先程炎真から向けられた視線を忘れる事は出来なかった。

あの時の炎真の瞳には自身に対する激しい憎悪が込められていた。

「……………憎まれるって、こんな感じなのか」

今まで失敗したりして見下されたり、直死の魔眼という破格の異能を持っていること

から羨望の眼差しを向けられていた。

中には化け物を見るような目で見られた事もあったし、ユニやリゾーナのように自身に好意的な視線を向ける者も居る。

いつかの白いののように何とも言えない感情だつて向けられた事もある。

だが、こうして直接憎しみを向けられる事は初めてだった。

「あそこまで憎まれる事をした覚えは無いんだけどなあ」

炎真との面識はおろか、名前すら知らない本当の意味で初対面の相手である。

当然ながらあそこまで憎悪を向けられる謂れは無い。そもそも出会った事すら無い相手なのだから。と、なればあそこまで憎悪を向けられているのはボンゴレファミリ―が関係しているのだろう。

それだけならば別に対して気にしない——わけではないがここまで落ち込む事は無かった。

落ち込んだのは彼の言った『夢』という言葉だ。

「大丈夫ですか？ 本当に体調が悪いようにも見えますけど」

「ちよつとね。雰囲気酔っちゃったかも」

「もしかしてさっきのリゾーナさんが関係しているんですか？」

「いや、そつちは全く関係ない。いつも通りだったし」

「そうなんですか」

瞬間、ユニから物凄い圧を感じた。

表情も笑顔で固定されているにも関わらず、明らかに不機嫌だった。

一体何が彼女の機嫌を悪くさせるのか、綱吉には分からなかった。

「……………ユニはさ、将来何をやりたいとかかってあるかな？」

綱吉は手すりに背を預け、ユニに問いかける。

「将来、ですか？ それでしたら多分ツナと一緒に」

「そういうのじゃなくてね。将来何になりたいかとかかっていう話。例えばほら、将来巨大ロボになりたいとか」

「それがツナの将来の夢だったんですか？」

「子どもの頃の話だよ」

あの頃は本当に幼かった。恥ずかしそうに綱吉は笑う。

「さつきさ。シモンファミリーの炎真つて人に言われたんだ。夢はあるのかって。やりたいことが無いのならボンゴレ10代目になった方が良かったって」

「それは……………」

「いつもなら、リボンが相手なら言い返せたんだけどさ。言い返せなかったんだ。多分、否定するだけの材料も、勇気も無かったんだと思う」

炎真の言う通り、自分はマフィア等の裏社会から色々な恩恵を受けて今を生きている。

それなのにマフィアのボスになりたく無いなんて言つたところで説得力なんか無いし、何をふざけた事を言っているんだと思われるだけだ。

実際、炎真が怒つたのはそれもあるのかもしれない。

マフィアになりたくないと言っているくせに他にやりたい事も無いのだから。

「改めてオレの考えが甘かつたつて思い知らされたよ。この眼があるから普通には生きられないつて分かつてたつもりだった。分かつているつもりになつてたんだ」

もし、マフィアにならず一般人として生きる道を選んだらどうなるか。

どうにもならないだろう。マフィアを辞めたからつてボンゴレファミリーの血縁である事には違いない。利用価値がある奴を見逃す理由は無い以上、敵は間違いなく襲つて来るし、ボンゴレファミリーとの縁が途切れるわけでも無い。

何より、直死の魔眼を持ったまま普通の一般人として生活するのも難しいだろう。

この瞳は見えないものを見る事が出来る。当然のように厄介ごとはやつてくる。

そしてマフィアにならないならば今まで出来た縁も捨てなければならぬ。

獄寺隼人、アルビート、リゾーナ、リボン、そしてユニ。

彼等彼女等とも出会う事は出来なくなる。下手すれば今まで出会つて来た少なくな

い人達とも別れなければならない。

そんな色々沢山あるものを全て捨てなければ一般人として生きていけないなら、一般人になる価値は無い。

「本当、酷い笑い話だよ。マフィアにならなかつたら全てを捨てなければいけないくて、今を大切にしたいならマフィアになるしかないんだから。仮にマフィアにならなかつたとしても結局表社会じゃ生きられないし」

「ならマフィアのボスになれば良いと思いますが」

「それが一番なんだろうね。でも、情けない話だけど怖いんだ」

そう呟くと綱吉は両目を手で覆う。

「マフィアのボスになればきつと、ずっと沢山の死を見る事になる」

「はい。そうですね」

「それを見て、死を受け入れるようになるのが怖いんだ。オレは直接死を見る事が出来るから余計に」

そう言った時、自分は今の自分のままでいれるだろうか。

恐らく、今のままじゃいられないだろう。

「ごめんね。こんな情けない事言っちゃって」

「情けなくなんかありません」

綱吉の言葉を聞いてユニが優しく語り掛ける。

「ツナは他の人より多くのものを見る事が出来る。それは他の人には無い特別な力です。だからこそ、戸惑うのは当たり前なんです」

「ユニ……………」

「大丈夫です。ツナはきつと変わらない。絶対に変わりません。貴方の妹分にして婚約者の私が保証します」

そう言つてユニは微笑む。

「……………ありがとう。ユニ」

歳下の女の子に諭されるなんて情けない。

内心そう思つてしまうが少しだけ楽になった気がした。

綱吉は目を見開いて外の光景を少し眺め、少しだけ目を細めてユニの方に向き直る。

「でもまだマフィアになるかは決められないよ。流石に今すぐはね」

「大丈夫です。どの選択を選んでも私はツナについて行きますから——それはそれとしてリゾーナさんとの関係についてちよつと話を」

そう言つて詰め寄つて来るユニに綱吉は乾いた笑みを零す。

「リゾーナとの関係つて、さっき言った通りなんだけど」

「本当ですか？」

「嘘は付いてないって」

さつきアルビートに押し付けられたような気はするが、親友であることは違いない。ユニに弁解しながらも綱吉は懐からナイフを取り出して逆手に持ち、背後に向かつてナイフを振るう。

綱吉の背後には何も無く、ナイフは空振る——事は無く、ゾブリという音と共に刀身が何かに沈む。

ポタポタと赤い血がナイフの刃をつたり、地に落ちた。

「何故、気が付いた？」

バチバチと音が鳴ると同時に綱吉の背後に一人の男が姿を現す。

緑色のスーツに黒い球体がビツシリついている奇妙な服装を身に纏った、とてもではないが普通とは言えない格好をしていた。

男の腕には綱吉が振ったナイフが深々と突き刺さっている。

「オレの瞳は万物の死を見る事が出来る。例えば姿を消していたとしても、何も無い所を線と点が動いていたら何かあるって思うだろ」

「まさかヴェルデ博士の光学迷彩を見破られるとは……………それが貴様の持つ異能、直死の魔眼か！」

「こっちに近付いて来てたから咄嗟にナイフで刺したけど……………敵って事で良いんだ

よな?」

綱吉の瞳が橙色が混じった青に変色する。

「まあ、そんな如何にも不審者ですって言わんばかりの格好をして敵じゃないってわけが無いよな!」

ナイフを振るって男の腕を斬り落とし、綱吉は舞うように後方に下がる。

「ユニー! いきなりで悪いけど逃げるよ!!」

「は、はい!!」

突然の事態に困惑するユニを抱き抱えて、綱吉は不審者然とした装いをした男から逃走した。

十十十

「まさか……………いとも容易く斬り落とされるとは」

綱吉とユニの二人が逃げ去った後ろ姿を眺めつつ、男は地面に転がった自身の右腕を拾う。

切断面はとても綺麗で、とてもではないが沢田綱吉が持っていたような市販品のナイフで出せる切れ味では無い。

「正しく異能という他ない。ヴェルデ様が欲しがる理由も分かる」

男はそう呟くと拾った右腕をくっ付けようとする。

当然のことながら腕がくっつくことは無く、また動くことは無かった。

「ふむ。くっつくことは愚か、遠隔で動かす事も出来ないとはな。少し厄介だ」

そう言うとも男は使い物にならなくなった自身の腕を捨てて、耳に装着していたインカムを口元に宛がう。

「此方A。標的に気付かれ交戦を開始したものの逃げられた。よつて、予定通り部隊全員で襲撃する——全員、殺すつもりで挑め」

敵襲と嘆き弾

「突然だけど敵襲！」

ユニを抱き抱えて扉を蹴り破り、部屋の中に入った綱吉は間髪入れずに言い放つ。

突然蹴り破って入って来た綱吉を訝しむ者も居たが、その宣言を聞いて何が起こったのか、そしてこれから何をすれば良いのか直ぐに判断し、各自戦闘体勢に入る。

数人は何が起こってるのか分かっていない様子みただったが。

「……………つちー！」

視界の端に、何も無いにも関わらず死の線と点が動いているのが映った事に舌打ちし、それに向けてナイフを投擲する。

投げられたナイフはそのまま姿を隠している何者かに突き刺さる。

「ぐわっ!!」

ナイフが刺さった事でバチバチという音が鳴ると同時に光学迷彩が一瞬解除され、何者かは姿を現す。

さつき出会った男と同じように全身タイツの珍妙なスーツを着ている。

誰がどう見てもさつきの男の仲間で、自分達の敵なのは明白だった。

尤も、その敵を知っているのは自分達だけだが。

「そこかつ!!」

それでも流石は一組織を背負うボスといったところか。

デイーンは一瞬だけ姿を現した男に鞭を振るう。

鞭は男の身体に巻き付いて拘束し、そのまま男ごと天井に叩きつけた。

「……………なんつー力」

あんな鞭で人間一人を拘束し、尚且つ持ち上げて天井にぶつける。

とてもではないが真似出来ない、人間技では無いだろう。

衝撃によって意識を手放し、ベチャツという音と共に地面に落ちた男から視線をリ

ボーンに向ける。

「リボーン、お前……………気付いてただろ」

「ああ」

綱吉の指摘にリボーンは臆面無く呟く。

「気付いてたつーか、最初から見えていたな。コイツらのボスは恐らくアルコバレーノの一人であるヴェルデだ。光学迷彩なんて暗殺に向いているのをヴェルデの奴が対策しないわけないからな。一定の年齢の奴には光学迷彩が発動しないんだろ。まあ、ツナに効かなかったのは予想外だっただろうがな」

「この眼は万物の死を視る。どんな異能で姿を隠しても、どんな技術で気配を隠しても、死を偽る事は出来ない——それで、何で黙ってたんだよ」

「そっちの方が面白そうだったんだもん」

「面白くもねえよ」

リボーンの問題発言に綱吉は青筋を浮かべる。

本当にこの赤ん坊の姿をした悪魔は何を考えているのだろうか。

「ハハハハハハハハハ！ いやー、変わらねえなりボーン」

内心怒りを募らせていると何が面白かったのかディーノは大笑いする。

笑いごとじゃない、と綱吉は怒りの視線をディーノに向ける。

「おっと、悪いな。けど昔を思い出しちまってな」

「昔、ですか?」

「ああ。オレも昔はなよっちかったし、リボーンが無茶ぶりによく振り回されたもんだ。大勢の敵に囲まれた状況を一人で何とかしろって言われた事もあったしな」

「怒っても良いんですよ?」

と、どうか怒らない方が不思議だ。

そう思う綱吉にディーノは笑みを浮かべながら頭の上に手を乗せる。

「まあ当時は怒ったし理不尽だと思っただ。でもな、リボーンは出来ない事はやらせな

いんだ。やらなくちゃいけない時とかは兎も角、本当に無理なら絶対にやらせない。その証拠にツナはリボーンの無理難題をこなしてきたんだろ？」

「それは……………まあ……………」

思い返せばリボーンが来て以来、毎日のように無茶苦茶な事をやらされてきた。

でも、よくよく思い返してみれば本当に無理な事は一度だつて無かつた。テストに關しては中々成果が出てないが、それでも頑張れば努力すれば良い点を取る事だつて不可能な事ではない。

「リボーンが言わなかつたつて事はオレ達なら乗り越えられる、つて思つてたんだと思つて？」

「……………それはリボーンを好意的に解釈しすぎだと思ひますけど」

綱吉は視線をリボーンに向ける。

件の人物であるリボーンはとても良い笑みを浮かべていた。

何も知らない人間が見れば天使のような、全てを知つている人間からしたら悪魔のような顔をしていた。

「多分、そういう事なんでしょうね」

だとするならばリボーンは自分ならばこれぐらい乗り越えられると判断したという事。

乗り越えられるといっても文字通り死ぬ気にならなければ乗り越えられるような難易度だろうが。

意識を手放した男の下に歩み寄り、突き刺さっていたナイフを引き抜く。

「でもまあ……………やるしかないよな」

男の血がべつとりと付いたナイフを片手に構え、入って来た扉の方に視線を向ける。

その瞬間、扉が破壊されて中に人間が大勢、そして非常に大柄な人間とは思えない存在が室内に入って来た。

襲撃者達は数人だけ緑色のスーツを身に纏っていたが、光学迷彩の機能を使っていないらしく、姿がはっきりと見えていた。だがそれ以上に目を引くのは大柄な何かだ。

直死の魔眼はアレが人間ではないと教えてくれている。人間が持つ生命や魂が存在しない。

代わりに見えるのは物の死だけだった。

尤も、あれが何でアレ関係無い。人間じゃないのなら気にする事なく殺す事が出来る。

「炎真下がっている」

「アーデルハイト……………」

「貴方の力はここで晒す訳にはいかない。私達の目的の為に」

「……………分かった。それじゃあ、任せても良い？」

「無論よ」

シモンファミリーの二人、古里炎真は鈴木アーデルハイトに任せて後方に下がる。

それを見て、綱吉は炎真が戦わない事に疑問を覚える。

恐らくだが炎真はかなり強い。なのに何故部下に任せて戦わないのだろうか？

「ツナ、私達も戦う」

「昔を思い出す……………懐かしいな」

疑問に思う綱吉だったが、アルビートとリゾーナが声を掛けたことによりその事を脳の片隅に追いやる。

「ユニは後ろに下がっていて」

「は、はい！ 分かりました！」

ユニを後ろに下がらせ、改めて襲撃者達と向かいあう。

そして戦闘が始まろうとした瞬間、一発の銃声が鳴り響いた。

銃声が鳴り響いたのは敵側ではなく味方側からで、銃を撃つたのはトマゾファミリーのマングスタとかいう中年の男性で、撃たれたのは同学年でトマゾファミリーのボスである内藤ロンシャンだった。

「って、何してんのーっ!!？」

味方である筈の人物、それも上司と部下である筈の関係性の二人の内乱に綱吉は素に戻ってしまった。

敵はおろか味方の誰も彼もが困惑する中、マンガスタは声を上げる。

「ご安心を。これは我がトマゾフアミリーに代々伝わる特殊弾です！ ロンシャン君はこれから真価を発揮するのです！」

自信満々にそう宣言するマンガスタの言葉に呼応するかのように、倒れたロンシャンの身体にジツパーが出現する。

これから何が起きるか理解した綱吉はユニの背後に周り、彼女の瞳を隠す。

「沢田さん？」

「ユニは見ちゃダメ」

ジツパーが下に下がると中から額にネガティブとしか形容出来ない人形の上半身を生やした下着姿のロンシャンが現れた。

「もう、お先真っ暗コゲ……………過去も真っ暗コゲ……………」

ついさつきまで元気を通り越してウザ過ぎる性格が一変し、思わず心配してしまう程にネガティブになってしまった。

「あの、マンガスタさん。何これ？」

「これは我がトマゾフアミリーに代々伝わる特殊弾、嘆き弾です！ 撃たれた者は一度

死んだ後嘆きながら復活するのです！」

「何で着拒したんだ春子ー!!」

「こ、こんなファミリーがああボンゴレII世を倒したというのか？」

涙を流しながら嘆くロンシャンを見て、アーデルハイトが何とも言えない表情を浮かべる。

「おもしれーな」

「全然面白くないからな！」

リボンが愉快そうな表情をしてロンシャンを見る姿に綱吉は戦慄する。

あれは間違いなく自分で試すつもりだ。絶対に嫌だ。

「けど効果はあったみたいだぜ？」

デイーノの視線の先には何とも言えない表情をした敵がおり、誰も彼もがロンシャンに同情していた。

「可哀想に……………」

「一方的に振られたのか……………」

「やはり女等信用出来ん！ 男が良い！」

恐るべき嘆き弾、とでも言うべきか。ふざけているがその効果は確かなものだ。絶対に自分は喰らいたくないが。

敵側の戦意が薄れ、戦うのもバカバカしくなっている中、大柄なソレは唐突に動き出した。

機械的な駆動音と共にソレは腕を上げ、指から銃弾を放つ。

「ユニ！ 舌を噛まないようにね！」

「は、はい!!」

「のわー!!」

ユニを抱えて降り注ぐ銃弾の雨を回避する。

嘆き弾を撃たれてネガティブになっていたロンシャンも何とか避けていた。

「ば、バカな！ 何故嘆き弾が効かないんだ!？」

「そりや人間じゃないからね!!」

嘆き弾はあくまで相手の心に訴え掛けるものだ。

その相手に心が無い、慈悲が無い存在であれば効果なんか無いも同然だろう。

「お、オレ達は一体何を……………」

「やられた……………！ 敵の策に嵌るなんて……………!」

そして人間ではない何かの攻撃によって敵は正気を取り戻し、此方に戦意を向ける。

何だったんだ今の間は。何とも言えない気持ちになりながらも綱吉はユニを下ろし、

改めてナイフを構える。

「くつ、嘆きが足りなかったのか！ ならばもう一度……」

「だから止めろって！ 戦意が薄れる——」

再び嘆き弾を使おうとしたマンガスタを止めようと、彼の方を向いた瞬間だった。マンガスタが持っている拳銃の銃口が自分に向けられていることに気付いたのは。

「へっ、いや、ちよっ?!」

これから何をされるのか理解した綱吉は何とか回避しようとする。

しかし時既に遅く、マンガスタが撃った嘆き弾は綱吉の眉間を貫いた。

薄れ行く意識の最中、胸の内から込み上げてくる感情に全身を支配される。

「は、はは——ははははははははははははっ!!」

止まることの無い激情に支配される感覚を味わいながら、綱吉の意識は再覚醒する。

— ADVENT BEAST —

人類悪復活

——それは獣の雄叫びだった。

獣の覚醒

「あらう？」

彼方と此方の狭間としか言いようの無い場所にて、愛歌は確かに聞いた。

それは間違いなく獣の叫びだった。

「ついに目覚めたのかしら？」

自身のサーヴァントと同じ力、人理を否定する獣の星。

弟のように思っていた異なる世界、異なる宇宙、異なる法則の下に生きながら根源に接続した同胞。

七つの人類悪とは異なる、別の宇宙において新たに産まれた原初にして冠位の獣。

特別目に掛けていた弟のように思っている相手が産声を上げたのだから、愛歌としては「おめでとう」と言っておきたいという気持ちになる。

しかし――、

「でも、少し変ね。まるで強引に引き摺り出されたみたい」

++++

マングスタの嘆き弾が綱吉の眉間に命中し、仰向けになって地に倒れる。

その瞬間、一人を除いたこの場に居る全員に凄まじい悪寒が襲った。

まるで背骨の中に、脊椎の中に直接氷柱を突っ込まれたかのような、とてつもない悪寒だ。

ここに居れば間違いなく死ぬ——それもより最悪な形で。

「——モスカああああああ！ ソイツを始末しろ!!」

襲撃者の中の一人が大柄の人型に向かって叫ぶ。

「貴様！ ヴェルデ様は生捕りにしろと……………」

「お前は分からなかったのか!? あいつを今殺さなければ死ぬのはオレ達なんだぞ!!」

「だが——」

「もういい！ 行けヴェツキオ・モスカ！ 貴様の全装備を使って奴を塵一つ残すなっ

!!」

男の命令にヴェツキオ・モスカと呼ばれた人型が反応し、有していた装備を全て展開する。

背部からは多数の銃火器を、腕からはミサイルを、胸部には圧縮粒子砲を携えていた。

「モスカだどつ?!」

「旧イタリア軍が開発していた軍事用のロボットだな。ヴェルデの事だ。サルベージして自分好みに改良したんだろ」

裏社会の事情に精通しているディーノのリボーンはモスカと呼ばれた人型を見て顔を顰める。

噂通りのスペックならば間違いなく厄介極まる。いや、間違いなく噂以上のスペックを持っているだろう。

あのマッドサイエンティストと悪名高いヴェルデが作ったのだから。

だが、そのモスカが真価を発揮することは無かった。

「……………はっ?」

武装を展開したかと思つたモスカが刃物で切断されたかのようにバラバラになり、地面に落下する。

ガシャンという音を立てて様々なパーツをばら撒きながら、恐るべき軍用ロボットは己が仕事を全うする事なく、その機能を停止させた。

「一体何が——」

起こつたのか——そう呟くよりも前にいつの間にか起き上がっていた綱吉がモスカだった残骸の真後ろに立っていた。

ツナがモスカを倒したのだろうか?

バラバラになったまさかの鋭利な断面を見て、ディーノはそう判断する。

さっきの異様な気配は気のせいだったのだろう。

そう思い込もうとしてデイーノは綱吉に駆け寄りうとして、

「待て、デイーノ」

リボーンの手によって止められる。

「ダメツナの奴、明らかに様子が変だ。うかつに近寄るんじゃねえ」

「あ、ああ」

警戒心を剥き出しにして告げるリボーンの言葉にデイーノはただ頷くしかなかった。

冷静に考えれば確かに今の綱吉の様子はおかしかった。

嘆き弾を撃たれば嘆きながら、ネガティブになりながら復活する。

にも関わらず、綱吉が嘆いている様子は欠片も見えない。

「お前は、誰だ？」

死ぬ気弾の効果も他では見られない形で現れた為か、今回の嘆き弾も似たような事が

起こっているのではないだろうか？

そう考えたリボーンは恐る恐る綱吉に近付こうとして――、

「あは」

綱吉が笑った事に気が付いた。

「はは、はははははははははは」

初めて聞くような笑い方に誰も彼もが恐怖を覚える。

特に沢田綱吉という人間の性格をよく知っているユニヤリボーン、アルビートとりゾーナは目の前の変貌した綱吉に困惑する。

沢田綱吉は特殊な目を持っている事以外はとても優しく、マフィアになるにはあまりにも不適切だ。

それが例え相手が機械だったとしても、戦闘中に笑うなんてありえない。

苛立ち紛れに毒をつくことはあるだろうが、そもそもとして戦いに喜悦を見出すような人間性をしていないのだ。

「ああ……………そうか、そういう事か」

そして笑うのを止めた綱吉はガシガシと頭を掻き始める。

ガシガシ、ガシガシ、ガリガリと音が変わるのに時間は掛からず、掻き巻いた後から血が流れ出る。

「本当、笑うしかない。どうしてもっと早くに決意しなかったんだろう。自分のことから愚かすぎるだろ」

口から出る言葉は自嘲で、瞳から流れ出る涙は血のように真っ赤。

瞳は充血を通り越して真紅になっており、鮮やかな蒼と橙が混じった虹彩と相まって一層不気味さを感じさせた。

「まあ、良いか。今からやれば問題無いし」

「何をゴチャゴチャ抜かしてるんだ!!」

痺れを切らしたのか襲撃者の内の一人が綱吉に向かって武器を振るう。

男が持つ武器は突起が付いた巨大な金棒で、当たれば無事では済まないだろう。

自らに向かって振るわれる金棒を見て綱吉は虚な目をして眩く。

「やっぱ悲しいな」

迫り来る金棒を回避し、すれ違いざまに腕を振るう。

「命が終わるのは、いつ見ても悲しい事だよ」

綱吉がそう眩くと同時に男の身体はバラバラになって崩れ落ちた。

何の感慨も無く、容赦無く人間の命を奪った綱吉に誰も彼もが愕然とする。

そして、綱吉の側頭部からズルリと音を立てて2本の角が生えた。

黒く捻れ曲がった2本の角が生えると死ぬ気弾を撃たれた時のように髪が長く伸び

始め、黒いスーツの上に死ぬ気の炎で出来たような和服のようなものを身に纏わせる。

「でもまあ仕方ないか。オレが求めるものにこれはいらないから」

バラバラに惨殺した男の屍の上に足を乗せ、襲撃者達に視線も向ける。

「じゃあ、次はお前達だ。精々足掻くが良い、無様であれ惨めであれ、貴様等に許された

権利だろう?」

「う、うわああああああああああああ!!」

ニツコリと笑みを浮かべながら呟く綱吉に襲撃者達は叫び声を上げながら攻撃を開始する。

拳銃に刃物、鈍器に拳句の果てにはミサイル等の兵器。一人の人間に対して向けるにはあまりにも過剰過ぎるものだ。

だがソレを向けている相手は強引に目覚めさせられた不完全な幼体とはいえ、人理を否定する獣だ。彼等の手持ちの装備では人理を、世界を相手にするにはあまりにもお粗末過ぎた。

当然のように攻撃は無効化され、一人、また一人と丁寧に殺されていく。否、彼からしたら殺すつもりなんてないのだろう。ただいらぬものをゴミに捨てているだけではない。

その事実が気が付いた時には仲間達は全員死に絶え、残された最後の一人となった彼は情けなく逃げ出した。

大の大人でありながらみつももなく悲鳴を上げ、恐怖に震え、股から漏らしながら獣から逃げようとする。

「助けを乞え！ 怯声を上げろ！ 苦悶の海で溺れる時だ！」

綱吉は、綱吉だった何かは逃げ出そうとする数少なくなつた襲撃者に追撃を加えようと迫る。

間違いなく、襲撃者は一人残らずバラバラになる事だろう。

「眠ってください——ツナお兄ちゃん」

その凶行を止めたのは唯一綱吉の変化に恐怖を抱かなかつたユニだった。

何時の間にか傍に近付き、獣のように暴れ狂う綱吉の後頭部に巨大なハンマーを振るう。

スコーンと気の抜けた音が鳴り、叩かれた衝撃で頭部に打ち込まれた嘆き弾が撃たれた箇所から排出される。

「がっ……………折角、目覚めたのに……………」

「貴方の目覚めはまだ当分先です。暫く眠って下さい——私が目覚めて全てを終わらせるその時まで」

「く、そ……………」

そう呟くと同時に綱吉は意識を失い、地に倒れ伏す。

身に纏っていた燃える着物のようなものは消え、元の黒いスーツに戻る。

頭部に生えていた二本の角にも鱗が入り、最初から存在しなかつたかのように消失する。

「はあ……………まさか、ここでビーストになるとは思いませんでした」

持っていたハンマー、死ぬ気弾の効果を終了させられるリバーズスーツが嘆き弾にも効

いて良かった。

ユニは内心そう安堵しつつ、膝をつく。

次に目が覚めた時には今の出来事は忘れているだろう。後は今回の出来事をどう誤魔化すかだが、何とかなるだろう。

「嘆き弾の効果はビースト候補者からしたら強制的に目覚めさせられる劇薬のようなもの、10年後のツナに聞いておいて正解でした」

とはいえ、こんな風に予測も対策も出来ないような状況で暴走させられるとどうしようもないのだが。

遠くから駆け寄って来る皆の姿を視界に収めながらユニは前髪をかき分ける。

「本当、先に自覚出来ていて良かったです」

そこには小さくも確かな一本の角が生えていた。